

# アイカツで恋愛モノ

亜戸 健一@沼太郎

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

アイカツシリーズのヒロインたちとの恋愛モノです。

オリジナル主人公の飯島司+αとの恋愛の模様を楽しんでいただくものです。

筆者がアイカツシリーズの恋愛モノのお話の少なさに影響され「ないなら書くつきやねえ!」という思いで書き始めました。サクサク読めるように1話当たりの分量は少なめです。遅筆のため、更新ペースは激遅です。ゴメンナサイ。処女作ですが頑張つていこうと思います。

各校の男子部については、ほぼ独自設定です。

アイカツのNLモノもつと流れれ。

主人公①：飯島 司（いいじま つかさ）

性別：男

おもに日曜の朝9時に活躍している。

主人公②：影山 勉（かげやま つとむ）

性別：男

デザイナーとしてドレスを作っている。

ただし、ブランドとして確立させているわけではない。

目次

ローラ

君を口ツクオン

秋の心と書いて「愁う」

女心に秋の天気

卷之二

1

ゆうと台まり

”ステリジは誰のためこ”

”ステージは誰のために”  
②

“酸いも甘いも”

“データの戦略”

告白と保留

”特別篇”  
ゆめの誕生日①

特另篇

香溢如烟

舊約全書

卷之三

真夏ちやんと一業

夜空さんとデート

## 真昼ちゃんへの告白

二人とのこれから

## 『特別編』 真昼の誕生日①



“特別編”

あおいの誕生日①

“特別編”

あおいの誕生日②

ツバサ✓

“特別篇”

ツバサの誕生日

エルザ✓

“特別篇”

エルザの誕生日

蘭✓

“特別篇”

蘭の誕生日

そら✓

スランプ

アイドル

アイドルとデザイナー

デザイナー2人

気づき

おまけ他

司くんの設定+ $\alpha$

一周年記念のおまけ “司くん女の子になる”

231 228

224 220 216 212 208

203

200

197

192 188

# ローラ「

“君をロツクオン”

最近彼のことを目で追いかけるようになつた。

その彼の名前は飯島司。男子部の中學3年生。

心当たりはある。

ドラマの撮影の時だ。

ドラマの撮影のとき、ちょっとした事故があつてセットがアタシに向かって倒れてきた。その時に彼がアタシをかばつて助けてくれたことがきっかけだった。

ありきたりなかも知れないが、こういつたことに不慣れなアタシには初めてのことだ、とても意識せざるを得ない事態だった。



「はあ……」

「どうしたの、ローラ。そんなにため息ばかりついて。」

「ああ、真昼。ちょっとね」

「悩み事？ 私でよければ相談にのるよ」

悩んではいるものの、これは話してしまつていいのだろうか。

そんなことを思つている時、ゆめと話しながら歩いている彼を見つけた。

「それでさー、小春ちゃんつたら……」

彼はゆめの話にきちんと相槌をうつてている。

聞き上手なのだろう。ゆめが楽しそうに彼に話しかけている。

「ふーん。なるほどなるほど……」

真昼が一人でなにか納得している。

「ねえ、ローラ」

「何？」

「まさか悩みつて、ゆめが彼に取られちゃうつてこと？」

「え?! どうしてそうなるのよ?!」

「だって、あの二人の方をじーっと見つめてたじやん」

「いや、確かにそうだけどさ……。そういうことじやなくて……」

「じやあいつたいどうしたのよー

「それは……」

また言い淀んでしまう。

だつて、言えるはずがないじやない。

『彼のことが気になる』なんて。

アタシたちはまだ中学生。みんな恋バナには興味がある。ただし、ここは四ツ星学園。みんなアイドルを目指しているのだ。だからそんな中での恋愛なんて考えられない。アイドルにスキヤンダルは厳禁だもの。

ごくまれに交際をしている人たちがいるが、ちよつとした奇異の目で見られやすい。

この学校は古くからアイドルを輩出していて、昔からの「アイドルは恋愛をしてはいけない」という風潮がいまだに少し残っているからだろう。

• • •

「 そういうのは建前で、本音を言えば恥ずかしいのだ。  
今まで恋をしたこともなかつたアタシは、初めての感情に手が付  
けられないでいる。」

でも、そんな情けない姿を見せるのが恥ずかしいのだ。  
これが恋なのだろうか。

「あ、ローラ！ 真昼ちゃん」

ゆめが手を振りながらこっちに近づいてくる。彼も一緒だ。

「ゆめ、おかげり。今田のお仕事はどうだつたの?」

に迷惑かけちゃつた。あははは……」

「大丈夫、  
気にしてないから」

「……」

「どうしたの、ローラ？」

「うえつ?!べ、別になにもないわよ……」

真昼とゆめと司の話が耳に入らない。

どうしてだろう。それに顔が熱い。心臓の鼓動も速い。

誰かの手が私の額に触れた。

「うーん。ちょっと熱いな。もし体調が悪かつたら——

“彼”だった。

「——ツ?!

突然のことに、初心なアタシの頭の中はパニックになる。

「だ、大丈夫! ちょ、ちょっと用事を思い出したからアタシ席外すね

！」

思わずアタシは逃げるよう立ち去ってしまった。  
そういえば、助けてもらつた時のお礼、してなかつたな……。



寮の自分の部屋に戻り、少し冷静になつた頭で何をしでかしたのか  
考えていた。

(はあ……。アタシ、どうしちゃつたんだろ)

(彼のことを考えると顔が熱くなつて心臓がバクバクいつちやうし)  
(ああ……、絶対変な子だつて思われてるよ……)

そんなことを考えていると、真昼が部屋に入つてきていた。

「これは相当重症みたいね」

「真昼……。アタシ、どうしちゃつたのかな。あんなの、いつものアタ  
シじゃないみたい」

「……ローラ、真面目に聞いてね」

「う、うん。」

「おそらく、ローラは恋してるの」

「こ、恋つて、ええええ!? うそ、アタシが?」

「そ。さつきの行動を一通り見てたらそう思つちゃうよ」

「そ、そうなんだ……」

「ま、とりあえずわたしはローラを応援してるのでよ」

「あ、ありがと」

この時、アタシは恋を自覚した。

(恋、かあ……。考えたこともなかつたなあ)

(だつてアタシはアイドルだし……)

「真昼。アイドルだけど、恋愛つて許されるのかな?」

「人によるとは思うけど、ちゃんと節度を守つていたら大丈夫よ。だから、ローラたちが歌つてた“キミをロックオン”じゃないけどさ。ちゃんと捕まえないとね」

「そう、だね。うん、アタシがんばってみる」



それから、吹っ切れたアタシは彼にアタックをし続けた。

彼と一緒にでかけたり(これつてデート……よね)、彼にお弁当を作つてきて一緒に食べたり、レッスンに付き合つてもらつたり、いろんなことをした。

そして……

「司さん、アタシ、あなたのことが好きです。アタシとお付き合いしてください!」

「はいーーちらーこそ。よろしくお願ひします、ローラさん」  
彼とお付き合いすることができた。

## 秋の心と書いて『愁う』

彼が私の恋人になつた。

それだけで毎日が楽しい。

他愛のない会話ですら楽しく感じる。

「お昼ごはん、一緒に食べようか」

「はい！」

お昼の時間に余裕があるときはたいてい一緒に食べるようにもなつた。

お昼ご飯の時に手作りのお弁当を渡せるようになりたくて、お料理の練習もはじめた。

彼が喜んでくれるなら、これぐらいなんてことない。

今はまだ作ってはいないけど、これから頑張っていくよ！

「うわっ、今日のサラダにトマト入つてる。申し訳ないけど、食べてく  
れないかな？」

「いいですよ」

あと、一緒に過ごす時間が増えて彼の今まで知らなかつた面が見えてきた。

そういつた発見も楽しくて、さらに好きになつていつている。

今のも最近知つたことで、彼は生のトマトが食べられない。  
いずれ私が食べられるようにしてあげたい。

そのためにもお料理のお勉強はしつかり頑張らないと。

「そういえば、今度けつこう大きなオーディションがあるんだつてね」「はい。だから全力でレッスンします」

「そうか。それならこつちも全力で応援しないとな」

「ありがとうございます。それにむけて、今度アタシのレッスンに付  
き合つてほしいんですけど……。一週間後つて空いてますか？」

「あー、ごめん。その日は先約が入つてて……」

「そう、ですか」

「ほんとにごめんね」

先約ね……。

まあ、たまにはそんなときもあるでしょ。

△▼△

一週間後、アタシは一人でレッスンしていた。  
普段通りにレッスンしているつもりだけど、少し集中できていない  
気がする。

時々彼のことが頭をよぎる。

別に彼を信用していないわけじゃない。

なのに。

なのに……。

心配でたまらない。

彼が誠実な人であることはアタシが一番わかつてゐる。

それでも、なぜか不安になつてしまふ。

大きなオーディションが近いから気が立つてゐるんだろう。

そうだそうだ。きっとそうだ。

そうやつてまた自分の気持ちにふたをして、レッスンを再開する。  
本番まであと少しだ。

合格して彼にいいところを見せるんだ！

△▼△

そして、本番のオーディションの日になつた。

いつになく緊張している。

でも、このオーディションのために全力でレッスンしたから大丈夫  
なはず。

「口一ラ、大丈夫？」

「え？ アタシは大丈夫に決まってるじゃない。それよりも、ゆめは自  
分の心配したらどうなの」

「う、うん。でも、本当に大丈夫？ 少し顔色が悪いよ」

「へーき、へーき」

こんなものなんでもないさ。

「それより、次アタシたちの順番みたいよ。ほら、ぼさつとしてないで  
行くわよ！」

「ちょ、ちょっと待つてよ〜」

△▼△

結論から言うと、アタシは不合格だった。  
オーバーワークによる疲労がたまっていたんだろう。  
そのせいで今はもう歩いているので精いっぱい。  
どうして、どうしてこんなことに。

ひとまず、明日は休日だから彼を誘つて出掛けよう。  
そうすればこの気持ちも落ち着くはずだ。  
よし、そうと決まれば彼に連絡だ。

『明日の予定は空いてますか？』

『ごめん、明日は大事な予定がはいつてて……  
……だめだつた。』

大事な予定なら仕方ない。明日は一人で散策しよう。

△▼△

明くる日、町に出て一人でショッピングをした。  
結局彼との連絡の後、ゆめ達にも誘いの連絡をしたけどみんな予定  
が入つていたみたいだ。

ゆめに至つては

『明日だけは無理！』

なんて言われた。

よつほど大事なことがあるのだろう。

でも、たまには一人も悪くないな、なんて思い始めてきた。

そんなことを思いながら店を見て回つていると、見覚えのある顔を見つけた。

なんだ、ゆめも町に出てたんじゃない。

そして声をかけようとしたとき、アタシは言葉を失つた。

「司さん、こっちですよー」

「ごめんごめん。待たせちゃつたかな」

「いえいえ、わたしも今きたばかりですから  
えつ……。なんで……？」

なんで彼とゆめが二人つきりでお買い物してるの？

二人とも大事な予定があるつて言つてたのに。

まさか、これが大事な予定なの?

……ちょっと監視してもかまわないわよね。

△▼△

何よこれ。

まるでデートじゃない。

……さいつてー。

信じたアタシがバカみたい。

「ん?あれつてローラさん」

「あれ、ローラだ。つてどうしましよう、コレのこと」

「とりあえずゆめちゃんが持つてて」

「わかりました。奇遇だね、ローラ」

小声で何か話してる。

アタシには言えないことでもあるのかしら。

「ロ、ローラ?なんか怖いよ……?」

「どうしたんだい。そんな顔して」

「どうしたもこうしたもないわよ……!」

バツシイイイイイ!!

アタシは彼の頬を叩いた。

それもこつちの手が痛くなるぐらい強く。

それにゆめはひどく困惑しているみたいだ。

「えつ……?えつ、えつえつ?」

「なんで。なんでアタシじやなくてゆめと一緒になの!?」

「そ、それにはちゃんとした理由があるんだ」

「じゃあその理由つてなによ」

「それは……」

「……もういい。もう聞きたくない」

「ちょっと、ローラそんな言い方は——」

「ゆめは黙つてて!」

「……」

そして、アタシは彼と顔を合わせることに耐えられなくなつて駆け

出した。

……信じてたのに。

## 女心は秋の天気

逃げたアタシは、休暇を取つて実家に帰ることにした。

幸い、家に両親がいなかつたから心配されることもなかつた。

家に帰つてからは無氣力な生活が続いた。

歌つたり踊つたりする気分にならなかつたけど、基礎トレーニングだけは欠かさなかつた。

何もしていないより何かしている方が気が紛れるから。

それに、アイドルをやめようなんて思つてもいないし。



家に戻つてきて1週間がたつたころ、真昼から連絡が届いた。

『大丈夫? できればちょっと会つてお茶でもしない?』

ある程度気持ちも落ち着いていたから、今の気持ちを吐き出すにはちようどいいかもしれない。

なんだかんだで真昼には手伝つてもらつたんだし、これくらいは許してくれるだろう。

気持ちが落ち着けば、学校へ戻る気持ちになれるはずだ。  
そうと決まればさつそく街のカフェで真昼と落ち合おう。



「ローラ、体調はどう?」

「快調とは言えないけど、悪くはないよ」

「そつか。それならよかつた。でも、気分はあまり良くはないのかな?

「そう、ね。アイツのことが頭に浮かんでくると少しイライラしちやつて」

「せつかくだから私にそのイライラを吐き出してよ。そうすれば気分もだいぶ良くなると思うから」  
「ありがとう、そうさせてもらうね」

それから真昼は、アイツに対する不満だつたりアタシの不安だつたり、なんでも話を聞いてくれた。

話していくうちに次第に気分も落ち着いてきて、しばらくするとす

でにとりとめもない話をしていた。

思つて いた通り、学校に戻ろうと思えてきた。

「そ ういえ ば、学校に戻ると したら いつに なりそ う？」

「えー つと、11月4日かな？」

「4日ね。わかつたわ」

そ ういえ ば、4日つてアタシの誕生日だつたけど、何か用意してく れて いるのかしら。

でも、もし用意されてるとしても聞くのは無粋よね。  
気になるけど黙つておいた方が良さそう。

「それと、せつかく休暇を取つたんだつたらしつかりと休んでね。こ の前のステージの疲れと、オーバーワークもあるだろうし」

「ステージでのこと、知つてたんだ……」

「うん。ただ、私が気づいたわけじやないんだけどね」

「どういうこと？」

「私は、それに気づいた人から聞いただけ。もしお礼を言つたがつたら、学校に戻つてきてからその人に言つてあげて」

「わかつた。でも、その人つていつたい誰のこと？」

「それは今は教えられないけど、決して悪い人じやないから安心して」

「真昼が そ う言つたなら信用するけど、なんだか気になるわね」

「あはは……」

でも、真昼の言つた通り今のうちに羽を思つつきり伸ばそ うかな。  
「よし。ローラの気分も落ち着いたみたいだし、私はそろそろ安心してね」

「うん。話を聞いてくれてありがとう。それじゃあ、また学校でね」



11月4日。アタシは学校に戻つてきた。

(学校よ、私は帰つてきた!!)

……何か渋い声が聞こえたけど氣のせいね。

正門をくぐると真昼の姿が見えた。

「真昼！ただいま！」

「おかえり、ローラ。さつそくだけローラを連れていきたいところ

があるの」

と、真昼に手をひかれるがまま学内のホールへ向かつた。

「ここ?」

「そう。さあ、入つて入つて」

おそらくここが会場なのだろう。

意を決して扉を開けると、アタシはクラツカーレの音に包まれた。

「「誕生日おめでとう!」」

そしてたくさんの人アタシを祝つてくれた。

いつも顔を合わせるあこや、ツバサ先輩のような先輩方、クラスメイトの人たちなど、本当にたくさん的人が来てくれた。

こんなにたくさんの人に祝われるのは初めてだ。

「みんな、ありがとう!」

本当にうれしかった。

でも、何だろう。

どこか心から喜べていらない自分がいる。

どうしてなんだろう。

こんなにもうれしいのに。

……どうか。やっぱりアタシは司先輩のことが気になるみたい。

もう一度だけ先輩と話がしたい。

「ローラ、司先輩のことを探してくるんでしょ」

「真昼……」

真昼にはお見通しだつたみたいだ。

△▼△

真昼に連れられ、アタシは展望台へ向かつた。  
そして夕陽に照らされた展望台には彼がいた。

気づけば真昼はいなくなつていた。

気遣つてくれたのだろうか。

「あの、ローラさん」

アタシの考えに割り込むように彼は話しかけてきた。

「何?」

アタシはついぶつきらぼうに返事をしてしまつた。

「実は、この前のことを弁解しようと思つて」

彼はそういうとおもむろに箱を取り出した。

きれいに装飾されていた。

おそらくプレゼントだろう。

「まさか、ゆめにそれを渡せっていうの？この前の時に渡しそびれたから…「そんなわけないだろう！」…つ!?」

突然の大声に驚いてしまつた。

そして彼がこんな大声を出すことに驚いてしまつた。

「これは他でもないローラさん、いやローラのためのプレゼントだ！」

「あ、アタシの？」

「え？ つてことは……」

「ローラ、誕生日おめでとう」

彼はアタシにプレゼントを渡してくれた。

……でも、今のアタシには受け取る権利はないかな。

「な、何か気に食わなかつた？」

「ううん。そんなことない」

「じゃあ、どうして？」

「誤解をしていたのが、申し訳なくて……」

「なんだ、そんなことか」

「そんなことつて……」

「だつて、それを言つたら僕も隠していたんだし。おあいこだよ」

「司先輩……」

「だから、これを受け取つてくれないかな」

「はいっ！」

受け取つた箱を開けてみると、ブレスレットが入つていた。

きれいで、S P I C E C H O R Dのブランドのようなロックさを

感じる。

「どう、かな。気に入つてくれた？」

「もちろんです！」

「そつか、それはよかつた」

これで心から喜ぶことができた。

本当に最高の誕生日だ！

「あれ、そういうえばさつきアタシのこと口一ラつて」「つい呼び捨てで言っちゃつたけど、嫌？」

「いえ、むしろ前より距離が近づいたと思うのでむしろうれしいです」

そして、しばらく静かな時間が続いた。

それはとても心地が良かつた。

「ローラ」

名前を呼ばれて振り向くと、彼の顔が目の前にあつた。  
そして唇に触れるだけのキスをした。

「っ！」

突然のキスに驚いたけど、同時に心が満たされる感覚があつた。  
それからしばらく、お互い恥ずかしくなつて顔を合わせられなかつた。

「えーっと、お二人さん。いい雰囲気のところ悪いのだけど、そろそろ会場に戻らないと」

「!!」

そうだ、パートナーの途中だった。

「司先輩、急いで戻りましょう」

そしてアタシは彼の手を引いて会場へと戻つていく。

この先もこういった誤解や間違があるかもしれない。  
けれど、彼や仲間たちがまた助けてくれるはずだ。

そしてまた一段と仲が深まつていくのだろう。

## “特別篇” ローラの誕生日

今日はローラの誕生日。

去年とは打って変わつて、サプライズなんてものは用意していない。

前回はそれで失敗しちゃつたし。

それに、今年はS4になつた人が忙しくなつて、みんなの予定を合わせることが少し難しくなつたから、一人で静かに過ごそうと思った。

「ねえローラ」

「何？」

「今日は何をしようか」

「そうね……」

そういうつてローラは腕を組んで考える。

僕はそれを横目を見て、付け加える。

「僕にできることだつたら、何でも言つて。とは言つてもすぐには出でこないか」

と言つたものの、答えはすぐに帰つてきた。

「じゃあ、司の家に行きたい！」

予想してない答えだつたけど。

「ええつ!? ウチに!?

当然のごとく、僕は驚いた。

ローラからその答えが出たという事実と、実家に連れ帰つたときの母さんのことを考えると、驚きと恥ずかしさでやられてしまつた。

それを見て、ローラは少し申し訳なさそうな表情をした。

「えつと。ダメ、かな?」

「あー、ちょっと家に確認してみる」

流石に直球で断るのも気が引けるし、もし家に誰もいないのであれば、それはそれで好都合だと思い、母さんに連絡を入れることにした。

電話を掛けると、2コールも経たずに電話に出た。

それから、ローラのこととをぼかしながら、家に帰るという話をする

と、今は家にいないという返事が返ってきた。

僕はそれならそれで構わない、という返事をして電話を切った。

「おまたせ、ローラ」

「どうだつた？」

「OKだつたよ」

「やつた！」

ローラは笑顔で喜んでいる。

そこまで期待するほどのものはないと思うけど、恋人同士になつて1年も経つたのに、未だに家に連れて行つたことがないことを思い出し、一人納得する。

「よし、じゃあ行こうか」

「うん！」

手をつないで家へと向かう。

こうやつて恋人といるだけで、実家までの道のりが少し違つたものに見えてくる。

時折、通つていた小学校や遊んでいた公園なんかを通つては、思い出話に花を咲かせていた。

すると、あつという間に家につく。

一般的、かどうかはわからないが、車を一台止めるスペースがあるくらいの広さがある二階建ての家。

僕は持つていた鍵を使い、玄関のドアを開けて中に入る。

ローラも僕に続いて家に入る。

「ただいまー」

「お邪魔します」

ローラは若干緊張しているようだけど、こればかりはどうしようもない。

ローラを二階の僕の部屋に案内して、僕は飲み物を用意しに居間に行つた。

そして、僕がコップに麦茶を入れようとした時、玄関のドアの開く音が聞こえた。

……玄関のドアが開いた!?

うつそだろ!?

母さんの奴、帰つてきやがつたのか!?

僕は飲み物の用意を後回しにして、玄関へと向かう。

しかし、すでにその時には母さんは玄関におらず、二階へと向かつたようだ。

玄関でローラの靴に気づいたんだろうな。

それに、僕が自室に連れしていくのも読まれてたのか。

……積んだな。

僕はあきらめて自室に向かう。

母さんに問い合わせられるんだろうな。

その後、なんやかんやあつたが母さんはローラとの付き合いを認めてくれた。

ローラを今まで紹介しなかつたことをねちっこく言われたけど。

母さんは、ローラが誕生日だと知ると今日は泊まつていって、だなんてことを言い出した。

しかも、ローラがそれに賛成するという事態。

……僕だけのけものにされてる気がする。

加えて、母さんは何を思つたのか、僕の部屋にローラを寝かせてくれとまで言い出した。

もちろん僕に反論する余地はなかつた。

流石に一緒の布団で寝るわけにはいかなかつたから、ローラに僕のベッドを使わせ、僕は予備の布団を引っ張り出して寝ることにした。



「ねえ、司」

「なんだ?」

月明りだけが差し込む部屋で、ローラは僕に言つた。

「おばさん、いい人だね」

「そう思つてくれるなら、よかつた。むしろ迷惑じやないかと思つてたくらいだし」

いつもに比べてうるさかつた気もするし。

それでも、母さんとローラがいい関係を築けたのなら、良しとしよ

う。

「私、いざれおばさんをお義母さんつてよぶのよね?」

「まあ、結婚することになつたらね」

結婚。

いざれはすることになるのだろう。

「結婚、ね」

今まで考えてこなかつたこと。

もちろん、まだ年齢的にも早いということもあるし、アイドル活動もあるから考えもしなかった。

「司はさ、これからも私のことを幸せにしてくれるんでしょ?」

「もちろん、そのつもりだよ」

「じゃあ、それだけで十分」

そういつて、ローラは僕の布団へと潜り込んでくる。

「ちよつ、ちよつと、ローラ!」

「いいじやんいいじやん」

雲一つない夜空は、僕らの明るい未来を示しているようだった。

ゆめ「

## “ゆめの始まり” ①

春はいい。

寒い冬が終わり、あたたかな日差しに包まれる。  
このあたたかな日差しが心地よい。

「昼寝にうつてつけの天気だなあ」

そこで程よい木陰を見つけた。

ここでひと眠りするとしよう。

今日は珍しく仕事もレッスンもないしな。

「関係はないけど『春眠暁を覚えず』というぐらい春は心地よい季節だし」

なんて独り言をいいながらまどろみに落ちていく……はずだつた。

「うわあああああああ!?」

女の子が落ちてきたのだ。

余裕の一つでもあれば『親方、空から女の子が!』なんて言いながら助けることができるのだが、あいにく寝そべった状態でいるうえに、眠りに落ちようとしていたところである。

残念ながら助けるどころか自分を守ることすらできない。

「ぐおーつ……！」

「ひやつ!？」

お腹の上に落ちてきた。

けつこう痛い。腹筋を鍛えてなかつたら氣絶してたところだつた  
……。

女の子のほうは大丈夫だろうか。

「だ、大丈夫……？」

「は、はい！わたしはだいじょうぶです。つてご、ごめんなさい！」

女の子はお腹から降りてくれた。

結構痛みは残るもんだな……。

「うう……。い、痛え……。」

「ごめんなさい。わたしが心配しないといけなかつたのに」

「いやいや、いいよ気にしなくて。タイミングが悪かつただけだし」

「そんな訳には——」

「それじゃあ、こうしよう。お詫びとして僕の体を起こしてくれないかな。腹筋に力が入らなくて起きられなくてさ」

「わ、わかりました！」

彼女が起きるのを手伝ってくれた。

これで落ち着いて会話もできそうだ。

「僕の名前は飯島司。君、名前はなんていうの？」

「わたしは虹野ゆめです。さつきはごめんなさい」

「だから気にしなくていいって。それで、なんで男子部のところに？」

「……男子部？何ですかそれ？」

「あれ？男子部って知らない？男子部は名前のとおり男のアイドルを育成するためのところなんだけど」

「知らなかつた……」

「学校の案内資料にも書いてあつたはずなんだけどなあ。ところで、きみはどうしてこここの木の上なんかに？」

「えーと、正門から出ていくひめさまに手を振ろうと思つて木に登つてたんです。そしたらすべつて落つこちちやいました。あははははは……」

なんか、おもしろい娘だなあ。

「どうしてそこまでしょうと思つたんだい？」

「えーと……。実は、わたしがアイドルになりたいと思つたきつけがひめさまで——」

それからしばらく話をしていた。

男子部の話もしてみると、意外と興味をもつてくれたようだ。

女子部のS4のような存在のM4がいることとか。  
にしてもひめ“ざま”か。

「あ、今更なんだけどここが男子部の場所だつて知つてた？」

「えつ……？本当ですか？」

「さすがにそんな嘘はつかないよ」

「じゃ、じゃあわたし怒られたりしちゃうんですか？」

「さすがに怒られることはないと思うけど、なるべく入らない方がいいかな」

「どうしてですか？」

「（）くわづかではあるけれども、男子部には邪な考えを持つ人がいるらしくてね。ほら、ウチの女子つて色々とレベルが高いじゃん？だから、そういう人が狙つて来ないとは限らないし。ましてや、ゆめちゃんがつて可愛いんだから気を付けとかないとね。これから立派なアイドルになつてほしいし」

「は、はい！」

ちよつとゆめちゃんの顔が赤い。

不用意にかわいいなんて言うんじやなかつただろうか。  
「ま、一応頭の隅つこにでもおいててもらえればいいよ。つとそろそろいいじかんだね。お話もこれでお開きにしようか」

「そ、そうですね。……あの、連絡先を聴いてもいいですか？」

「ん？ああ、構わないよ」

連絡先の交換をした。

そのときに男子用のアイカツモバイルにもちよつと驚かれた。

……男子部のことを知らなさすぎではないだろうか。今度教えておくべきだろう。

「何かあつたら僕に連絡しておいでよ。先輩として相談相手にならなつてあげられるからさ」

「はい、ありがとうございます」

「それじゃあ、またね」

これから、彼女はどんなアイドルになつていくのだろうか。

△▼△

それから少しして、新入生のお披露目ステージが開催されることになつた。

その中にゆめちゃんもいるはずだ。

知り合つたのも何かの縁。しつかりと応援させてもらおう。

そして、ゆめちゃんのステージが始まつた。

はつきりいって初めてだとは思えないレベルだ。

なんだろう。胸が熱くなつてくる。

彼女から目が離せない。

この娘がトップアイドルになるための手助けをしてみたい、なんて思い始めた。

それくらい魅力的だつた。

ステージが終わり興奮冷めやらぬ中、これは将来有望だなんて思つていた矢先……。

「ゆめちゃん!」

彼女は倒れた。

すぐに保健室へと運ばれていったが、心配で仕方がない。体力には自信があると言つていた彼女が、気を失つて倒れるなんて考えられないからだ。

「いつたい、どうしたつていうんだ……」

次の人のステージが始まつたが、全く身に入らない。女子部の保健室に駆け込むわけにもいかないしなあ。相手が気を失つているとあればなおさらだ。

仕方ない、外で風を浴びて落ち着こう。

「一応、連絡だけでもしておこうかな」

△▼△

日が傾いたころ、ゆめちゃんから返事が来た。

『わたしは全然元気です。心配かけてごめんなさい』

……本当か?

あんなにひどい倒れ方をしたのに?

『本当に大丈夫なの? 心配だから今からそつちに向かつてもいいかな?』

?

『いいですよ』

了解を得たことだし、向かうとしよう。

## "ゆめの始まり" ②

保健室に駆け込むと、ベッドに寝ているゆめちゃんと白鳥ひめ、それに髪をショートカットしている女の子の姿が見えた。

白鳥は僕の姿を見るや否や、席を立ち部屋から出ていった。つと、まずはゆめちゃんの心配が優先だ。

「ゆめちゃん、大丈夫?」

「はい、体は全然問題ないです。ただ、ステージの記憶がなくて……」「それは……なんだかおかしな話だね」

いつたい彼女の身に何が起こったのだろうか。

ん? ショートカットの女の子から視線を感じると思えば自己紹介をしていないじやないか。

「こんちには、僕は飯島司。少し前からゆめちゃんとは仲良くさせてもらつてます。一応男子部に通つてます」

「え、えつと私は七倉小春です。ゆめちゃんとは小学校の時からの親友です」

「そつか。つてことは小春ちゃんもゆめちゃんが心配になつてここに来たわけだ」

「は、はい」

その後、小春ちゃんにも受け入れてもらえてたようで、ゆめちゃんの体調を聞きながらも他愛のない話を交えながら過ごし、この日は解散となつた。

しかし、なんとも奇妙だな。

まるで自分の何かを犠牲にして輝いているような……。

気のせいか。こんな厨二チックなことが起こるなんてな。

でも、何かしら手伝えることはないのかな。

……そうだ、疲れの上手な取り方くらいなら教えられそうだ。

△▼△

それから、ゆめちゃんの相談に乗ることが日に日に多くなつた。

頼ってくれているのは素直にうれしいのだが、彼女が無理をしてまた倒れるようなことがあつたら心配だ。

……なんか過保護な親みたいなだな。

ただ、心配とは裏腹に彼女が倒れるというようなことは聞かなかつた。

あと、それ加えて思つたことがある。

お披露目ステージでできていたことが練習ではできていなかつたのだ。

あれほどのステージができたのならこれくらいはできるだろう、といつたつもりで出したはずの課題ができていないのだ。

最初はやっぱり調子が悪いのかと思っていたのだが、明らかにそういつた素振りは見えなかつた。

「うーん……」

「どうしたんですか？」

「いや、大したことじやないんだけど、ステージの様子を見るだけだと練習メニューが考えづらいなーって」

事実、数回ほどあの後ステージをする機会があつたが、お披露目ステージの時ほどはいかずとも、素晴らしいステージをしていく。

「えーっと、苦労を掛けているのならすいません」

「いやいや、そんなことはないよ。ゆめちゃんの力になりたいって思つたからね」

「ありがとうございます！」

確実にゆめちゃんのスキルを上げようとするならば、基礎トレーニングをこなしてもらうことが一番ではないだろうか。

まだ入学したばかりで、なおかつダンスや歌の経験もないのだ。

「うーん、やっぱり基礎トレーニングを重点的にやっていくことがいいかもね」

「わかりました。やっぱり基礎が大事ですね」

ひとまずこれでゆめちゃんの成長を見ていくこう。

運動経験があるから体力には自信があるつて言つてたし。

ただ、無理だけはさせないようにしよう。

自分の目の前で人が倒れるなんてもうこりごりだ。



……何かがおかしい。

ゆめちゃんはしつかりと基礎トレして成長しているというのに、なぜかステージの上でそれが発揮されない。

もちろんステージで調子が悪いとかそういうことではない。変化がないのだ。

いつたいどうしてなのだろう。

そう思つて いる自分の視界に学園長の姿が見えた。  
(どうしてここに学園長がいるんだろう……)

疑問を抱いたが、すぐにその答えは判明した。

学園長の視線の先にはゆめちゃんがいた。

ゆめちゃんにいつたい何が……。

ゆめちゃんのステージが終わり、戻つてゆく学園長に疑問をぶつけた。

「学園長、どうしてゆめちゃんのステージのためだけにわざわざ足を運んだのですか？」

「ん？ きみは確か……飯島くんだつたかね？ なぜそんなことを聞きたがる」

「もしかしたら、学園長が何かゆめちゃんの状態について知っているのではないかと」

「ほう……。虹野の違和感に気づいていたのか」  
「ええ。一応先輩として面倒を見ているもので」

それから学園長は少し考へた後、僕の方を向いて言つた。

「よかろう。君に虹野がどういう状態なのかを説明しよう。だが、少し場所を変えよう

「わかりました」

そういつて学園長は僕を連れて学園長室へと向かつた。



「まず君に尋ねたい。入学当初の白鳥ひめのことを知つて いるか？」

「ええ、一応同学年ですでの。確かに入学当初から類いまれな才能を持つていたと」

「ああ。だがそれは今の虹野と同じ状況だつたのだ」

「あの白鳥ひめがですか!？」

まつたくそんな素振りを見せていなかつたのに?

「まあ驚くのも仕方ない。今まで隠し通していたからな」

「そうですか……。しかし、どうして彼女は克服できたのでしょうか」

「話すと長くなるが構わないかね?」

「もちろんです」

「これでゆめちやんが成長できるのなら構わないさ。

「よかろう。だが、まずは私の姉の話から始めるとしよう」

それから、学園長のお姉さん『雪乃ほたる』の話を聞き、あの不思議な力の末路を知った。

歌やダンスができなくなるという残酷な結末だ。

すなわち、アイドルとして生きていけなくなるというものだつた。それを間近で見ていた学園長はこれを避けるべく、白鳥ひめへ新たなトレーニングメニューを提案したそうだ。

「結論としては実力を上げることに尽きるのだが、完全に克服するにはあの力に頼らないという強い意志が必要となる」

「強い意志……ですか」

「ああ。言うなればそれが起ころるようなきっかけがあれば良いのだ。そのきっかけを私が与えようとしていたのだが、虹野には君がいる。だから君に託そうと思う」

「僕がきつかけを……」

「もちろん君はトレーニングを優先してくれて構わない。きっかけとなりえるようなオーディションはこちらから受けさせるつもりだ。ただ一つだけ、彼女には私や姉のことについて言わないでおいてほしい」

「どうしてですか? 知つておいた方がいいんじゃないですか?」

「まだ私は虹野とつて敵である必要があるのだ。それに、彼女はすでに君という仲間を持つてているではないか。だから、君が彼女の力になつてやつてくれ」

「そう……だな。」

ゆめちやんの味方になつてあげなくては。

「わかりました。全力で引き受けさせてもらいます」

「うむ。わたしもしっかりサポートさせてもらう」

ゆめちゃんが笑顔でステージができる日まで頑張らなきゃ。

## ”ステージは誰のために” ①

それから、ゆめちゃんに体のことを伝えた。

多少困惑している様子ではあつたがあらかた理解してくれたようだ。

あと、練習メニューの変更にも応じてくれた。

今までよりもきついメニューであるのも関わらず、嫌がる素振りも見せなかつた。

ただ、気持ちが変わらうなきつかけについては何もヒントを得ることができなかつた。

「きつかねえ……」

「どうかしたんですか？」

「ああ、いや。なんでもないよ。ただの考え方」

本人があまり意識してもいけないと想い、ゆめちゃんには隠してい  
る。

「よし、今日のところはこれで終了。だいぶ基礎はしつかりしてきた  
ね」

「そうですか!? ありがとうございます！」

「でも、これからレベルを上げていくから覚悟しておいたほうがいい  
ぞ！」

「はーい」

その後、ゆめちゃんと別れるときに彼女の友達と遭遇した。  
名前を桜庭ローラさんといつていた。

ローラさんも近々開催されるオーディションに向けて別の場所で  
レッスンしていたそうだ。

そして、ふと一つの考えが思い浮かんだ。

「桜庭さん、よかつたら僕たちと一緒にレッスンしないかい？」

「アタシがですか？」

「そ。せつかくならみんなでやつた方がいい刺激になるんじやないか  
な、つて思つて」

「ゆめがいいのならぜひ！」

「うん。全然いいよ!」

「それじゃあ決まりだね。あ、他にも来たがっている友達がいたら連れてきても大丈夫だよ。数人くらいなら増えても問題ないし」

環境を変えることで何か変化を与えることができればいいのだけれど。



それから数日後、ゆめちゃんとローラさんに加え、以前話した小春ちゃん、香澄姉妹の妹の真昼さん、あとは劇組で一際実力を感じさせている早乙女さんが参加した。

この5人は仲がいいようで、彼女たち同士で教えあつたりもしていた。

僕の助けがいらないように見えたが、まだ彼女たちは入学してそれほど経っていないためか、質問がけつこう飛んできた。

歌の基礎から演技まで、教えられる範囲であれば何でも対応した。他の人の質問に対応している時、少しゆめちゃんが訝し気な目で見てきていたけど何だつたんだろうか。

「調子はどう? ゆめちゃん」

「はい、今までと違つてちょっと新鮮です」

「そつか、それならよかつた」

ともかく、これで何か変わってくれるといいんだけどなあ。

↓ side ゆめ ↓

……なんだか変な気分だ。

司さんが私以外の人に教えているのを見ると、なんだか胸の奥がざわざわしていく。

それに、ほんの少し腹が立つ。

どうしてなんだろう。

決して怒りたくなるようなことはしていないのに。

↓ side out ↓

それから数回のレッスンを終えたころ、ゆめちゃんとローラさんの

二人が同じオーディションに参加していた。

これもおそらく学園長の考えだろう。

結果から言うと、ゆめちゃんが合格してローラさんは落選した。力を抑えようとしていたのだろうが、ゆめちゃんはあの力を発動した。

その反動で、今は声を枯らしてしまっている。

「ゆめちゃん、大丈夫?」

「はい、何とか」

気を失わずに済んだのはレッスンのおかげだと思いたい。

ただ、このステージでゆめちゃんにはきつかけが必要なのだと再確認した。

「ゆめちゃん、ちょっと辛いことを言うかもしれないけどいいかな」「はい……」

「ゆめちゃんは何を思つてあのステージに立つているのかな」「それは、S4になるためです」

「それじやあ、誰のためにステージをやつてるんだい?」「それは……」

「ゆめちゃん、そこをもう一度考えてみてくれないかな。君にはそこが足りていらない」「……はい」

それからゆめちゃんは黙り込んでしまった。

少しきつい言葉だつたかもしれないが、これからアイドルをやるうえで大切なことだ。

「……それじやあまた今度のレッスンで」「……」

△▼△

次の練習の日までゆめちゃんと会うこととはなかつた。

レッスンにはきちんと参加してはいたものの、どこか上の空だった。

ステージの後に言つたことを考えてくれているのだろうか。だが、このままではケガをしかねない。

……仕方ない、学園長から口止めをされていたけど言つてしまつてもいいだろう。

「ゆめちゃん、ここに行つて少し気分を変えてくるといいよ」

「え？ ここ、ですか？」

「そう。ここに行けば何かヒントが得られるはずだと思うしね」

「ヒント、つて、私が悩んでいたのわかつてました？」

「そりやあもうね」

僕が笑つて、それにつられてゆめちゃんも少し笑つていた。

そして少し笑顔を取り戻したゆめちゃんはホタルさんの所へ行つた。

学園長の姉であるホタルさんは一度会つたことがあるが、大丈夫だろう。

あの人ならこの力の辛さについて一番わかっているはずだ。

それに、ゆめちゃんを笑顔にしてくれるだろう。

……ただ、なんだか嫌な予感がぬぐいきれないのはどうしてだろう。

## ”ステージは誰のために” ②

今回の訪問はうまくいったのだろう。

結果的に、ゆめちゃんはホタルさんの所に赴いて何か得られたようだ。

その証拠に、ゆめちゃんの目つきが変わった。

不安げで力んでいた表情が、だいぶ和らいでいる。

レッスンでも、今まで以上に力が入っているのがわかる。

「よし。今日はこれで終わりにしよう」

「「はい。ありがとうございました」「」

そのレッスンもいつも通り無事に終わり、解散となつた。僕も帰ろうと思ったところで、ふと声をかけられた。

「あの、飯島先輩……」

「ん? どうした、七倉」

「伝えておかなきやいけないことがあるんです……」

「なんか重要な話みたいだな。場所変えるか?」

「いえ。ここでいいです」

「わかった。それで、話つて?」

「実は。私、海外に移り住むことになつたんです」

(なんてことだ。ただでさえゆめちゃんが困っているっていうのに)

「そ、それは唐突だな。ちなみにみんなには話しているのか?」

「いえ、それが言い出せなくて……」

(重要度が増した――)

「それなら、むしろ言わないと後悔すると思う。だつて、友達が何の連絡もなしにいなくなつたら心配するだろう?」

「そう、ですね……。わかりました。私、今から伝えてきます!」

伝える決心がついたようだ。

心配そうな表情も吹き飛んでいる。

「ああ、気を付けて。それとお疲れ様」

「はい、ありがとうございました!」

七倉の抱えている心配事はなくなつたようだが、この影響でゆめ

ちやんがどうなるか心配だ。

このことが吉と出るか凶と出るか。



七倉はゆめちゃん達にきちんと伝えられたらしい。  
そのおかげか、送別のパーティーの計画まで挙がっている。  
そして、ゆめちゃんは最後にステージをすることになった。  
未だに不安があるのだろう。

いつになくうつむきがちなゆめちゃんが相談にやつてきた。

「司先輩。私、小春ちゃんのためにステージをすることになつたんです。  
でも、少し不安になつてしまふんです」

「やつぱり、あの力が怖い？」

その言葉に、ゆめちゃんは少しうつむいてしまう。

「はい……。それに、小春ちゃんを悲しませたくないんです」

「……ゆめちゃんなら大いじようぶだよ」

「どうしてそんなにはつきり言えるんですか……？」

「どうしてつて、以前に比べて厳しいレッスンにも耐えられるようになつたし、それに対する気持ちも変わつただろう？」

「はい……」

「それなら大丈夫だ。絶対に成功する。僕が保証する」

笑いながらゆめちゃんに答える。

「だからさ、自信をもつていいんだよ」

「……はい！」

ゆめちゃんはいつもの笑顔に戻つてくれた。

「よし。それじゃあさつそくレッスンといきますか」

「ええ、ちょっとそれは……」



そしてとうとうパーティーの日となつた。

ゆめちゃんはやはりというか、緊張している。

それでも、以前に比べたらかなりマシになつている。

……作戦決行だな。

「ゆめちゃん、ちょっとこっち向いてよ」

「はい？どうしたんで……ふふふつ」

「作戦大成功。どう？ちょっと落ち着いた？」

「ちょっとそれはずるいですよ。あははは」

ゆめちゃんが笑ってくれた。

この笑顔があれば大丈夫だろう。

「ゆめちゃん。ステージ頑張つてね」

「はい。ありがとうございます」

そしてちょうどよくゆめちゃんがステージにあがる番が回つてき  
た。

「いつてらっしゃい」

「いつてきます」

ゆめちゃんの背中を見送る。

なんだか少し立派になつた氣がするなあ。

さて、ステージの応援に行かなきや。

……さすがに着替えてから応援しよう。

ステージ中に噴き出すなんて台無しだし。

あ、何の格好をしていたかは秘密ですよ。



アイカツシステムが起動し、ゆめちゃんがステージにあがつてく  
る。

音楽が鳴り始め、いよいよステージが始まる。

「ページを——」

歌いだしは順調だ。

レッスン通り、落ち着いて歌えている。

ふと周りを見渡すと、白鳥と学園長がいた。

ゆめちゃんのあの力が心配で見に来てくれたんだろう。

「世界で——」

サビに入り、ゆめちゃんの纏うオーラに変化が現れた。

マズい——!!

今までのことは無意味だつたとでもいうのか！

僕も学園長達もステージに向かっていく。

「ゆめちゃん!」

僕の声に気づいたゆめちゃんは、周りを見渡す。

そして、ふと我に返りオーラも最初の時のものに戻つている。

「……あの力を克服できたのか」

やつたな、ゆめちゃん。

△▼△

無事にパーティーが終わり、みんなで七倉を見送ることになつた。

「みんな、今日は本当にありがとう」

「小春ちゃん、向こうでもアイカツ頑張つてね」

各々別れの挨拶を済ませたり、プレゼントを送つたりしている。

そして出発の時間が近づくと、七倉の方から僕に向かつてきた。

「司先輩。先輩が背中を押してくれたおかげでこんなにもたくさんの人

人が見送つてくれました。ありがとうございます」

「いやいや、それは七倉がみんなに好かれてるからだよ」

「それでもです。それから、レッスンにも付き合つてくださつてあり

がどうございました。これからも頑張つていきます」

「ああ、イタリアでも頑張れよ」

「それと、私から司先輩にお願いがあります」

「お願い?」

はて、いつたい何を言われるのか。

「ゆめちゃんのこと、お願ひします。私がいなくなつたら、ゆめちゃんが寂しがるだろうから」

「どうして僕にそれを?」

「今のゆめちゃんにとつて、先輩は心の支えになつてゐるんです。それに……」

「それに?」

「いえ、なんでもないです。本当にありがとうございます」

そう言い残して七倉は家族の方へ向かつていつた。

ゆめちゃんは笑顔で別れることは……できなかつたみたいだな。  
あとで励ましてあげないと。

“酸いも甘いも”

七倉を送り出して数日。

僕はゆめちゃんに誘われて外出している。

なんでも、送別パーティーの時のお礼だとか。

「今日は先輩においしいケーキをうちそうします。楽しみにしてくださいね」

「ケーキか。楽しみだなあ。あ、でも最近甘いものの食べ過ぎな気がするなあ。でもまあ何とかなるでしょ」

「先輩はそんなに気にする必要あります……？」

「男だつてある程度は気にするものだよ。特に僕たちはアイドルをやっているんだし」

「そういえばそうですね……」

ちよつと苦笑ぎみなゆめちゃん。

「どうか、その言い方だと僕がアイドルらしくないみたいに聞こえるんだけど。

「ところで、今日連れて行ってくれるお店はどんなところなんだ?」「なないろ洋菓子店っていうところです」



「つきました。ここです」

「ここがなないろ洋菓子店か」

少し洋風なかわいららしい見た目をしているお店だった。

「じゃあ先輩、行きましょうか」

「ああ」

ゆめちゃんがお店の扉を開ける。

そして、

「ただいまー!」

と言ったのだつた。

「?? いま、ただいまって、え? どういうこと? 言い間違えだよね?」

「言い間違えじゃないですよ。ここは私の実家なんですから」

「えええええっ!」

実家だとお?!

……これは何か盛大な勘違いをされそうな予が。

「ゆめちゃん! おかえりなさい。ところでその方は?」

「この人は私の先輩の飯島司さんです」

ゆめちゃんがショウウインドウ越しの女性に僕を説明している。

恐らくゆめちゃんのお母さんで間違いないだろう。

「ど、どうも初めまして。飯島司です。四ツ星の男子部でアイドルをやっています」

「……」

あれ、なんかゆめちゃんのお母さんがフリーズしたぞ。  
これはなんだかマズそうだ。

「実はゆめちゃんとは――」

「あなた! ゆめちゃんが男を連れてきたわ!」

やつぱりこうなるかー。

まあ、年頃の女の子が男を連れてたらこうなるのは仕方ないのかも  
しれないけど。

「なんだって――！」

そう言つて奥の厨房から一人の男性が出てくる。

十中八九ゆめちゃんのお父さんだろう。

「ここにちは、飯島司と申しま――」

「ゆめとはいつたいどんな関係なんだ?!」

ゆめちゃんのお父さんがものすごく食い気味で聞いてくる。

「学校での先輩後輩の関係です。時々レッスンに付き合つたりする程  
度ですが」

「そ、そうなのか……?」

すこし不安になつたのか、お父さんはゆめちゃんの方を見る。

「そうだよ。お父さんつたら気が早いんだから。そういう関係じやない  
いんだよ……」

ゆめちゃんが弁解をしてくれた。

おかげで僕にかかつた嫌疑が晴れたようで、ゆめちゃんのお父さん  
が、すまなかつたという表情をしていた。

その後、改めて自己紹介をするとゆめちゃんのお父さんが僕の出演した作品を見てくれていたらしく、話が弾んだのはまた別の話。

△▼△

ケーキはどこで食べるのか、とゆめちゃんに聞くと、  
「せつかくだから私の部屋で食べましょうよ」

と言われ、僕は部屋へと連れられた。

「ここが私の部屋です。ケーキを持つてくるので掛けて待つてください」

「わかった」

僕が返事をすると、ゆめちゃんはケーキを取りに戻つていった。  
わかつたとは言つたものの、内心すごく緊張している。

だつて女の子の部屋だぞ。

信頼されている証拠なのだろうけど、なにぶん初めて入るものだから緊張するに決まつている。

「掛けて待つてろと言われたものの、どこに座るのが正解なんだ？」

おまけに難題にぶち当たる始末。

ゲームだつたら絶対に「つかさはこんらんしている」って出てくる状態だ。

ぴよびよつていう効果音も付属で。

迷つた挙句、床に座ることにした。

ベッドに腰掛けるのはちょっとアレだし、一脚しかない椅子に座るのも申し訳ないし。

そして、ようやく腰を落ち着けた頃にゆめちゃんが戻ってきた。

「先輩、お待たせしました！」

ゆめちゃんが持ってきたケーキとお茶を机に並べる。

手伝おうとしたが、やんわりと断られたのであきらめて待つことにした。

ケーキはいちごのショートケーキ。

シンプルだけど奥が深いものだ。

見た目は特段いうことはない。

強いて言うなら、間に挟まれているフルーツはいちごだ、ということに

とぐらいだ。

さて、食べるにしようと。

「いただきます」

「どうぞ召し上がつてください」

柔らかな先端部分をフォークで切り出し、口に含む。

すると甘味が比較的強いクリームの味が口の中に広がつた。

そして、追つて間に挟まれていたいちごの酸味が来る。

おかげで口の中が引き締まり、クリームの甘さが後を引かない。

きちんと考え方抜かれているものだつたのだろう。

甘さが残らないから紅茶にも合う。

「おいしい……」

「やつた！」

この味が気に入つた僕は、いつの間にかケーキを平らげてしまつた。

もちろん上のいちごは最後に残して食べた。

上のいちごは中とは打つて変わつて甘味が強いものだつたのには驚いた。

「ごちそうさまでした」

「お粗末様でした」

「ゆめちゃんのお父さんってすごいんだね。もうすっかりこの味が気に入つちゃつたよ」

「それはよかつたです。連れてきた甲斐があります」

ゆめちゃんも僕がなない洋菓子店を気に入つたことがうれしいようで、感想を言つてからは笑顔が絶えない。

ただ、少しどると何か感慨にふけるような表情の後、僕に向かつてお礼を言つてきた。

「本当に、ありがとうございます。こうして笑顔でいられるのも先輩のおかげです」

「僕なんて横から口出ししたぐらいだよ？」

「それでもです。おかげで小春ちゃんを無事に送り出すことができました」

七倉のことを思い出しているのだろう。

ゆめちゃんは少し遠くを見るような表情を見せる。

「何のためにステージをするのか、という先輩の言葉のおかげで気づけたんです。私は小春ちゃんや先輩やみんなに笑顔になつてほしいんだって」

ゆめちゃんはいつになく真面目な表情で僕を見据える。

「だから、本当に感謝しているんです。本当に、ありがとうございます。いた！」

その言葉とともにゆめちゃんは頭を下げる。

「そこまでしないでよ。ほら顔をあげて」

そう何度も言つて、やつと顔をあげてくれた。

こんなに感謝されるとは思つてもみなかつた。

ただ、僕はそれを甘んじて受けられないんだ。

「僕はゆめちゃんに隠してたことがあるんだ。だからまず、謝らせてくれないかな」

ゆめちゃんが僕を手で制するけど、頭を下げた。

そして、ゆめちゃんの力について僕の知つている限りの話をした。学園長の話ももちろんした。

「そう、だつたんですか……」

「今まで隠しててごめん。でも、ゆめちゃんがあの力に頼らなくなれた事は本当にうれしいと思ってる。ゆめちゃんのファンとしても、一人の先輩としても」

「先輩は何も悪くないです。だつて、先輩の本心からの行動だつてことは変わつてないじゃないですか」

「でも――」

「そんなに先輩が自分のことを悪く思うんだつたら、私のいうことを聞いてくれませんか？」

「それは構わないけど」

「じゃあ、それでこの事については手を打ちましょ！これだつたら問題ないですよね？」

これは一本取られたみたいだ。

こわばつていた顔も自然とほころんでしまう。

「僕の負けだよ。気に病むのはやめにする。それで僕は何をすればいいんだ？」

僕の問いに、ゆめちゃんは何かためらうような、悩むような素振りを見せた。

でも、次の瞬間には何かを決意したような表情になつた。  
そして、ゆっくりと口を開け、僕への望みを言い出した。

「私と、デートしてください！」

## “デートの戦略”

「へ……？」

まさかの望みに、つい変な声が漏れた。  
……なぜにホワイ？

「えつと、デートっていうと男女が一人でお出かけすることでいいんだよね？」

「はい」

ゆめちゃんはいたつて真面目な表情だ。

一方僕はこうなつた理由がわからず困惑気味な表情だ。

「その、悪いけどその理由を聞かせてもらえる？」

「私が、司先輩へのお礼もしたいからなんです。デートって言いましてけど、実は司先輩にも楽しんでもらいたいからなんです」

ゆめちゃんはほほえみながらそう言つた。

気遣いのできるいい子だ、なんて思いながらさつきの変な疑いを晴らした。

「わかつた。それなら受けよう」

「やつた！」

ゆめちゃんの喜び方が少し大きさに感じなくもないが、気にするほどのことでもないだろう。

それから日程を話し合い、今日は解散となつたのだった。



ゆめ sides

先輩をデートに誘つちやつた！

いや、そもそも今日もおうちデートじやん！

先輩はなんだか狼狽えているようだつたけど、こうなつちやつたのも全部先輩のせいだ。

先輩は私があの力を制御しようと頑張つていた時に、一緒になつて力を尽くしてくれた。

誰かのためにステージをするつていうことを教えてくれたのもそ  
う。

学園長とも相談してくれていたって聞いた。

先輩は本当に私のことを思つてくれていたんですね。

……それに、小春ちゃんを見送った後胸を貸してくれて。

その時に、私は司先輩のことが好きなんだって思った。

小春ちゃんが別れ際に『司先輩のこと、応援してるよ』なんて言  
われて意識したのもあるけど、それはそれ。

その前から意識はしていたんだし。

だから、私は今度のデートで司先輩を惚れさせてやるんだ！  
私をこうした責任取らせなきやね！

↙ side out ↘

△▼△

今回のデートは水族館。

水族館が比較的近場なのもあり、校門で待ち合わせして行くことに  
なつた。

もちろん予定の時間よりも30分ほど早く着いている。

……水族館に行く機会があまりなかつたんだけど、エスコートでき  
るかな。

そう僕が少し思慮にふけつていると、ゆめちゃんがやつてきた。

「待ちましたか？」

「いや、今来たところだよ」

ありきたりだけど、もちろんこう返す。

「本当ですか？」

「……実は少し待つてた」

「やつぱりそうですよねー。司先輩のことですし」

バレたか。

でも、ゆめちゃんは喜んでくれているみたいだし、問題なし。

「先輩、今日のお昼ご飯は楽しみにしてくださいね」

「何を作つてきてくれたのかな？」

「それはお昼までのお楽しみです」

いつもより荷物が多いから、作つてきてくれているのはわかつたけ  
ど、何を作つてきてくれたんだろうか。

まあ、ゆめちゃんの言う通りお楽しみにしておこう。



他愛もない話をしていると、目的地の水族館に着いたみたいだ。  
水族館特有の潮のにおいが微かに漂ってくる。

「着いたね」

「そうですね」

「チケットは僕が買つてくるよ」

こういう時は男が出るもんだと聞いていたけど、違うかな?

「いえ、私も出しますよ」

そう言つてゆめちゃんもついてくる。

止めても聞かないだろうし、一緒にチケットを買いに行くことにした。

料金表を見ると、意外とチケットが高いことに驚いた。

まあ、考えると納得はできるんだけどね。

諦めて素直にチケットを買おうとしたところ、ゆめちゃんから待つたがかかった。

「どうしたの、ゆめちゃん?」

「あの、ここつてカツプル割があるみたいなんですよ」

カツプル割、だと?

「だから、そうしませんか?」

「そ、そうだね」

ここで引くのもどうかと思い、ゆめちゃんの提案をうけることにした。

ゆめちゃんのことを少し意識してしまった自分が恥ずかしい。

もちろん、ゆめちゃんはかわいいんだけどさ。

ここでカツプル割を受け入れた結果、後から考え直したくなる羽目になることを、この時の僕は知らない。

カツプル割の証として、手をつけないで入場した。

まあ、これくらいは想定内だ。

ただ、心なしかゆめちゃんの気分が上がったような気がした。  
中に入ると、広いエントランスがあつた。

そろそろ手を離してもいいだろうと考え、ゆめちゃんと手を離そうとしてもゆめちゃんは手を離さなかつた。

「ゆめちゃん、さすがにもう手は離していいんじゃないかな」とすると、ゆめちゃんは上目遣いで僕に聞いてきた。

「つないだままじやだめですか？」

完敗だ。

こんな顔をされたら許すしかないだろう。

「ああ、別に構わないけど。歩きにくくはないよね？」

「はい。問題なく歩けます」

そう言つて、手をつないだまま館内を見学することになつたのだ。



様々な水槽を見た後、目玉でもある大水槽へとやつてきた。

「うわあ、すごい……」

「すごいな……」

目の前には大きな水槽。

そしてその中を泳ぐたくさんの魚たち。

自然と声が漏れた。

この壮大な光景に浸つていると、突然声を掛けられた。

「あのー、カツプル割を利用された方ですよね」

「ええ、そうですけど」

「でしたら、カツプル割利用者サービスの写真撮影をさせていただきますね」

「へ？」

そんなサービス聞いていないぞ。

真偽が気になり調べてみると、きちんと書いてあつた。

他にもいろいろサービスがあるらしい。

……ゆめちゃんはこれをわかっていたのか？

「先輩、ボーッとしてないで早くいきましょー！」

「あつ、ちよつと」

ゆめちゃんに手を引かれ、写真を撮られに行く。

ゆめちゃんの様子を見るに、おそらく知つていたのだろう。

それからも、いろいろと特典を受けた。

イルカショリーに参加したり、ペングインの行進をしたり、餌やり体験をしたりと様々だった。

もちろん、ツーショットの写真付きで。

楽しめはしたのだが、ゆめちゃんとの距離が近く、普段と違つて意識してしまった。

そしてなんだかんだと時間は過ぎ、お昼ご飯をとることにした。

園内に設けられた庭園のベンチに座つて、ゆめちゃんが鞄の中からランチボックスを取り出す。

「お待たせしましたー。じゃーん」

「おおっ！」

開けてみると、色とりどりのサンドイッチが入つていた。  
ハムとレタスを挟んだものから、果物と生クリームを挟んだものまで。

「食べていいかな」

「もちろんです」

「それじゃあ、いただきます！」

あまりにもおいしそうで、つい前のめりに食べる。  
味の結論としては、おいしいの一言に尽きる。

特に、フルーツサンドが抜群だった。

流石は洋菓子店の娘だ。

「ごちそうさまでした！あ～おいしかったあ～」

「お粗末様です。喜んでいただけて何よりです」

気づけば食べ終わっていた。

「フルーツサンドが格別だつたよ。実家で作つたの？」

「そうなんです。先輩がこの前ケーキを気に入つてくれましたから、  
そういうつたものが作れればと思つて

「わざわざありがとう」

「いいえ、どういたしまして」

その後、会話を楽しんでお腹を休ませてから、再び館内に繰り出し  
た。

もちろん、例のサービスがあったのはご愛敬だ。

## “告白と保留”

水族館見物を終え、僕らは帰路につく。

まだそれほど日が落ちて いる訳でもないけど、冬場の冷たい風から逃げるよう に、学校への道を戻る。

「ゆめちゃん」

「どうしました?」

「きょうは楽しかった?」

「もちろんです」

言葉だけではなく、表情からも楽しんでくれたことがうかがえた。

「先輩は楽しかったですか?」

「楽しかったよ。ただ、ちょっと疲れたかも」

予想外のサービスに驚かされる場面があつて、少し気疲れしたみたいだ。

「あはは……」

これにはゆめちゃんも苦笑いしてしまったようだ。

選んだ本人が軽く引くなんて、と思わなくもないが。

ただ、一つ確認しておかないと

「ねえ、ゆめちゃん」

「はい?」

「ゆめちゃんは、あのカツプル割のことはあらかじめ知つてたの?」

少し問い合わせるようにゆめちゃんに尋ねる。

すると、ゆめちゃんは少し焦ったように取り乱し始めた。

「あの、えと、あの」

「図星か」

「はううう……」

バレたことを悟ると、ゆめちゃんの顔はみるみるうちに赤くなつていた。

「ど、どうしてそ うだと思つたんですか?」

「水族館に入るとき、あんなに必死だつただろう? それに、写真を撮ら れるのもとても喜んでいたみたいだし」

「あ、あはは……」

反論はないみたいだ。

「でも、ちゃんと楽しめたよ」

「そう、ですか。だつたら良かつたです」

ゆめちゃんに笑顔が戻つたことを確認して、歩を進めようとした。すると、ゆめちゃんは僕の腕をつかみ、それを止めた。

「（）までわかつていて、先輩はスルーする気なんですか？」

真剣な表情でゆめちゃんが言う。

もちろん、ここまでされてわからない僕ではない。

ゆめちゃんが僕のことを好きになつてくれていることを。

「そう、だね。ここで返事をしないのはいただけないよね」

僕はゆめちゃんに向き直り、呼吸を整える。

ゆめちゃんをなるべく驚かせないように、そして悲しませないように言葉を選ぶ。

そして、僕の想いを告げた。

「ゆめちゃん。僕は、今はゆめちゃんと付き合うことはできない——」  
まさかの言葉に、ゆめちゃんは呆然としていた。

「——でも、あくまでも今はつていう話だ。僕は、まだゆめちゃんのこととをまだ知らないって思つてるから、これからゆめちゃんのことをもつと教えてほしい。その後、改めて僕からゆめちゃんに想いを伝えるから。だから、少しの間待つてくれないかな？」

僕はゆめちゃんのことをまだ知らない。

あくまで、今まで教える相手として考えていたから。

ゆめちゃんをそう言つた目で見たことはないか、と聞かれると嘘になるけれども。

それでも、僕はもう少しゆめちゃんを知らなければいけないんだと思う。

例えば、好きなものだ。

意外と、今までそう言つた話はしてこなかつた。

だから、まずはそこから始めないと。

僕が思いの丈を吐き出した後、しばらくの静寂が過ぎていった。

「私、今日告白するつもりだつたんですね」

ゆめちゃんが語りだす。

「でも、先輩がそんなこと言つちゃうなんて思つていなくて」

荒ぶつた気持ちを落ち着かせるように、訥々と言葉を吐き出す。

「先輩の一言で、私、泣きそうになつたんですよ」

少し声が震えていた。

「一瞬、先輩にフラれたつて思つちゃいましたし」

目じりにわずかな涙をたたえて僕を見据える。

「だから、先輩にはイヤつていうくらい私のことを知つてもらいます。そして、絶対に私に告白させてみせますから！」

強い決意のこもつた目だつた。

△▼△

それからと、いうものの、必然というべきか、レッスン以外の時間にも合う機会が増え、頻繁にお昼ご飯を一緒に取るようになつた。

その時には、レッスンのことは頭から外して、なんてことのないありきたりな話をする。

もちろん、二人で出かける機会も増えた。

そう言つた時間のおかげで、ゆめちゃんの好きなものだつたり、特技だつたりと、今まで知らなかつた身近なことを知ることができた。

そして、時は移ろいS 4決定戦。

ゆめちゃんは僅差で白鳥に敗れたものの、見事S 4の座を手に入れることができた。

本人は少し悔しそうではあつたものの、たつた1年での白鳥に追いつくことができているんだから、やっぱりゆめちゃんはすごいポテンシャルを持つてゐるんだと改めて思つた。

S 4決定戦のあと、僕とゆめちゃんは二人で会場近くの浜辺にいた。

「とりあえず、お疲れ様。そして、おめでとう」

「ありがとうございます」

まだ、あまり実感がないのだろう。

ゆめちゃんは少し惚けたように遠くを見ている。

「あの白鳥に僅差だなんてなあ。やっぱりすごいや」

「先輩のおかげですよ」

「いやいや、ゆめちゃんのボテンシャルがすごかつたんだよ」

「でも、先輩がたくさん手伝ってくれたからここまで来れたんですよ」

「そう言つてくれると、こっちも鼻が高いや」

そこで、話が途切れる。

今こそ、想いを伝える時だ。

「あのさ」

「はい?」

僕の少し上ずつた声に、ゆめちゃんがこちらを向く。

「今まで保留してた返事に、今日答えようと思う」

僕は居住まいを正し、ゆめちゃんに向き直る。

ゆめちゃんも僕の方を向く。

ゆめちゃんは、どこかうれしそうだけど、少し不安そうな笑みを浮かべていた。

「僕は、ゆめちゃんのことが好きです。どうか僕と付き合ってくれませんか?」

ついに想いを伝えた。

以前、ゆめちゃんの想いを聞いてはいるものの、やはり返事を聞くまでは緊張してしまう。

どんな返事が来るか待っていると、僕はゆめちゃんに抱き着かれた。

「遅いですよ。ちょっと心配したんですからね」

「ごめん。でも、途中からゆめちゃんのS4になるつていう自分の夢をかなえて欲しいっていう思いが強くなつたから」

「じゃあ、先輩はもし私がS4になれなかつたらどうするつもりだったんですか?」

「来年まで待つよ。もちろん、そんなことはさせないけどね」

「もう……」

呆れたような声を出すゆめちゃん。

弄ばれたような気がしてならないんだろう。

「でも、ゆめちゃんはS4になれたんだから結果オーライでしょ」「そうですけど……。なんだか気に入らないです」

「そいつは困ったなあ」

その時、ゆめちゃんが『いいこと思ついた』とでも言うように、ニヤニヤとした表情を浮かべていた。

「決めました。先輩がこれからも私のことを応援して、私を愛してくれるなら許してあげます」

悪い顔をしたと思えば、とても可愛らしい命令だった。

もちろん、従わないなんてことはなく。

「その命、謹んで受けさせていただきますとも」

出会いは一期一会。

二人の出会いは偶然だったかも知れない。

けれど、その出会いから愛が生まれたのは必然だったのだろう。

## ”特別篇” ゆめの誕生日①

ゆめちゃんの誕生日が翌日に迫った今日。

昨日一日中プレゼントを考えてみたけど、いまいちピンとくるものは見つからなかつた。

今朝から何がいいかと街を見て回つていると、ふと『見つからないなら作つてしまえばいいんじやないか？』という考えに至つた。

ないなら作つてしまえばいいとはよく言つたもんだ。

それからは話が早く、何を作ろうかはあつという間に決まつた。そしてそれを実現するために、ゆめちゃんの実家である七色洋菓子店に来ることにした。

「おはようございます」

「ああ、おはよう。さつき電話してくれたけど、ゆめのためにケーキを作りたいんだつて？」

「はい。ただ初めてなので、教えてもらいながらという形にはなりますが」

お義父さんに、改めてゆめちゃんの誕生日ケーキを作りたいということを伝える。

「わかつた。ゆめのためなら一肌脱ごう。でも、まだ認めたわけじゃないからな」

「ありがとうございます！」

お義父さんはこういつているが、なんだかんだ以前よりも認めてはくれて いるみたい。

もちろん、もつと自分を磨いてゆめちゃんにふさわしい人間になつて、お義父さんに認めさせるつもりだ

「ただ、悪いけどこつちもお店があるからお客さんが落ち着いた夕方ごろにまた来てくれ」

「わかりました。その間にどんなものを作るか考えておきます」

「ああ、それじゃ」

そして僕は店を後にし、アイデアを固めながら一度学園に戻ることにした。

△▼△

時は移つて翌日。

ついにゆめちゃんの誕生日だ。

場所はもちろん虹野家。

さすがのご両親も、今日は休みにするみたいだ。

まあ、年に一度しかない一人娘の誕生日なんだから許されてしかるべきだろう。

「司さんはゆめにどんなプレゼントをするんですか？」

「あつ、私も気になる！」

「わたくしも気になりますわね」

そして、僕とローラちゃん、真昼ちゃん、あこちゃん、小春ちゃんは一緒に虹野家に向かっている最中だ。

「それはちょっと内緒だ」

「「えー」「」

秘密になると、案の定非難が飛んでくる。

わかつてはいたけど、その方が楽しんでくれると思うから仕方がない。

その後なんだかんだと聞かれてもはぐらかしていると、とうとうゆめちゃんの家についた。

「こんにちは、おじやまします」

「「「おじやまします」「」」

「みんないらっしゃい！早く上がつて！」

玄関をくぐると、ゆめちゃんがお出迎えをしてくれた。

誕生日だからか、普段よりも少し派手なおめかしをしている。

「あつ、忘れるところだつた。ゆめちゃん、誕生日おめでとう

「ありがとう！」

そして僕たちはリビングに通され、ゆめちゃんの誕生日パーティーがスタートする。

「それでは改めまして、ゆめちゃん誕生日おめでとう！」

「「おめでとう！」「」

△▼△

パーティーゲームと、ゆめちゃんのご両親が作ったクッキーを楽しんでいると、ついにプレゼントを渡すことになった。

「はい、ゆめ。これプレゼント」

「ありがとうローラ！」

そして、僕が渡す番になつた。

「さて僕が渡す番だけど、ゆめちゃん、なにか気づかない？」

「なにか、ですか？」

ゆめちゃんは首をかしげる。

「ほら、誕生日って言つたら必ず食べるアレがまだでしょ？」

「えーっと……。あつ、ケーキ！」

ゆめちゃんは、はつとしたように答える。

それにつられて、みんなも気づく。

「つてことは、司さんが作つたんですか？」

「そう。今から持つてくるから、ちょっと待つてて」

そう言つて、僕はお店の方からケーキを持ってくる。

「はい、これがゆめちゃんの誕生日ケーキ。どう？」

そう言つて、僕は作つたケーキを渡す。

「おいしそうなロールケーキ……」

僕が作つたのはロールケーキ。

奇をてらうのはあまり良くないと感じて、生クリームといろんなフルーツのシンプルなロールケーキを作つた。

「ありがとうございます！ 大切にします！」

「いやいや、大切にしちゃダメでしょ」

「あはは、そうでしたね」

その後は、もちろんケーキを切つてみんなでおいしく食べた。

ゆめちゃんが、断面のフルーツを虹色に見立てていたことに気づいてくれたのは少し嬉しかつた。

そして、楽しい時間はあつという間に過ぎ、夕暮れの時間になつた。  
「司さん、今日はありがとうございました」  
「こちらこそ。今日は楽しい一日だつたね」

僕はゆめちゃんと、僕の見送りと称したデートをしている。

お義父さんは少し不満げだつたけど、お義母さんが行つておいでと言つてくれた。

お義母さんには心の中で頭を下げ、今に至つている。

「ケーキ、おいしかつたですよ」

「それは良かつた。初めてだつたけど、ゆめちゃんのお父さんが丁寧に教えてくれたんだ」

「お父さんが？」

ゆめちゃんは意外だつたというような顔をする。

それも仕方ないだろう。

普段の僕に対する当たりが強いからね。

「そうだよ。ゆめちゃんのためだつたら妥協はしたくない、つて言つてたから」

「そうだつたんだ……」

実際、ケーキを作つている時のお義父さんは真剣な表情をしていたし、教え方もすごく丁寧だつた。

親バカというのもちよつとアレだけど、ゆめちゃんが喜ぶことと、お菓子作りについては妥協したくないっていう信念を感じた。

「だから、改めてゆめちゃんのお父さんを尊敬したな。同時に、ゆめちゃんのことはたとえお義父さんでも譲れないなつて思った」

「司さん……」

「だから、これからも頑張つてお義父さんに認められるように頑張るぞ！」

そう言い切つたところで、ちょっとゆめちゃんは不満そうな目で見てくる。

「それはいいんですけど、ちゃんと私のことを愛してくれますよね？」

「もちろん」

返事はしたもののに、ゆめちゃんはまだ何か物足りないようで、『ん、ん』と顔を上げてくる。

言葉だけでなく、態度で示せということだろう。

だから僕は迷うことなくゆめちゃんを抱きしめ、口づけをした。

これからも愛することを誓うように。

## ”特別篇” ゆめの誕生日②

ゆめちゃんの誕生日の前日、僕は前回と同じようにケーキを作つていた。

場所も同じく七色洋菓子店。

一つ違うのは、隣にゆめちゃんがいて、一緒にケーキを作つているということだ。

「ふんふんふーん♪」

「楽しそうだね」

「司さんと一緒にケーキを作るからですよ！」

「そりやあ良かつた」

今回も一人でケーキを作るつもりだったが、行動を読まれていて、待ち構えていたゆめちゃんにお願いされたのだ。

「去年のお返しも込めてケーキを作るなんて律儀だね」

「大切な友達にあれだけ盛大に祝つてもらつたんですから当然ですよ。それに、今回はエルザさんも来てくれるみたいですから」

僕はまさかの名前に驚きつつも、エルザさんとも友達と呼べるような関係になつていることに心の中で喜ぶ。

「だつたらちゃんとモテなさないとね」

「うん。エルザさんは普段からいいものを食べていそうだもんね」

手を動かしながらも会話は止まらない。

「そう言えば、今年のプレゼントはこんなことでいいの？」

「こんなことつていうのはひどいよー」

「ごめんごめん」

つい『こんなもの』といつてしまつたが、ゆめちゃんには御法度らしい。

「こうやつて司さんと一緒に何かをした思いでが私にとつてのプレゼントなんですから」

「そうだつたね」

「思い出は絶対になくならないですかね」

まだ中学生なのに成熟した価値観だと思う。

一度小春ちゃんと離れていた時期がゆめちゃんをここまで成長させたんだろうと思うけど。

そう話しているうちに、ケーキもほぼ完成した。

「さ、あとはイチゴをのせるだけだ」

「おー。たくさんせちゃおうよ」

「待つて待つて、せめてろうそくを指す場所は残してー！」

パーティーの前日ともあつて少し浮かれるゆめちゃん。

用意していたイチゴをほぼほぼ使い切るまでのせていつた。

なんとかイチゴを数個死守し、ケーキを完成させた。

「イチゴがたくさん！おいしそーー！」

「食べるのは明日だぞ」

「あ、そうでした……」

おいしそうなケーキの見た目につられて手が出そうになるゆめちゃんを止める。

「その代わりに、さつき残しておいたイチゴとジェラートでちょっと待つてて」

「はーい！」

こういうところは年相応のはしゃぎ方だなあと思う。

この笑顔はもちろん、さつきのまじめさも愛おしい。

「よし、できた。さあ召し上がれ」

「わーい。いつただきまーす」

暖かくなってきたとはいえ、ジエラートで体を冷やすといけないので、お茶を淹れるためのお湯を沸かす。

「本当においしいからですよ」

「本当においしいからですよ」

見ている人もつられて笑顔になっちゃうような笑顔だ。

「えいっ」

「ぶにつ。

つい頬を指で押してみたくなつた。

やわらかい。

ぶにぶに。

「ちよ、ちよつと急に何するんですか」

「いやあ、ほんの出来心つてやつ。でもやわらかくてずっと触つたい」

ぷにぷにぷに。

ゆめちゃんのほっぺたを押す手は止まらない。

「こうなつたらお返しです！」

はむつ。

ゆめちゃんのほっぺたのやわらかさを味わっていると、ふとその感触が消え、代わりに指先が暖かい感触に包まれた。

「？」

やわらかさが心地よくて閉じていた目を開ける。

「？……！？」

まさかの姿に目を疑う。

なんで僕の指が咥えられているんだ？

「え、ちよ、ゆめちゃん？！」

ゆめちゃんは若干頬を赤らめながら上目でこちらを見てくる。

これはちよつと僕の情緒が耐えられる気がしない。

すると僕の思いをあざ笑うように、指から口を離す。

ゆめちゃんの口元から伝うものに目を引かれ、つい僕も唾を飲み込む。

「司さんが悪いんだよ。私をこんな風にさせちゃって」

ゆめちゃんから口が離せない。

「責任、とつてくださいよ」

ゆめちゃんに詰め寄られる。

僕も腹をくくる。

ゆめちゃんを抱きしめ、顔を寄せ——。

「今年のケーキはどんな出来かな

ばっ！」

そう音が聞こえるくらいの勢いで僕とゆめちゃんは距離を取り、調

理場にやつてきたお義父さんから顔をそむける。

「イチゴ、多すぎないか？」

「そ、それはゆめちゃんがたくさんせちゃつたんです」

「そ、そうなの。ほら、イチゴは今が旬だから」

「確かに、旬のものをたくさん使うのはいいアイデアだ」

「ごまかしていることにホツとしつつ、ゆめちゃんの方を見ると、ちよつと熱っぽい目で僕を見つめ返してくる。

これはゆめちゃんのご機嫌取りが大変だと思いつつも、甘えてくるゆめちゃんの姿を想像すると、心のどこかで喜んでいる自分がいる。ゆめちゃんの誕生日の前日だというのに、当日を待たずして浮かれ切っているのであつた。

## 香澄姉妹

### 夜空さんと真昼ちゃんとの出会い

僕の名前は飯島司。

四ツ星学園男子部に所属している中等部3年生だ。

「ねえ司君。これ着てみない?」

この綺麗な髪の女の子は香澄夜空さん。

S4に選ばれる実力と、美しさを兼ね備えている。

「いーや、司先輩にはこつちのほうが似合うつて!」

こつちのメツシユが入った髪の女の子は香澄真昼ちゃん。

姉の夜空さんに劣らない美しさがある。

さて、現実逃避はここまでにして現状を確認しよう。

今、二人に服を薦められているように見えるが、実際は着せ替え人形のごとく扱われている。

あれを着てはこれを着て、の繰り返しだ。

それに加え、もう一つの問題がある。

薦められる服が『女性向け』であるということだ。

そのきつかけは少し前にさかのぼることになる。

—△▼△—

ある日、ドラマの撮影で夜空さんと共演することになった。  
姫を守る騎士ナイトの役らしいのだが……。

「これ、どう見ても女性が着るようなメイド服だよな……」

そう、女装騎士なのである。

僕を見た監督が一言、

「この子なら女装でイケる!」

なんて言い出したことが発端らしい。

正直恥ずかしい。

こつちは思春期真っ盛りだぞ。性癖がひん曲がつたらどうしてく  
れるっていうんだ。

そんな愚痴はさておき、衣装に袖を通して簡単なメイクをすればあ

ら不思議、かわいらしい女の子が現れたではありませんか。

……正直なところ、ここまで自分に女装が似合うとは思わなかつた。



セットに移動し、お姫様役の夜空さんと対面することになったのだが。

……なんか夜空さんの目つきがおかしい。

そしてすごく嫌な予感がする。

しかし、撮影が始まってしまえばそんなことはなく、つつがなく撮影は行われた。

夜空さんも美組とはいえ、さすがS4だ。ミスがない。

(やつぱりさつき視線は僕の気のせいだつたんだろうか。とりあえず撮影もあと少しで終わるし、最後まで頑張るか)



撮影は無事終わり、僕は楽屋に戻った。

マイクさんを呼んで衣装を脱ごうかな、と思つていたところに

「おつかれさま、司君」

夜空さん  
彼女はやつてきた。

「お、お疲れ様です。夜空さん」

まさか楽屋にやつてくるとは思わなかつた。

何だろう、すごく嫌な予感がする。

「ねえ、司君。本当に男の子なのよね?」

「え、ええ。ちゃんと男です。今こんな格好をしてはいますが」

「男の子か……。それもそれでなかなか面白いわね。私、あなたに興味が出てきたの。よかつたら連絡先を教えてくれないかしら」

「僕に興味ですか……。まあ、連絡先でしたら全然かまわないだけ

ど」

「ほんと?! よかつた。それと、あと一つお願ひしたいことがあるのだけれど、いいかしら」

「お願いですか……。いつたい何でしよう」

「写真を撮らせてくれる?」

ん？写真？

「えーっと、この格好のままですか？」

「もちろん！」

満面の笑みで返された。

「聞いておきたいのですが、いつたいどうしてでしようか？」

「かわいいからに決まってるじゃない！」

思春期の男の子にかわいいなんて言わないでほしい。

正直言つてうれしくない。ただ、夜空さんに褒められるのはうれしい。

しつかし、夜空さんは綺麗だなあ。すてきな笑顔だ。

「僕なんかでよければ好きに撮っちゃってください」

「ありがとう！」

男の尊厳を捨てよう。

夜空さんのこんな笑顔を見られるのならそれくらいどうつてことない。

この後満足した夜空さんが去り際に一言、

「今度は私が似合うものを探してあげる」

という言葉を残していった。

あれ？これって僕は夜空さんの着せ替え人形になってしまったのか？

そして後日、一緒に街に出かけることになったのであつた。

—△▼△—

夜空さんに気に入られる一件の少しあと、ゆめちゃんの友達の一人である真昼ちゃんの相談に乗ることになった。彼女曰く、演技の練習がしたいのだとか。

どうして僕なのだろうか。

早乙女さんとかの方が適任だと思うのだが。

「どうして僕に演技の相談をしたんだ？早乙女さんの方が適任だと思うんだけど」

「えつと、わたしの特技が空手だつて知つてますよね？」

「うん。この前瓦割りしてたしね」

「それでその特技を知った業界の人たちが、ぜひアクションシーンのある演技を、つて」

「ノルマニ」

「なるほど。でもどうしてそれが僕にたどり着くことになつたの?」

多いですよね？」

「ああ、なるほど。でもあの大半はスリックアクターさんたちがやってるんだけど……」

「それでも、身近な人で頼れるのが司先輩しかいないくて」

かわいい二にんのことを「かわいい」で隠れておいた方がよし、腹をくくるか。

二三之卷

「本当ですか!?」

「ああ。ただ君の求めてるレベルじゃないかも知れないけど、それで

「いいか、うん、いいかな？」

A vertical stack of three small black triangles, each pointing downwards. The top triangle is outlined, the middle one is solid black, and the bottom one is outlined.

これをきっかけに距離を縮めることができた。

御礼も兼ねて一緒に買い物に行こうと誘われるほどだ。

約束の日、僕たち一人は町でショッピングをしていた。

「うん、  
ハハは」

真昼ちゃんに連れられて店に入ると、見覚えのある顔を見かけた。

変装をしてはいるが、あれは夜空さんだろう。

。それで夢なことをこわないシセイ距離を取らうとしたのが本

「あれ？お姉ちゃん？」

「ん？ 真昼……と司君じやない」

真昼ちゃんが話しかけていた。

……つてええええ  
!??!!?

この2人姉妹だったのか!?

と、僕が混乱している間、姉妹の間では

「どうしてお姉ちゃんが司先輩を知ってるの?」

「最近お仕事で一緒になつたのよ。ところで、真昼はどうして彼と二人つきりでお買い物なのかしら?」

「そ、それは……お礼よ。演技の練習に付き合つてくれたことの」

なにやら僕について話しているようだが、聞き取り辛い。

俗にいう難聴系つてやつ?

まあさすがにそんなことはないと思うが、聞き取ろうと思つてもいまいちはつきり聞き取れない。

さすがに女の子の話に聞き耳を立てるのも野暮だろうと思い、服を見て回ろうと思つた。

すると突然夜空さんに腕をつかまれた。

「私たちが司君の服のコーディネートをしてあげる」

嫌な気しかしなかつた。

だつてもうすつごい笑顔なんだもん。

そして僕は着せ替え人形と化した。

振り返つて考えてみてもどうしてこうなつたかなんて僕にはわからぬ。

やつぱり女の子はわからない。

# 司くん、アイドルになる・・・・・？

「うわああああ！」

悪夢を見て咄嗟に跳ね起きた。

なんという夢を見てしまったんだろう。

2人の女の子に着せ替え人形にされ、拳句の果てに街を歩き回る夢だなんて。

……疲れてるんだろうな、きっと。

「とりあえず今日は学校だし、切り替えていこう。うん、そうと決まりばさつさと着替えるぞ」

制服を取り出すためにクローゼットを開けると、僕は驚愕した。あれ?なんで女性向けの服が入ってるんだ……?

ロングスカートやそれに合わせた長袖のTシャツがかかっていた。おまけにご丁寧にセミロングのウイッグまでおいてある。

……あ、夢じやなかつたんだ。

昨日、結局買つてもらつたんだつけ。おそらく夜空さんからだろうけど。

そしてこれを着たまま町を回つたんだよな。さすがに寮に戻る前に着替えたけどさ。

そりや、忘れたともなるよなあ。

まつとうな思春期の男子には恥ずかしすぎるよ。この前のドラマの撮影然り。

しつかし、ルームメイトがいなくてよかつたあ。

ルームメイトがいたら絶対揶揄われるやつじやん。

つと、記憶の検索をしているうちに時間が経つてしまつた。制服に着替えないといと。

△▼△

「授業をまともに受けるのも久しぶりだなあ。なんだかんだで仕事が入つてたし」

教室に入つて教科書を取り出すことがひどく懐かしく感じる。

ただ、これも人気になつてている証拠だと実感できることなのではあ

るが。

学生の本分は勉強だ、とか一部の人があつた。そうではあるが忙しい人たちは課題という形で義務教育の内容は学習している。

それはさておき、お昼休みに入るとクラスメイトと久しぶりに机を囲んで昼食をとることとなつた。

「しかし、司とこうして昼飯を食べるのも久しぶりだな」

「そういうわれるとそうだな。なんだかんだでお昼は口ケ弁か外食だつたし」

「人気者だつていう証みたいなものだろ？」

と、親友の海東が野次つてくる。

「海東も似たようなもんだろう。同じ作品で共演してるわけだし」「主役と脇役じや話が違つてくるさ」

そんな風に他愛のない話をしていたのだが、司の前に急に爆弾が降つてくることとなつた。

「そ、う、い、え、ば、さ、今、人、気、が、あ、る、女、子、部、の、香、澄、姉、妹、が、昨、日、可、愛、い、女、の、子、を、連、れ、て、た、ら、し、い、ん、だ、つ、て。し、か、も、ア、イ、ド、ル、じ、や、な、い、ら、し、い。ほ、ら、こ、の、写、真、」

「ブフオオオツ！」

思わず飲んでいたお茶を噴き出してしまつた。

「おいおい、何してくれんだよ……」

「すまんすまん。ちよつとお茶が変なところに入っちゃつて」

「つたく……。氣をつけろよな」

「本当にすまん」

怪しまれるかと思つたが、何とかなりそうだ。

しかし、写真がすっぱ抜かれてたとは。

有名人になるつて怖いね（他人事）。

でも、そのあとを追跡されないみたいで本当によかつたよ。

もし正体が僕だつてバレたなら、これからのおアイカツに支障を来してしまうかも知れないからね。

と、自分の世界に入り浸つていると肩を叩かれて現実に意識を戻した。

「司、電話かかってるぞ」

「ああ、さんきゅ」

いつたい誰からなんだろうかと画面を確認すると、そこには「香澄夜空」の名前が記されていた。

「悪い、ちょっと席外すよ」

さすがにここでは通話はしたくないため、席を外し食堂の外で電話に出ることにした。

「もしもし、司です」

『司くん、ごめんね。写真撮られちゃったみたいで……』

「いえ、自分も多少油断していたのでそれに関して夜空さんは悪くないですよ」

『そう言つてくれると助かるわあ。ただ、ちょっとまずいことになっちゃつたの』

「まずいこと、といいますと?』

『実は、あなたをアイドルとして勧誘しようとしている方がいて、その人に紹介してくれつて頼まれちゃつたの』

「はい?僕はすでにアイドルですが』

『そうじゃなくて、女の子としてアイドルにしたいって言つてきているの』

……え?

エエエエエエエツツツ!!!

「う、嘘…………ですよね?」

『私も嘘だと思つたんだけどねえ……』

嘘だと言つてよ○一二一イ!（現実逃避）

『それでね、一度会つて話がしたいそうなの。もちろん責任を取つて私も同席するわ。そしてその時にきちんと断りましょう?』

「そう、ですね」

仕方ない、腹をくくるしかないか。

相手方には申し訳ないがきつぱりと断らせていただこう。

「わかりました。夜空さんがいてくださいなら心強いです」

『ほんとにごめんね。それでね、その時に着て行くお洋服のことなのだけれど』

あ。こうなることを考えていなかつた。

『昨日着ていたものは……』

『それじやあだめよ。もう少ししつかりしたものを用意しないと』  
また着せ替えされちゃうのか。

ただ、心なしか夜空さんの気分もよくなつていてる。

本当に申し訳なく思つてくれていたのだろう。

「わかりました、観念します。それでまたショッピングですか？」

夜空さんの笑顔が見られるなら相応の対価……かどうかは分から  
ないが、それでも笑顔になつてくれるというのはけつこううれしかつ  
たりする。

出会つてまだそれほど日が経つた訳ではないが、夜空さんの笑顔に  
惚れてしまつたみたいだ。

これも惚れた弱み、ですかねえ。

## 夜空さんと僕

関係者の人とのお話をする日の午前中、夜空さんと街でショッピングをしていた。

もちろん僕は女装している。

服装は前回買つてもらつたロングスカートとTシャツ。

今度はいつたい何を着せられるんだろう。

「じゃあこれ着てみて?」

「はい、わかりました……」

渡されたのは、あまり体の線が出ないゆつたりとしたニットのトップスと、同じくゆつたりとしたハイウエストのジーンズ。体の線が比較的細いとはいえ、ある程度筋肉がついていることを気してくれているのだろうか。

実際に試着室で着てみると、体の線が丸くなり女性らしさが表れる。さすが美組のトップだ。

「着替えました。どう、ですか……?」

「……!!」

アレ?

夜空さんがフリーズした……?

!?と混乱しかけたところ、夜空さんに抱き着かれた。

「??!!」

「やっぱり私の見込んだとおりね! すっごく似合つてる!」

目を輝かせながら夜空さんが言つた。

でも、僕はそれどころではない。

今鏡を見たら顔が赤くなつてそうだ。

だつて、夜空さん、すごくいい香りがするんだもん。

そもそも女性らしい柔らかさを感じる……。

ちよつと理性がヤバいですね!

「その、夜空さん……。急に抱き着かれると……」

「あら、ごめんなさい。あまりにもかわいかつたからつい、ね」

その時の夜空さんは、なぜだかすぐ魅力的に見えた。

……胸の高まりが止まらない。

これって、もしかして……。

いや、今このことを考えるのは止そう。

今は面倒ごとの処理が先だ。

そうやつて僕は心を落ち着けた。

その間に夜空さんが会計を終えていた。

僕は新たな服を得て街へと繰り出した。



「ところで、今日お会いする方つてどこかの芸能事務所の方なんですね？」

「そうよ。私たちはセルフプロデュースでアイカツしてたからあまり関わりはないけれど、芸能事務所にスカウトされてアイドルになる人もいるからね。今回はたまたま顔見知りの人だつたからやむなくこの場を設けることになつたの」

「そうだつたんですね。でも、どうして芸能事務所とつながりが？」

単純に考えて四ツ星学園の生徒である以上、関わることはほぼないはずだらうが……。

「ほら、私の両親つて芸能関係者でしょ？だからその関係でたくさんの人と会う機会があつてね」

「なるほど。それなら納得できます」

夜空さんの両親つてすごいんだなあ。

僕の両親はそれに比べたら全然平凡だし。

「さあ。着いたわ。相手方は連絡ではもうすでに到着しているそなうの」

「こ、ですか」

着いたのは、街の有名な喫茶店だつた。

店の前も人通りが多いし、店内もほんどの席がうまつている。

それだけ周囲も当然騒がしくなり、話をするにはうつつけだらう。

「あ、夜空さん。一つ聞きたいことがあるんですけど」

「何かしら？」

「……一人称はどうしましよう」

「そうね……。話しやすい方で構わないわよ、つて言つてもあなたは演技が上手だつたわね」

「はい。どちらでも演じられますが」

「だつたら、せつかだから『わたし』でいいんぢやないかしら。その方が私も説明しやすいし」

「わかりました。頑張ります」

そうして、僕は気持ちを固めて夜空さんについていった。



店の中に入ると、スーツを着た男性が比較的離れたスペースに座っているのが確認できた。

恐らくあの人があのんだろう。

「お待たせしました武内さん」

「どうも、この度は無茶に応えてくれてありがとうございます。お連れの方が、あの」

「そうです。ほら、自己紹介して」

「え、えと。かどたに門谷司つていいます……。よろしくお願ひします」

「どうも、こちらこそよろしくお願ひします」

そして、僕たち二人は武内さんに促され席に着いた。

「長い話は必要ないと思いますので单刀直入に言います。司さん、私の事務所に所属してアイドルになりませんか？」

「申し訳ありませんが辞退させていただきます」

「……どうしてなのか聞かせていただけますか？」

「わたしにとつてアイドルとは応援するものであつて、なるものではないからです。それに、わたしはアイドルに向いていないので」

実は男だからなんて言えない……。

でももつともらしい理由を言わなければ。

「私からも一つ言わせてもらえるかしら」

「ええ、どうぞ」

「私にとつて、彼女は仕事のスイッチを切つてくれる存在なの。だか

ら彼女がアイドルになるなんてことがあれば、私の心が休まらなくなっちゃうの。だから、私からもこの件はなかつたことにしていただけないかしら」

困っていると夜空さんが助け舟を出してくれた。

でも、これって本当に思ってくれているのだろうか。

本当だつたらうれしいけども。

「そうですか。そこまで言われたら仕方ありませんね。香澄夜空というアイドルの心の支えとなつていてもあれば、何かあつた際に責任が取れませんからね」

武内さんは苦笑しながら言つた。

そして、この話はなかつたことになつた。



「本当に今日はごめんね」

「いえいえ。気にしてませんよ」

こうは言つたものの、これから夜空さんに会う機会も減るんだろうなど少し寂しさが募る。

「それでね。今日のお詫びと言つたらなんだけど、司くんの言うことをなんでも一つ聞こうかなつて思つてるの。ににがある?」  
へ?

今なんでもつて、ゲフングエフン。

「夜空さん。男に対してなんでも言うことを聞くなんて言つちやだめですよ。何しでかすかわからないんですから」「でも、司くんはそんなことしないでしよう?」

「それはそうですが!」

「じゃあ何も問題はないじゃない。で、何がしたいの?」

信頼されていると取るべきなのか、揶揄われているだけなのか。  
……なんか調子狂うなあ。

でもまあ、やりたいことはとつくに決まつてゐんだ。

それを言うだけだ。

「夜空さん」

「はい」

「こんな格好の僕とではなく、男としての僕と今度一緒にお出かけしてくれませんか」

僕の言葉に對して、夜空さんは少し驚いたような顔をしたかと思えば、すぐ納得のいったような表情へと変わった。

「思えば司くんがかわいい姿しか見たことがなかつたわね。いいわ。その願い、叶えて進ぜよう！」

「ははっ、ありがたき幸せー。つて何ですかコレ？」

「特に深い意味はないわ」

それから、冗談を言い合つたりして学園が近くなるまで二人で話を続けた。

お互に笑い合い、自然と距離が縮まつたような気がした。

## 真昼ちゃんと僕

＼ s i d e 真昼／

……見てしまった。

お姉ちゃんと司先輩が手をつないで歩いているところを。  
(やつぱり、お姉ちゃんと司先輩つてそういう関係なのかな……)  
もしそうなら、私にチャンスはないのだろうか。

……またお姉ちゃんは私を置いて行ってしまうのかな。  
(ううう。なんだか気が晴れない。こんな時は!)

密かに持っていた瓦を取り出し、心を無にして、割る!

「たあーーっ!!」

パリン、と気持ちよく瓦は割れ、気持ちも幾分かマシになつた。  
そして、決心もついた。

「たとえお姉ちゃんでも、これだけは絶対に負けられないから!」  
そうと決まれば行動開始だ。

△▼△

意思を固めた次の日、私は早速行動に出ることにした。

「司先輩、今日一日レッスンしてくれませんか?」

「今日一日? うーん、お昼過ぎまでなら構わないよ」

「本当ですか?! ありがとうございます!」

(よし。まずは第一段階が成功)

単発ドラマに出演が決まっていたことを利用して、二人きりの時間を作ることができた。

そして、レッスンの最中もなるべく近づいて意識させる。

お昼の時もアピールすることを欠かさない。

「先輩。今日、実はお昼ご飯を作つてきただす。よかつたら食べてください」

「いいの?」

「はい。レッスンのお礼には足りないかもしないんですけど」

「いやいや、そんなことはないよ」

司先輩がお弁当を受け取つてくれた。

「じゃあ、いただきます」

少し緊張しながらも先輩の様子を窺う。

栄養と見た目にはきちんと気を遣つたし、味もいいはず……。

「おいしい！」

「お口に合つてよかったです」

おいしいと言つてくれたことがすぐくうれしかつた。

その感情を表に出すのを必死に堪え、心の中でガツツポーズを決めていた。

△▼△

レッスンの時間もとうとう終わりとなつた。

今日はとてもいい日にできた氣がする。

演技の上達もさることながら、司先輩との距離をぐつと縮められた気がする。

「先輩、今日はありがとうございました」

「ドラマ、頑張つてね。うまくいくよう応援してるから」

そう言つて先輩はお仕事に向かつていつた。

(……これで私のことを意識してくれるようになるかな。いや、なつてもらわなきやだめだ)

これからもしばらくアピールは続きそうだ。

＼ side out ／

△▼△

＼ side 司 ／

真昼ちゃんのレッスンを終えて撮影に向かう途中、レッスンの最中のことを考えていた。

いつもより距離が近かつたこと。

ボディタッチが時々あつたこと。

そして真昼ちゃんのお手製のお弁当がおいしかつたこと。

距離が近い分、姉に似て綺麗な顔も必然的に近くなり内心ドキドキしていた。

ボディタッチも心なしか多い氣がして気が気でなかつたし。

よくよく思い出せば、台本に書いていないことまでやらされたよう

な気がする。

(いや、真昼ちゃんがそんなことをするわけないよなあ。)

「にしても、お弁当を食べたときの笑顔はかわいかつたなあ」

栄養から何からいろいろと考えて作ってくれたんだろう。

でも、わざわざこんなことをしてくれたなんて……。

「まさか……ね」

僕はオーバーヒート仕掛けた頭を覚ますために、考えるのをやめた。

△▼△

次の日、仕事がなく友達と昼食を取ろうと食堂に移動していた。その途中、珍しい人ばかりに出くわした。

「なあ海東。人だかりができるけど、今日何かあつたつけ?」

「いや、何もないはずだけど。ちょっと見てみるか」

野次馬根性で覗いてみると、そこにいたのはお弁当を持つ真昼ちゃんだった。

「なあ司。お前あの子のこと知ってるか? 確か女子部の1年生に知り合いがいるんだって聞いたぞ」

「いや、その……」

(知っているというか、むしろその知り合いの部類に入るのですが……)

もし素直に答えるとしつこくなりそうだと感じ答えあぐねていると、真昼ちゃんと目と目が合った。

(メトメガアワー)

何か脳内で聞こえた気がするが、無視だ。

僕に気づいた真昼ちゃんは、ぱあっと顔を輝かせてこちらに駆け寄ってきた。

どうやら僕を待っていたらしい。

真昼ちゃんが動くと同時に、周りの人だかりの目線も同時に動く。つまり何が言いたいかというと、自然と僕に視線が集まってきたのだ。

「司先輩、お疲れ様です」

「あ、ああ。お疲れ様」

周りからの視線が気になつて仕方がない。

恨みがましい視線から、ニヤニヤと面白いものを見るものまで様々だ。

舞台にあがつたときの視線とはまるつきり違つて心臓に悪い。

「と、ところで今日はどうしたのかな。わざわざ男子部の所まで来るなんて。まさか朝陽に用があるのかな」

「違いますよ。先輩に会いに來たんです」

（やつぱりかー）

薄々感じてはいたが、改めて言われると驚くものだ。

「そ、そうだつたのか。心当たりがないからつい、ね。それで、何の用だつたの？」

「お弁当を持つてきました。昨日、先輩がおいしいって言つてくれたからうれしくつて」

一層視線が刺さる。

「わざわざ作つてくれたの?!」

「はい！それで、よかつたら一緒に食べませんか……？」

上目遣いは反則でしょう。

拒否できるわけないじやん。

「う、うん。いいよ！」

そして、二人で昼食をとることになつた。

昼食の後、海東に問い合わせられたのはまた別の話。

この件以降、真昼ちゃんと僕は恋人関係だという噂が男子部の一部に広まつた。

朝陽には伝わつていないようで、良かつたのだが。

そして僕自身はと、真昼ちゃんに対して好きだという気持ちが芽生えていることに気づいた。

姉である夜空さんが気になつていて、妹の真昼ちゃんにまで惹かれているなんて。

僕はとんだクズ野郎だつたみたいだ。

そして、夜空さんとのお出かけの日が近づいてくる。

僕はいつたいどうなつてしまふのだろう。

## 夜空さんとデート

真昼ちゃんが男子部に突入してくるという事件から数日。夜空さんとのお出かけの日となつた。

内心浮足立つた僕は、待ち合わせの場所にした公園へと向かう。学校の前じやないのは、待ち合わせると何かと不都合だからだ。お互いがアイドルである以上、余計な波風は立てたくないからね。



「予定より早く着きました……」

緊張の所為か速足気味の移動になつてしまい、予定の時間よりも1時間早く着いてしまつた。

もともとは30分前に着いて心を落ち着けるつもりだつたのだ。だが、時間が延びて考える時間ができてしまい、先日の真昼ちゃんのことを思い出すに至つた。

(中途半端は、良くないよな)

以前よりは落ち着いてはいるものの、未だに心は両者に揺れている。

もちろん、相手からの好意には気づけている。

夜空さんからは、特別な男の子として。

真昼ちゃんからは、明確な好意が。

真昼ちゃんに告白すれば、まず間違いなくOKされるだろう。

でも、僕の中の夜空さんへの想いが真昼ちゃんからの好意を遮つてしまい、結果としてつらい目に合わせてしまうかもしれない。

だからこそ、今日のデートで夜空さんの想いをはつきりと聞き出さないと。

自分の中で結論を出し、頭を切り替える。

周りを見渡そうと頭をあげると、甘い香りとともに視界がふさがれた。

「だーれだ?」

いたずらっぽい声が耳に響く。

「夜空さん。ですよね」

答えを告げると、目の覆いが解かれ、視界が広がる。

そして、振り返つて答えを確認するまでもなく、彼女が目の前へ飛び込んできた。

「せいいかーい」

僕の明るくなつたばかりの視界に、眩しい笑顔が写る。

その笑顔を見て、改めて確信する。

僕はこの人が好きなのだと。

「今わかつた決め手は?」

「いつもの香水、です」

「やつぱり? それじゃあクイズにならなかつたなあ」

楽しそうに笑う夜空さん。

今日はこの笑顔をたくさん作つていこう。

△▼△

まずやつてきたのはゲームセンター。

僕は時々来ているのだが、夜空はおそらく初めてなはずだ。

「ここがゲームセンターだよ。夜空は来たことある?」

「ゲームセンターって実はほとんど来る機会がなかつたの。だからこれはいい体験になりそうだわ」

「それは良かつた。夜空でも楽しめそうなものの紹介するよ」

そう言つて、僕は夜空をエスコートしてゲームセンターの中へと入つていく。

ちなみに話し方とか変わつちやつてるけど、これは夜空から『同じ年だからもつと碎けた話し方で喋つてよ』と言われたからなのだ。決して彼氏面してるわけではない。

それから、夜空を連れていろんなもので遊んだ。

まずはダンスゲーム。

やはりというか、さすがS4に選ばれるだけのことはある。初見ながらもきちんと踊れていた。

終わつてから感想を聞いてみると『『こういつたものも時にはいいわね』と気に入つてくれた様子だつた。

次に定番のクレーンゲーム。

これが鬼門で、2人掛かりでも景品を取れなかつた。

もともとあまり得意じやないのに挑んだのが間違いだつたかなあ。

ただそれでも、夜空は楽しんでくれたようだ。

他にも太鼓をしたり、お腹がすぐまで遊び尽くした。

「そろそろお腹も空いたし、お昼ご飯にしようか」

「そうね。さて、次はどんなところに案内してくれるのかしら？」

「次も夜空のお眼鏡にかなうところだと思うよ」



やつてきたのは街の中のひつそりとした喫茶店。

喫茶店は意外とランチの穴場だつたりする。

それに、人が多くないから静かに過ごせる。

「へえ、こんなところに喫茶店があつたなんて。ここはランチをやつているの？」

「うん。こここのランチはおいしいし、風情があるよ。それに食後のコーヒーもおいしい。さあ、中に入ろうか」

「ええ、そうしましよう」

中に入るとカウンター席が7つほど、テーブルも2つほどでこぢんまりした感じを覚える。

ただ、今日はかなり空いていて、僕たち以外のお客さんがいない。僕は夜空を連れてあえてカウンターの方へ行く。

「ご注文は何になさいますか？」

店主が聞いてくる。

「ランチを二つお願ひします  
「かしこまりました」

僕に返事を返すと、店主は奥の厨房へと下がつていった。

「本当におしゃれなところね」

「実際に年季を重ねた結果だろうね。いい味が出てる」

そうやつて僕たちが話しているうちに、食事が来た。

喫茶店と言つても、出てくる料理は店によつて違う。

ここはスープとバゲット、サラダ、そしてメインのハンバーグがある。

「喫茶店つてこんなにすごいランチが出るのね……」

「そうなんだよ。だから、案外喫茶店で昼食をとるっていうのも悪くないでしょ?」

「そうね、気に入ったわ。さあ、冷めないうちに食べましよう」

夜空の言葉に従い、僕も食べ始める。

食べ始めて横を見ると、味も気に入ってくれたのか、料理を口にするたび驚いたり、ほころんだり、表情がコロコロと変わっていた。

その表情に僕は再度魅了されてしまった。

僕は食べることさえ忘れようとしていたほどだ。

やつぱり、僕は夜空さんが好きみたいだ。

改めて自覚したのはいいものの、よそ見のし過ぎで食べないわけにもいかないため、少し急ぎ気味に食べる。

どちらとも食べ終えた頃、最後のデザートとコーヒーを片手に、これから予定を決める。

「実はこれからのことを見ていらないんだ。何かやりたいことはある?」

「そうね……。ショッピングはどうかしら。司くんに似合うものを探してみたいの」

また女装フラグか?

「今日は違うわよ。司くんに男として似合うものを見てみたいの」

「そうか。それは楽しみにしておかないとな」



それから街のショッピングモールへ行き。ウインドウショッピングを楽しんだ。

ブランドのミューズとしてモデルをしているだけあって、やはりファッショセンスは素晴らしいものだった。

ただ、やはり女装させられそうになつたのはご愛敬。

本人曰く、無意識を探していたとのこと。

前回のことだが、夜空のセンスがいいものだから自分の女装した姿に見とれてしまうことがあつた。

だから憎もうにも憎めない。

まさか、僕は新たな扉を開いてしまったのだろうか。

それはともかく  
閑話休題

日も暮れ始めた頃になり、ウインドウショッピングを終えて夕陽を望むことができる展望台へとやってきた。

「やつぱりここ」の夕陽は綺麗ね」

「そうだね」

二人並んで夕陽を眺める。

結局、今まで夜空から聞き出すことができなかつた。

だから、今からここで夜空さんに想いを告げようと思つた。

心臓が高鳴る。

緊張で視界が安定しない。

今にも倒れてしまいそうだ。

それでも、今日を逃してしまつたら言えなくなつてしまふかも、と  
いう恐れが僕を奮い立たせる。

「あのっ！夜空さんっ！」

僕の強張つた声に驚きながらもこちらを向いてくれる。

「改まつてどうしたの？」

頭がくらくらする。

言わなきや。

言わなきや。

「僕は、」

一言だけで肺の空気が抜けてしまつたかのように、声が出ない。

「僕は、」

言え。

言え。

「僕は——」

言うんだ。

言うんだ。

「——あなたのことが好きです！僕と付き合つてくれませんか！」

言えた。

でも、これで終わりじゃない。

彼女は、僕をどう思ってくれているんだろう。  
波の音だけが聞こえる。

僕にはその時間があまりにも長く感じた。  
実際の時間は5分もないかもしない。

それでも、僕にはそう感じられた。

彼女がゆっくりと口を開く。

「私も、司くんのことが好き——」

僕は素直に喜ぼうとした。

「でも、条件があるの」

今、何て……。

「条件つて……？」

「司くんは悩んでいるんでしょう？ 真昼か、私か」

どうしてそれを知っているのだろう。

「だって、男子部の一部で噂になつてているのでしょうか？ 恋バナが好きな女子部ではもつと噂が広まるにきまつてゐるじやない。それに、真昼の様子を見ていたらわかるもの」

「それは、そだらうけど。どうして悩んでいることまで？」

「今朝、公園のベンチで頭を抱えているところが見えたの」

「見られていたのか」

まさかとは思うが、条件つて……。

「それで、条件とは……」

真昼ちゃんを悲しませてしまうのか？

僕に、真昼ちゃんをフレとでも言うのか？

「条件は一つ」

僕はたまらず息をのむ。

こんなことになつて姉妹が仲たがいを起こしてほしくなんかない。  
そんなことはあつてはいけない。

そんなことなら身を引くと言おうとした瞬間。

「私と真昼のどちらも幸せにしてもらうからね！」

想定外の答えが投げつけられた。

## 真昼ちゃんへの告白

＼ side 夜空／

最初は、ただ女装の似合う男子、という印象だつた。

でも、初めて共演することになつた相手が、女装男子というのはあまりにも強烈だつた。

しかも、かわいかつたから、ついつい目を向けてしまつたのも仕方ないと思うの。

撮影が終わつた後の無茶ぶりにも応えてくれた時には、少し感動してしまつた。

だから、彼の印象は強く残つた。

惹かれ始めたのは、司くんのアイドルの勧誘を断つたときのこと。お詫びに要求してきたものが、男としての司くんとお出かけをすることだつた。

このお願ひをしてくる時に、司くんの男らしさを垣間見たの。このギヤップに惹かれちやつた。

女装している時はあんなにおとなしくて可愛らしいのに、ふと一人の男性であることに気づかされる。

そして、約束のお出かけの日。

早めについていた司くんを見つけ、声を掛けようとしたけれど思いとどまつた。

何か悩んでいるような素振りを見せていたから。

あまり喜ばれることじやないけど、気になつてたまらずにこつそりと後ろに回り込んで聞き耳を立ててみた。

すると私と真昼について思い詰めていたみたい。

この時に、彼の真摯さに気づくことができた。

そして、この真摯さに私は惚れたんだ。

＼ side out／

△▼△

うーん……。

いつから夜空は僕と真昼ちゃんのことを知つてたんだ？

聞いても「乙女の秘密♡」って教えてくれないし。

ただ、本人が言わない以上どれだけ考えたって無駄だろう。それに、僕はもつと考えなければならないことがある。

真昼ちゃんへの告白についてだ。

僕は夜空から与えられた条件だし、真昼ちゃんのことも好きだから受け入れたものの、真昼ちゃんは了承してくれるのだろうか。

「うーん……」

「司。どうしたんだ？」

海東が心配してくれる。

「ちよつと考え方をね」

「何か悩んでるなら相談に乗るぞ」

「あー、個人的なことだから気にしなくていいよ  
さすがに親友でも二股掛けるための相談とかできるわけがない。  
というかそんなことしたら僕の人生終わっちゃうよ……。  
「そつか。何かあつたら言つてくれよー」

「わかった。その時はよろしく」

ほーい、と気の抜けた返事をしながら海東は離れていく。  
いつまでも悩んでいてはダメだな。

僕は気持ちを入れ替え、重い腰を上げた。

△▼△

夜空に告白した展望台にやつてきた。

奇しくも時間もほぼ同じくらいの時間だつた。

来た理由は、もちろん真昼ちゃんへの告白だ。

僕が気持ちを落ち着かせて待つていると、遅れて真昼ちゃんがやつてきた。

「先輩、お待たせしました」

夕陽の影響もあるのだろうが、真昼ちゃんの顔が少し赤い。

僕が告白することを期待してくれているのだろう。

僕はその期待を裏切ってしまうことに少し心が痛む。

「話、つて何ですか？」

気持ちを落ち着かせたはずなのに、またおかしくなつてしまつた。

「僕と、付き合つてくれませんか？」

言葉はすっと出てきた。

でも、気持ちは落ち着かない。

本当の問題はここからなのだから。

僕の言葉に、真昼ちゃんは瞳に少し涙を蓄え、大きくうなづく。  
「はい！」

とてもいい笑顔だつた。

でも、これからこの顔を歪ませることになることを想像すると、胸  
が痛くなるばかりだつた。

真昼ちゃんが僕に抱き着いてくる。

僕はそれを受け止めた。

でも、真昼ちゃんの背に手を回すことができなかつた。

「真昼ちゃん」

「どうしたんですか？」

「僕は、今、ここで君に謝らないといけない」

その言葉に、真昼ちゃんは僕から離れる。

「え？」

あつけにとられたような表情になる真昼ちゃん。

「僕は、自分でも気づかないくらい欲張りだつたらしい」

「？」

真昼ちゃんは何を言つているの？とでも言いたげに、僕を見据えて  
いる。

胸が痛い。

それでも、僕は心を鬼にして真実を告げる。

「ごめんなさい。僕は、真昼ちゃんに二股をかけようとしています」

2人の間の時が止まつた。

波の音や木々のざわめきすら聞こえなくなつてしまふほど、その言  
葉が響いた。

真昼ちゃんは驚きのあまり動けなくなつていて。

お互い、動けないでいるまま時間が過ぎていく。

本当に時間が過ぎたわけではないが、それだけ時間が重くのしか

かつてきた。

「真昼」

間延びした声にふと緊張が解ける。

「おねえ、ちゃん……？」

「そうです。お姉ちゃんでーす」

「どうしてお姉ちゃんが。まさか——」

「そう。そのまさかなの」

夜空は、驚く真昼ちゃんと、真剣な表情のまま固まっている僕の手を引いて、間を取り持つ。

「こうなつた理由は、私から説明させてもらうわ」

夜空が、僕たちに自身の想いと、こうなつた経緯を語りだした。  
「司くんが、自分は欲張りだ、って言つてたけど、私の方が欲張りなのがちも。妹が想いを寄せている人に惚れて、受け入れて。でも、真昼が大事だから、二人で共有する考えが出てきたの」

一息置いて、また語りだす。

「だから、司くんの想いを受け入れるときに、二人とも幸せにすることを条件にしたの。それで、こうして司くんがあなたに想いを告げたの」

「でも、それって先輩はお姉ちゃんを選んでたつてことだよね……」「そう聞こえてもしようがない。でもね、僕の告白は嘘なんかじやないから」

「……本当に？」

「本当さ」

「ほんとの本当に？」

「ああ」

真実を知り、改めて僕の想いを受け取った真昼ちゃんは、また僕に向かつて抱き着いてくる。

今度は僕もそれを抱きしめ返す。

そして、やつぱりつらかったのが、しゃくりあげる声が聞こえる。  
「妬けちゃうなー」

「そんなこと言うなよ」

夕陽がとても眩しかつた。

## 二人とのこれから

真昼への告白から数日。

僕たちは少しおかしな形の恋人関係になつていた。  
男を二人で共有する、という形。

はたから見れば女を侍らせる男に見えるのかもしれない。  
当たり前ではあるが、今の日本では受け入れられないため、少し関係性を変える必要があつた。

公には、真昼と交際しているということになった。  
まあ、公と言つても周りの人間に僕が『真昼は僕の彼女だ』と言つただけなんだけど。

こうしたのは男子部にお弁当を持つてきたときのことを考え、そうするのが妥当だと3人で考へたからだ。

お弁当を作つてくるような関係の女性がいたのに、他の女性と付き合いましたーつていうのは違和感があるし。

それに夜空と付き合つていると言つた場合、一部の男子にすぐ不評を買ひそうだから。

一部の人だけはこの関係を知らせている。

朝陽にはもちろんのこと、S4のメンバー、ゆめちゃんをはじめとした真昼の同級生達だ。

そして、未だに真昼に余裕があるときには、未だにお弁当を作つて持つてきてくれる。

もちろん、ある程度関係を公にした以上堂々と受け取り、二人で食べる。

ただ、最初の頃はどちらも少し恥ずかしさがあり、恐る恐るといった感じではあつたのだが。

恋人宣言をして最初の昼食の後、またクラスの仲間たちに問い合わせられたのは秘密だ。

日が暮れ、夜になるころ。

男子部と女子部の境界あたりで夜空と落ち合う。

始めは『今日の真昼はどうだつた?』と真昼の話題から始まる。

しばらくするとどちらともなく手をつなぎ、肩を寄せて空を見上げる。

それだけで十分満たされていた。

3人とも予定が合う日には、町へ出てショッピングに繰り出した  
り、またそこで女装されられるハメになつたこともある。

どちらかとオフがあつた日にはデートをしたり。

公言した手前、夜空とのデートの時には少し気を遣うことになつて  
しまつていることが少し申し訳ない。

夜空が四ツ星の中等部を卒業してフランスに留学するまで、この関  
係を続けた。

パパラッチに抜かれることもなく、穏やかに暮らしていた。

夜空を送り出すのは少し寂しかつたが、夜にはビデオ通話をして少  
しでも触れ合いを欠かすことはなかつた。

時々日本に戻ってきたときは3人で食事に行つたりしていたが、真  
昼が気を遣つてくれて二人きりの時間も作つてくれた。

今はまだこの関係を続けていられる。

でも、いつかそうできなくなる時が来るかもしれない。  
たとえ非難されることがあつても、僕は彼女たちを決して離さない  
だろう。

「司さん、何を考えているんですか？」

「僕たちのこれからのことね」

「あら、もしかして結婚のことかしら？」

「えっ?!お姉ちゃんと司さんで?!」

「違う違う。どうやつたらこれからも3人でいられるかなつて。ま

あ、夜空のいうこともあながち間違いではないんだけど」

「じゃあ、どこか海外に住みましょう。多重婚ができるようなところ  
とか」

「それいいじゃない!私は賛成!」

三人寄ればなんとやら、とはよく言つたものだ。

おかげで、僕はこれからも一人と楽しい時間を過ごせそうだ。



真昼の太陽と夜空の月。  
僕らの道はこの二つに照らされている。

## “特別編” 真昼の誕生日①

今日は真昼の誕生日。

夜空と一緒に真昼へのプレゼントを買いに来た。

「真昼は何を上げたら喜んでくれるかな」

「たぶん、司くんがプレゼントした物なら何でも喜ぶと思うわよ」

「さすがにそれは言い過ぎでは？」

「いえ、あながち間違いでもないはずよ。あの子、あなたにベタ惚れしてるから」

「そ、そうだつたのか。でも変なものは渡したくないなあ」

「それだつたら、アレとかどうかしら」

「ああ、アレか。それだつたら喜んでくれそうだ」

夜空が指したのはシユシユだ。

真昼に似合いそうな赤紫と青紫色のシユシユ。

「これで決まり、だな」

迷うことなく購入を決めた。

会計を済ませて店を出ると、夜空の姿が見当たらなかつた。

「あれ?どこに行っちゃつたんだろう」

迷子になるような人ではないはずなのだが。

それから少し歩き回つていると、夜空から電話がかかってきた。

「もしもし? いつたいどこに行つたんだ?」

『ごめん。ちょっとイイものをみつけちゃつてね』

『はあ……。それでいつたいどこなんですか?』

『えーっとねえ——』

電話を終え、夜空が待つ店へ向かつた。



どうやら、女性向けの服を主に扱っている店のようだ。なかに入ると、僕に気づいた夜空が手を振つていた。

おまけにものすごくいい笑顔も合わせて。

……嫌な予感しかしない。

「司ぐーん、早く早くー」

……ええい！なるがままよ！

腹をくくつて夜空の方へ歩き出した。

△▼△

買い物を終え、香澄家での誕生日パーティーに御呼ばれすることになつた。

残念ながらお義父さんとお義母さんは仕事の都合で来られないようだが、ゆめちゃんをはじめとした友達が集まつてパーティーを開いてくれたみたいだ。

「そろそろ真昼が帰つてくるみたいよ。みんなクラッカーの準備は大丈夫かしら」

その声とともに、玄関に近いリビングのドアの前にみんなで陣取つた。

少しの間待つた後、玄関のドアが開く音が聞こえた。

そしてリビングのドアが開いたと同時にクラッカーを鳴らした。

「「誕生日おめでとう、真昼（ちゃん）!!!」」

真昼は、思いもよらない歓迎に思わずポカンとした表情を浮かべていたが、理解が追いつくと途端に笑顔になつた。

「みんな！ありがとう！」

それから、誕生日のケーキを出してろうそくの火を消したり、少し豪勢なディナーを楽しんだ。

パーティーも終わりに近づいたころ、みんなでプレゼントを渡した。

ただ、この時僕と夜空だけプレゼントを渡さなかつた。

他のみんなはプレゼントを渡した後、空気を読んで先に帰つてくれた。

恋人同士の時間を作つてくれたのだ。

「それじゃあ、私と司君のプレゼントの用意をするから少し待つてね

「なに？用意が必要なプレゼントなの？」

「そうなの、だから少し待つていてちょうどいい」

それから、僕は別室に移り着替えを始めた。

△▼△

20分後。

「おまたせ～」

「本当に待つたよ」

「ごめんごめん。さ、プレゼントの用意ができたわ。司くん入つて～」

その合図で、僕は扉を開けてリビングへ入った。

「……！」

真昼は声も出せないくらいに驚いている。

「どう？驚いたでしょ。私のプレゼントは、このクールな司ちゃんで  
～す！」

驚くのも無理はない。

だつて僕がプレゼントで、なおかつ女装しているのだ。

「えーっと……どう、かな。キレイに見えるかな？」

「?!っ!!」

少しポーズをとると、真昼が少し表情を赤らめ興奮している様子が見て取れた。

「そこまで喜ばれるとなんかこっちが恥ずかしくなつてくるな……」

その後、收拾がつかなくなりそうになつたため女装をやめた。

夜空さんは少し惜しそうにしていたが。

「司先輩。あんなの、刺激が強すぎます。それに、似合いすぎです」

「あはは、まさか自分もあそこまで似合うとはおもつてなかつたなあ」「もう……。あ、先輩からまだプレゼントをもらつてないです！プレゼントを要求します！」

「そういうえばそうだつたな。はい、これが僕からのプレゼント」

用意していたプレゼントを渡した。

受け取るや否やすぐに開けてくれた。

「これ、シユシユ……」

「そ。真昼に似合うと思つて」

「うれしい……」

気づけば、夜空はどこかにいなくなつていた。  
氣を遣つてくれたのだろう。

「司先輩。 私からお礼をさせてください」

「お礼だなんて、真昼が喜んでくれたのが一番だよ」

「それでもしたいんです。だから、少し目をつぶついてくれませんか」

「わかった。 目をつむるよ」

言われたとおりに目をつむることにした。

なんとなく察してはいるけど、言わぬが華よ。

それから唇と唇が触れ合つた。

途中で目を開けたけど、そんなことは気にしない。

30秒ほどして、二人は離れた。

「司先輩。 大好きです」

「僕もだ、って言いたいけど、夜空がすねちゃう」

「今はいませんよ」

「確かに。 それじゃあ言い直して。 真昼、大好きだ。 それと、誕生日おめでとう」

「はい！ ありがとうございます！」

## “特別篇” 真昼の誕生日②

今日は真昼の誕生日だ。

真昼と付き合いたてだった去年は、ゆめちゃん達がパーティーを主催した。

今年もそうだろうと思い、気軽な気持ちで香澄家へ向かっていた僕は到着早々白目をむくことになった。

何故かつて？

簡単な話さ。

去年が例外だつたんだ。

つまり、何が言いたいかというと。

お義父さんとお義母両親さんがいるんだ。

二人と付き合つてから、未だに顔を合わせる機会を作つてこなかつた自分を殴りたい。

他にも言いたいことはあるけど、とりあえず考えちゃだめだ。

これ以上考えると後悔しか浮かばないから。

でもまあ仕方ない。

こうなつた以上、まずは挨拶だ。

「初めまして。僕は飯島司です。娘さんとお付き合いさせていただいています」

緊張もあつて、なんだか変なあいさつになつた気がするんだけど。恥ずかしい！

試行を切り替え、下げていた頭を少し上げて、両親の顔を窺う。

お義父さんは目を閉じてじつとしていて、なんだか威圧感を感じる

じる

お義母さんは驚いたように目を見開き、口を手で覆つている。

……お義母さんめちゃくちゃ綺麗じやないか？

本当にこの親にしてこの子ありつて感じだな。

「あらあら、そだつたんですね。今真昼を呼んできますから掛けて待つていてください」

そう言つて、お義母さんにソファへと促される。

それもお義父さんの目の前のやつに。

お義母さんの表情を見るあたり、意識していたわけではないだろうけど、すごく心臓に悪い。

部屋に一人きりになることに加え、お義父さんが何も言わずにじつとしていることが、余計にそう感じさせた。

意を決して、僕から話を振ろうとしたその時、お義父さんがゆっくりと口を開いた。

「司くん、といつたかね？」

「はい！」

緊張で声が上擦る。

「夜空と真昼の二人と付き合つてると聞いたが、本当なのか？」

「……はい。そうです」

少しづかしていたところを突っ込まれる。

恐らく聞いたんだろう。

僕の返しに、お義父さんはまた黙り込む。

また僕は、何を言われるのかわからないという緊張から心臓が高鳴る。

……でも、この思いは本物だ。

だから……、それを認めてもらわなきやいけないんだ。

「僕は、二人の女性を好きになつてしましました。それも、二人の大切な娘さんです」

お義父さんは僕をじつと見据える。

「世間的にもあまり良くないことだというのはしつかりと理解しています。ましてや僕や娘さんはアイドルだということもです。」

しつかりと、熱意を込めて想いを吐き出す。

「それでも、僕は二人のことが好きです。そして、幸運にも二人からも愛されています。だから、僕は二人の想いに応えるためにも、二人を愛そうと思っています。幸せにしたいと、いや、絶対に幸せにします。たとえどんなことがあつても僕が二人を守ります」

そして、頭を下げ、最後に自分の全身全霊を持つて誠意を示す。

「娘さん一人を、僕にください！」

「……」

お義父さんは黙つたまま、少しうつむいている。  
そして、再び静寂が訪れる。

体感には5分にも感じられた。

実際は5秒にも満たなかつたかもしれない。  
でも、それほど重厚な空気で満ちていた。

「司くん」

耐えきれず、僕は息をのむ。

「二人をよろしく頼むよ」

「はいっ！」

僕が返事をすると、その時を待つていたかのように夜空と真昼が僕に寄つてくる。

「司（さん）～！」

「うおっ、いつの間に」

そして飛び込むようにして抱きしめられる。

二人とも満面の笑みだ。

それに対してもお義父さんは、苦笑しながら言う。

「一人がこうなつている以上、もともと君に二人を任せたつもりではあつたんだけど、君を試したくなつたんだ。緊張させてすまなかつたね」

「いえ、ご両親にとつて大切な娘さんなんです。心配されるのは当然だと思います」

とまあ、ドツキリのような試練というひと騒動があつたものの、結果的には香澄家のご両親から気に入られたのだつた。

△▼△

そのあと、真昼の誕生日パーティーとなつたのだが、お義父さんが僕を大層気に入ってくれたらしく「息子が一人増えたようなものだ」とか言つていた。

お義父さんは僕と朝陽を連れて男同士の話をしようとしていたのだが、今日の主役である真昼は意地でも僕を離すまいと抵抗を見せ、お義父さんは泣く泣く諦めたのだつた。

「お父さんつたら、今日は私の誕生日だつていうのにどうして司さんとの時間を奪うのよ」

「その、『めんよ』」

お義父さんに悪気はなかつたのだろうが、さすがにタイミングが悪いと思う。

朝陽もちよつと苦笑してるし。

でも、どこか未来の自分を見たような気がしてならない。

そこで僕はそんな真昼の機嫌を取るために、少し提案をする。

「真昼、ちよつと外で風でも浴びようか。もちろん一人で」

「……！ うんっ！」

ちよつと不機嫌だつた表情も、ぱあつと笑顔に変わつた。

お義父さんは微妙な表情をしているけど、僕が真昼の機嫌を取つたことには感心せざるを得ない、とでも言いたげな雰囲気を醸し出していた。

ベランダで風を浴びる。

秋の涼しい風が顔に当たる。

でも、マンションの高層だと時折少し寒く感じてしまう。

「ちよつと寒いですね」

「そうだね」

そう言つて僕は真昼ちゃんの手を掴む。

「それだけ、ですか？」

上目遣いで更なる要求をしてくる。

やつぱり、恋人の上目遣いには抗いがたいものがある。

僕はそつと後ろから抱きしめる。

「あつたかい……」

二人で暖を取りながら、沈みゆく日を眺める。

「今日は司さんに苦労を掛けちゃつたなあ」

「氣にしてないよ。それに、いざれご両親にはあいさつに行かなきやいけなかつたし」

「でも、緊張したでしょ」

「そりやあそんだけど、逆に相手の両親に会つて緊張せずにいられる

か？」

そこで、ふと顔を上げる感じで真昼がこちらを見て尋ねる。

「そういえば、私たちつてまだ司さんのご両親に会つたことないと思うんだけど」

「あ、いつけね。完全に紹介するの忘れてた」

「司さんのご両親がかわいそうだなあ」

「うぐつ。今度紹介するから追い打ちはやめてくれ……」

完全に失念していたとはいえ、学校では寮生活が待っているから頭からすっぽ抜けるのも是非もないと思うの。

なんて思ついたら、なぜか真昼につねられた。

まさか心を読まれた？

「司さんがわかりやすいだけだよ」

「うーん。これでも演技には自信があるんだけどなあ」

日が沈んでしばらくのマジックアワーと呼ばれる明るい時間。

その時に思い出した。

「そういえば、まだ直接言つてなかつたね。誕生日おめでとう、真昼」

「ありがとう、司さん」

それから夜のどばりが降りきると、耐えきれなくなつた夜空が突撃してきてひと悶着あつたけど、真昼の喜んでくれる誕生日にできたんじゃないかと思う。

さて、親父たちにはなんて説明しようかな。

## “特別篇” 夜空の誕生日①

連休も明け、本格的に夏の到来を感じるころ。

僕が毎朝欠かさずやっているランニングの最中だつた。少し慌ただしそうにしている真昼を見つけたのが事の発端だつた。

「え？ 今日が夜空の誕生日……？」

休みボケを盛大にかましてしまつたのだつた。

△▼△

「で、司先輩はプレゼントとかどうするの？ 今から買いに行つたとしても、パーティーに間に合うのかな？」

「そう、だよな……」

これは腹をくくるしかないか。

「いや、いい考えがある」

自分で言つたはいいものの、これつてフラグだよな。

「何をするの？」

「なんでもいうことを聞くというのはアリかな？」

△▼△

今日は午前中から集まつてパーティーをするらしい。

というか、そうじやなきや真昼も慌ただしくしていられないはずだ。

この時間になつたのはS4の他のメンバーの都合らしい。

ちなみに、プレゼントの件は真昼的にはアリとのこと。

ちよつと羨ましいな、とか言つてたのでお礼も兼ねて今度何かいうことを聞いてあげる、と言つたらすぐ目を輝かせていた。

兄弟姉妹は似るものがあるし、恐らく夜空へのプレゼントとしては間違いないんだろうな、と確信した。

「うーむ。やっぱり緊張してしまうな」

「どうして？ うちに来るだけなのに」

「いや、だつてもしお義父さんとかお義母さんに出くわしたらどんなこと言われるんだろうなって」

「大丈夫よ。お父さんもお母さんも心が広いから。それに今日はもう家を出たみたいなの」

「そ、そうか。でも、夜空の誕生日なのに残念だろうな」

僕が緊張から解放されたところで、香澄家の玄関にたどり着いた。チャイムを押そうとすると突然玄関のドアが開いた。

「遅いぞ、二人とも。夜空が待ちわびてるぞー」

「ゆず先輩。急にドアを開けられたらびっくりしますよ」

犯人は二階堂ゆづだつた。

なんで玄関にきたことがわかつたんだろう。

「とにかく、夜空が大切にしている二人が行かなくてどうするの」ゆづが僕たちの腕をとり、半ば強引に部屋へと連れられた。

部屋にはS 4が全員集合していた。

ゆづの言わんとしていることはごもつともだつた。

そして、夜空は僕たちを見るなり駆け寄ってきて抱きしめてくれた。

「真昼！ 司！ 来てくれてありがとう！」

「お姉ちゃんの誕生日を祝うのは当然だよ」

「恋人の誕生日パーティーに行かない人がいるもんか」

忘れていた人が何を言うか。

夜空が抱きしめるのをやめ、席に座る様に促そうとした時、真昼が爆弾を投下した。

まあ、当然のことではあるのだが。

「おねえちゃん。実はね、司先輩つて今日がお姉ちゃんの誕生日だつてこと忘れちやつてたみたい」

「ちよ、それを言つちやおしまいじyan」

「えー、私傷ついたなー。彼氏に誕生日も覚えてもらえないなんてー」

案の定、夜空からからかい気味な非難を浴び、周りの女性陣からも「ないわー」とでも言うような表情で見つめられた。

「えっと。まず、すいませんでした。だから、お詫びじやないけど、今日のプレゼントは僕つてことで勘弁してもらえないでしようか」頭を下げながら夜空に向かつて言う。

「それって、つまり——」

「今日の僕は、夜空のしもべです。何なりとお申し付けください」

夜空の表情を窺うと、やはりというか目を輝かせていました。

何をされるかは、だいたいわかつた。

△▼△

「司の女装が似合うとは聞いていたのだが」

「まさかここまで似合うとは思わなかつたわ」

「どうか、女の子って言われても全く違和感がないぞー」

はい。

司ちゃんの爆誕です。

こうなるのはわかつてた。

「なあ、司。私から女優としてのレッスンを受けないか?」

「いや、遠慮しとく」

「即決?!それはひどいぞ!」

ツバサが妙に食いついてくる。

なぜだ……。

「あらあら、司つたら人気者じやない。妬けちゃうわ」

「好きで人気者になつた訳じやないんだけど……」

妬くとか言つているが、夜空は終始笑顔だつた。

僕がかわいらしくなつてゐるところを共有できたことと、「司は私が育てたのよ」と言わんばかりの誇らしさがあるのだろう。注目されて氣にはなるが、夜空の笑顔が見られたんだ、良しとしよう。

そして、お昼が過ぎ、ティータイムが終わつたころ、ツバサたちが帰ることになつた。

「じゃあゆずたちは帰るぞー。あ、司つちの女装また見せてねー」

「それじやあ、あとは3人でごゆつくりー」

「しなくていいよ!というかしないで!」

ツバサは僕が女装した作品を確認するらしい。

頼むからやめてほしい。

△▼△

3人が帰り、僕、夜空、真昼だけになつた。

しかし、真昼も「今日はお姉ちゃんの誕生日だから」といつて学校へともどつていった。

そして、女装の時に僕の肌荒れに気づいていた夜空が、食生活に難があるのではと言、一緒に料理することになった。

「なんだか気が早いかもしれないけれど、こうしてると夫婦みたいだと思わないかしら？」

「言われてみるとそう感じてくるなあ」

料理の上手な妻が、夫を気遣つて健康的な料理を作つてくれる。

そして、夫がそれを手伝う。

「私たちつて普通の恋人じゃないから、こんなことは少ないかもしないわね」

「そうだね。でも、ここに真昼がいても楽しいんだろうね」

「そうね。でも、今日くらいは真昼のことを忘れてもいいんじゃないかしら」

「夜空にしてはめずらしいことを言うね」

「だって、あなたのことが好きだからに決まつてるじゃない。時には独り占めだつてしたくなるわよ」

「そういうものか」

「そういうものよ」

つかの間の夫婦気分のあと、食事を共にし、日も暮れて夜になつた。

夜空が僕の手を引いて僕をベランダへと連れていく。

「ねえ、司は夜の空つて好き？」

「好きだよ。綺麗で、美しくて。そしてなぜか飲み込まれてしまいそうな怪しさもあつて」

僕は夜空に後ろから抱き着く。

夜空もそれを受け入れてくれる。

「僕は、夜空の美しさに呑まれてしまつたみたいだ」

「あら、私は月みたいなあなたに照らされてしまつたみたい」

星と月の輝く夜。

まだまだ夜は更けていく。

2人の愛もまだまだこれから更けていくはずだ。

## “特別篇” 夜空の誕生日②

今日は夜空の誕生日。

夜空の要望でデートをしている……のだが。

「なんで今日は女装なんですか？」

「いいじゃない。今までのデートと違つて新鮮でしょ?」

「そりやあそうだけどさ」

「それじやあ問題ないわね。さ、次に行くわよ」

そう言つて笑う夜空の顔を見ると、否定する気もなくなつてきた。

ただ、周りの視線がちょっと暖かい目なのが気になつてしまふ。

なぜかつて?

よく考えてみて欲しい。

デートである以上、僕たちはそれなりにイチャイチャしている。普通ならばリア充爆発しろ的な視線が見受けられるはずだ。

ただし、今回は僕が女装をしているのだ。

ここまで言えばもうお分かりだろう。

僕たちは周りから見ると百合ツップルに見えるのだ。時折飛んでくる暖かい視線の原因がこれだ。

さすがに役者をしている身分でも、この視線はちょっときつい。

「あら? あそこにもよきげなお店が見えるわね。行つてみましょう」

「あの少し路地に入つたところ?」

「そう。ほら、少し見えるショウウインンドウのワンピースがいいと思わない?」

「確かに、夜空の好みだね。行つてみよう」

夜空に手を引かれ、路地へと進んでいく。



「あれ、おかしいぞ。僕は夜空に似合う服を探していたのに、いつの間にか着せ替え人形になつていたなんて」

「だつて司に似合いそうなものがたくさんあつたんだもの」

「それでも30分近く更衣室に入り浸りなのはやりすぎだろ……」

「てへ☆」

かわいい。

じやなくて、さすがにやりすぎだと思う。  
なぜか夜空は気持ちツヤツヤしてゐるし。

「でも、結局買わなかつたんだね」

「だつて今日はショッピングが目的じゃないでしよう？私はあくまで  
も司とのデートを楽しみたいの」

「なるほど。じゃあキッチリとエスコートしないとね」

僕は夜空の手を引いて路地を歩く。

さつきのお店に長居しそうたのか、来たときよりもかなり暗くなつ  
ている。

嫌な予感を感じながら歩いていると、奇しくも的中してしまつたら  
しい。

少しガラの悪そうな男たちがやつてくる。

「お姉ちゃんたち、オレたちといいことしない？」

俗にいうDQN<sup>どきゅん</sup>つてやつか。

面倒を避けようと僕たちは黙つて通り抜けようとする。

「おいおい、無視なんてひどいぜ」

そう言つて男たちは道をふさいできた。

しつこいなあ。

少しイライラして頭に血が上る感覺がわかる。

男の一人が夜空の肩に手を伸ばして触れようとしていたのが目に  
入る。

すると、ほぼ無意識にその腕をつかみ、男を投げた。

思つていたよりも僕は独占欲が強いらしい。

投げられた男はコンクリートの地面に背中を強く打ち、氣絶。

これで3対1。

「ツ！・てめえ！」

女装をしている僕が女だと油断していたんだろう。

血相を変えて僕に向かつて殴りかかつてくる。

撮影のアクションとは違うが、真昼から護身術として叩き込まれた

空手を思い出し、拳をいなす。

男たちが隙を見せたところで一人を掴み、残りの二人へ向かつて投げる。

もちろん男たちはしばらく動けないようだ。

「行くぞ、夜空！」

「う、うん」

夜空の手を取つて走り去る。

△▼△

「はあ、うまく逃げれた……」

「ひやひやしたあ～」

上手く逃げおおせた僕たちは、告白をした海辺の展望台にやつてきた。

すでに日は暮れ、空には星が輝いている。

「司、今度からあんな無茶はしないでよね！」

「ごめん。でも、夜空が他の男に触れられるっていうことが耐えられなくてつい手が出ちゃつたんだ」

「でも司がケガなんてしたら、私泣くわよ」

「それは困るな。せっかくの綺麗な顔が台無しになっちゃう」

ベンチに腰掛け、話しながら空を見上げる。

「じゃあ、泣かせないよう努めてくれる？」

「もちろん。でもちよつとくらい無理するかも」

「ええ～、と夜空は少し不満そうだけども、僕だって男なんだから少しきらい見栄を張りたい。

その結果悲しませてしまつたのなら、笑顔になる様に全力を注ごう。

「つて、女装した状態で言つてもカツコつかないか」

「なになに？」

「いや、独り言だよ」

その後しばらく二人並んで星を眺めていたが、どちらともなく聞こ

えてきた腹の虫に笑い合い、二人手を取つて帰路につく。

その2人を見守る様に、満月が煌々と照らしていた。

## セイラ／

### ”特別編“ セイラの誕生日

「いらっしゃいませ！」

「よつ。今日は店の手伝いか？」

「あ、司だ。実は以前よりも人気になつて人手が欲しいつてことになつちやつて」

見渡すと、以前よりも明らかに人が増えたことがうかがえる。  
理由はなんとなく察せられるが。

「あ、そういうえばノエルちゃんは？いつもはノエルちゃんが店番してたけど」

「むーっ……。ノエルはちょっと買い出しにね」

「ああ、ごめんごめん。ここに来た理由はセイラに用があつてね」

「わ、私に！」

「うん。ただ、人が多いからもう少し人が落ち着いてからでいいよ」

「うん、わかつた」

それからコーヒーを片手にセイラを待つた。



「お待たせ。用事つて何？」

「今日はセイラの誕生日だろう？だからどこか一緒にデートでも、つて思つてね。わざわざ休みまで取つてたんだぞー」

「デ、デートか……。つて急にそんなこと言わないでよ！女の子にはいろいろと準備がいるんだから」

「そういう割には準備できてるよう見えるけどね」

「そ、それは……」

「まあ、ともかく出発だ」

一応の補足ではあるが、僕とセイラは付き合つている。

といつてもほんの少し前からだけど。

それはともかく、僕はセイラを連れて店を出た。

「で、どこに行くの？」

「音が聞こえる場所、かな？」

「何それ。ちゃんと私を満足させられる？」

「たぶんね」



店を出た時間が遅かったのもあり、最初の目的地に着く時点で空は夕暮れへと傾き始めていた。

場所は海沿いの展望台。

高台というのもあり風が少し強いが、その風の音と波の音が聞こえてくる。

都合がよく、僕たちのほかには人はいなかつた。

「風と波の音……。壮大な自然がひしひしと感じられるね」

「そうだね。でも音だけじゃなく景色も楽しんでよ」

「うん。もちろん」

しばらく僕たちは展望台に設置されているベンチに腰掛け、自然を感じていた。

「綺麗だね」

「ああ」



僕たちは次の場所へと向かっていた。

場所はさつきとはまるで変わり、ススキがあたり一面に広がつていた。

「さつきとはまた違った風が聞こえる」

「うん。風でススキが揺れる優しい音」

夕陽を反射し、ススキが黄金に輝いて見える。

まるでライブの時に振られるサイリウムの光みたいに。

「ステージにあがつてる時みたいだな」

「うん」

そして徐々に日が落ち、月が昇ってきた。

すると、そこで小さな演奏会が開かれた。

「鈴虫の声が聞こえてきたね」

「コオロギもいるみたい」

それから、また虫たちの演奏に耳を傾けた。

「セイラ」

「なに？」

「誕生日おめでとう」

「うん、ありがとう」

次第に自然と二人の距離は縮まっていき、一つの影は一つになつた。

## みくる／

### 再会

ある日、僕は一時期まで同級生だった神崎美月のステージにゲストで出てほしいと連絡があった。

卒業と同時に芸能界から姿を消していた神崎から連絡が着たことに驚きと困惑がありつつも、その申し出を受けることにした。

承諾の連絡をしてしばらくした後、神崎のマネージャーである月影さんから詳細な内容の連絡が来た。

内容を簡潔にまとめるならば、今回のイベントは神崎がアイドル活動を再開するとともに新たにユニットを組むということのお披露目なのだという。

その前座のステージに僕が選ばれたのだそうだ。

（……なんで僕なんだ？ 知名度的には僕よりももつと適役がいるんじゃないのか？）

考えてみても神崎の意図などわかるはずもなく、ただただ当日に向けてレッスンを重ねていくのだった。



イベント当日となつた。

今回のイベントは神崎の復帰ステージとなるためか、非常に多くの人が期待しているようだ。

物販の待機列に非常に多くの人が並んでいたことからも窺える。（やはり神崎は人気があるんだな。でも、今回はユニットとして相方を連れて復帰という噂らしいけど……）

あの神崎美月がユニットのパートナーとして選ぶくらいだ。

よほどの実力を持ち合わせていいのだろう。

（パートナーはいつたい誰なんだろなあ……。いちごちゃん達じやないみたいだし、全く知らないアイドルとかだつたりするのだろうか）

いろいろと考えてみようと思ったが、リハーサルの時間になり一時

中断することとなつた。



リハーサルは無事に終わつて自分のステージもすでに終わつたが、いまだに神崎のユニットの詳細がわからない。

恐らく月影さんが上手く情報管理をしているのだろうか。リハーサルでも姿を見せなかつたし、徹底してやつていたのだろう。

(しかたない、僕も一人の観客として楽しませてもらおうかな)

それから、関係者席の空いていた席に座つて神崎達のステージを見ることにした。

「それではみなさん、お待ちかねの神崎美月さんのステージです!!そして今回はなんと! ユニットとして新たなパートナーを連れてやってきました! それではお二方、お願ひします!」

M Cによる前口上も終わり、いよいよステージが始まろうとしている。

(さあ、いつたいどんな人なんだろうか)

アイカツシステムが起動し、舞台の景色が変わつた。

そしてそれに続けて、二人が現れた。

一方は言うまでもなく神崎だ。

もう一方は今まで見たことのないアイドルだ。

(でも、どこかで見たような……。)

だが、考える間もなく2人のステージが始まつた。

(すごいな……。神崎についていつている。でもこんなアイドル知らないぞ……。まさか新人なのか……?)

僕は2人のステージに圧倒されていた。

特に、新人であろう神崎のパートナーにだ。

もしも霧矢がいたら、いつものあのセリフが聞こえてきそうだ。

「ありがとー!!」

気づけばあつという間にステージは終了していたようだ。

音楽は鳴りやみ、観客から歓声が聞こえる。

「今日はお披露目ステージに足を運んでください、ありがとうございます」

ます。それでは、ここにいる全員が気になつてゐるわたしのパートナーとユニット名を発表します！」

その声に会場が再び歓声に見舞われる。

僕を含め、皆が期待している。

「それでは、まず私のパートナーから」

「はいはーい。私の名前は夏樹みくる。好きなブランドはViViD

Kiss。みんな、これからよろしくー！」

(夏樹、みくる……?!まさか、みくるなのか?!)

真実を確かめるべく、急いで神崎の楽屋まで向かった。

小学校の頃の記憶を思い出しながら。



神崎達の楽屋についたころ、二人も楽屋に戻つてきている最中だった。

向こうもこちらに気づいたらしく、みくるの方は僕に駆け寄つてきた。

「司ー!!」

そして思いつきりハグされた。

「うおつと。急に飛び込まないでよ。危ないだろ」

「でも、司なら受け止めてくれるでしょ」

「そりや、まあね。やっぱり僕の知つてるみくるだ」

「うん、そうだよ。久しぶり、司」

「ああ、久しぶり。小学校のころ以来だね」

みくるとは小学校卒業まで長い縁だ。

簡単に言つてしまえば幼なじみというもののなのだろう。

「司、ステージお疲れ様」

「こちらこそ。お疲れ様、神崎」

遅れて神崎もこちらへやつてきた。

「そうだ。神崎に訊かないといけないことがあつたんだ」

「何かしら?」

「ゲストステージのことだよ。なんで僕だつたんだ?」

「ああ、そのことだつたのね。実はみくるの要望だつたのよ」

「そうでーす。わたしが司のステージを見たいって言いましたー」

「まあ、もともと誰かに依頼するつもりだったのと、私の知っている人物だ、っていう理由もあつたんだけどね」

「なるほど。だいたいわかつた」

それから少しの雑談をしてそろそろお暇しようとしたところ、みくるからお茶に誘われた。

なんでも、いいお茶が手に入つたとかなんとか。

神崎も僕もこの後の予定はなかつたため、3人でみくるの家である『なつきグリーニングガーデン』に向かうこととなつた。

## 関係

ライブ後、みくるの家である『なつきグリーニングガーデン』へ向かつた。

「ここに来るのも久しぶりだなあ……」

「中学校にあがる前に引っ越しちゃつたもんねー」

「そういうえば二人は小学校のころまでお隣さんだつたそうね」

「そなんだよ。だから司がアイドルになつたときは驚いたなー」

「僕も、まさかみくるがアイドルになるなんてね」

「懐かしい話をしてると、気づけば目的地へと到着していた。

「懐かしいな。前とほとんど変わつてないだろう」

「そうなの。お父さんもお母さんもこのままがちょうどいいって言ってたし」

「そういうえば、私はみくるの家に来るのが初めてになるのよね?」

「あ、言われてみれば今まで美月を呼んだことなかつたかも。てっきり一度来たことがあるものだと思つてた」

「そだつたんだ。僕も神崎はみくるの家に一度くらいは行つたことがあると思つてたよ」

「まあ、それはともかくとして。ここつていいところね」

「うん。一時期通つていた僕もそう思うよ」

僕は花について詳しくはないが、とても多くの種類の花があることがわかる。

そして、丁寧に手入れされているであろう庭園も見える。

「用意してくるから庭で待つててー」

と、みくるがお茶の用意を行つてくれた。

その間、僕たちは庭のテーブルに行きがけに買つてきたお茶請けのお菓子を並べることにした。

「それにしても、神崎とみくるがユニットを組むなんてなー。決め手は一体何だつたんだ?」

「そうね……。彼女に光るもののが見えたっていう曖昧な理由かしらね」

「光るもの、ねえ……」

「誰かさんが下地を作つてくれたおかげかしら」

「誰かつて……。まさか僕かい？」

「それ以外に誰が考えられるのかしら？」

心当たりがあるにはある。

一応、小学生ながらアイドルのための練習は欠かさずにやっていたから。

でも、そこまでした覚えはある。

「あー。確かに教えてました。いろいろと」

そこでお茶を持ってきたみくるが戻つてくる。

「お待たせー。何話してたの？」

「みくるが司にいろいろとアイドルの基礎を教わつてたつて話よ」「そして、それを僕が忘れちゃつてた。つて話」

「えー。ひとついい、忘れるなんて」

口調は不機嫌ではあるものの、口元が緩んでいた。

それほど気にしてはいないうだ。

「でもそれはそれとして、あの時教わつたこと、とつても感謝してるんだ」

「僕の練習にただ付き合わせてたようなものだつたのに？」

「それでもだよ。おかげでこうやつてアイドル活動ができるんだけし」

「そうそう。それにね、みくるはなかなか高いレベルにまで仕上がりてるのよ」

「確かに。ステージもかなり完成度が高かつた」

「だからね。ありがとう、司」

そう言つてみくるは頭を下げる。

だが、僕にも感謝しなければいけないことがある。

「いや、こちらこそ礼を言わないと」

「ん? どうして?」

「小学生のころ、練習に何度も付き合つてくれただろう?あの時のお礼をまだ言つてなかつたから」

「じゃあ、お互いまつてことだね」

「ああ、そうだね」



お茶もお菓子もそこそこに、みくるが少し不機嫌そうに唐突な質問をぶつけてきた。

「ねえ、美月と司つてどういう関係なの？」

「うーん。同級生かな（かしら）」

「それにしてはなんだか距離が近いような気がするんだけど」

そう言つて僕たちをいぶかしげな眼で見つめてきた。

特に言うほどの関係でもないと思つてている僕は、少なくとも僕はただの同級生だと思つていていた。

だが、神崎は急に爆弾を投下してきた。

「でもそうねえ、私は好きでもない男性を下の名前で呼んだりなんてしないわ」

「なつ……！」

「ええっ!?」

その場に戦慄が走った。

神崎だけが笑みを絶やさぬまま、僕のことを見つめている。

「ねえ美月……。それつて本気？」

加えて、みくるから神崎に対して怪しげなオーラが向けられているようだ。

笑つているようではあるが、なんだか目が笑つていない。

(ユニットメンバー同士のけんかですかー?!誰か助けてー!)

などと助けなぞが来るはずもなく膠着状態が続くかと思われたが、神崎が口を開くと状況は一変した。

「なーんてね。冗談よ冗談。みくると司の仲がいいからちよつと妬いちゃつただけ」

「なーんだ。心配して損しちゃつた……」

「ふふふ。下の名前で呼ぶのも、同学年の人気アイドル同士だつたら、話をする機会が多くて自然とね。司は呼んでくれないけど」

「あははは……」

冗談だと知つて安堵したからか、みくるが言つていたことがいまい  
ちわからなかつたが、どうだつてかまわないと思つてしまつた。

あの不穏な雰囲気は二度とごめんだ。

心臓に悪すぎる。

「みくるつて、もしかして司のことが好き、なの？」

「えーっと、うん。私は司のことが好き。だから、今日司を呼んでつて  
言つたんだよ」

そして当の二人は僕が上の空の間、ひそひそと何か会話しているよ  
うだ。

当然この二人の話し声が聞こえるわけもない。

そして、僕が正気に戻つたころにはお茶会はお開きとなるのであつ  
た。

## 責務

WMのお披露目とお茶会の後、僕はみくるのレッスンに付き合つたり家の手伝いをしたりと、かつての小学生のころのように会うようになつた。

そして今日は僕がオフだつたこともあり、みくるの家の手伝いをすることになった。

「みくる、これはここに置いておいていい？」

「うん。お願ひ。あ、ついでにこれもいい？」

「オッケー」

かつての小学生のころのようなやり取りに、未だ少しのなつかしさを覚えつつも心の中にとどめ、作業をこなしていく。

（しかし、前に比べてお客様も増えたなあ。これもみくるがアイカツを始めたことがきっかけなのだろうか）

みくる曰く、常連のお客さんを伝手にみくるが店を手伝つてているという情報が少し広まつて、近場のファンの間では話題となつていてるらしい。

もちろんそれだけではなく、お店の評判も良いためである。

「さて、もうひと踏ん張りだ」



「お疲れ、司。はい麦茶」

「ああ、サンキュー」

もらつて麦茶を飲みほしながら、みくるのソロステージが近いことを思い出した。

「そうだ、みくる。ソロステージの準備は大丈夫？」

「ああ……えと。ダンスとか歌は司にレッスンで見てもらつてるからなんとかなりそうなんだけど、まだドレスがね……」

そう言うと、みくるはちよつとだけ不安そうな表情になつてしまつた。

「あれつ？この前V·i·V·i·d K·i·s·sのデザイナーさんと会つたんじゃなかつたつけ？」

「そうなんだけど、実はちょっと面倒なことになっちゃって」

「まさか、断られちゃった？」

「断られたわけじゃないんだけど……その、ちょっとした課題を出されちゃって」

「課題か……。ちなみに、どんな？」

「ミラクルフラワーを金色に咲かせるっていう課題。今のところなんとかなるとは思うんだけど」

「ミラクルフラワーか。確かに、あれって金色にするには毎日決まった時間に水をあげないといけない花だつたっけ？」

「そうそう。それで、デザイナーのKAYOKOさんの新商品の発表の時に合わせて持ってきてくれないかって言われたから、もう育てるんだ」

そう言って、みくるはミラクルフラワーの植えてある鉢を見せた。

「これがミラクルフラワーなのか」

「そうそう。わたしマジで頑張るからね！」

△▼△

それから一週間、みくるはアイドルとしての仕事とガーデニングショップの仕事、それにレッスンも加え忙しい日々を送りながらも、日々決められた時間に水をあげていた。

神崎との仕事のときも、間を縫つて水をあげに家に戻っていたそうだ。

今日もレッスンの休憩の間に水をあげに一度戻っていた。

「ただいま」

噂をすれば戻ってきたようだ。

「おかえり。ミラクルフラワーの様子はどう？」

「順調、順調。一度だけひやひやしたことはあるけどね」

「そりやよかつた。その一回つて神崎との仕事の時だろう？」

「そうそう。なんでわかったの？」

「神崎の1日の仕事量つてけつこう多いから、時間をとるのに苦労しちゃうなって。僕も一度苦労したし」

「あははは……」

神崎の仕事量ははつきり言つてかなり多い部類に入る。

圧倒的な人気を持つている以上、仕事が舞い込むのは必然ではあるのだろうが、それをほとんど蹴ることなく可能な限りの仕事を受け続けているのだ。

最近デビューし始めたみくるにとつてはかなりの忙しさだろう。

それでも弱音を吐かないあたり、神崎が認めただけのことはある。

「まあそれはともかく、レッスン再開しようか」

「みくるのミラクル見せちゃおつかな！」

△▼△

♪ side みくる♪

「はつ、はつ。急がないと金色に咲かせられなくなっちゃう」

仕事の時間が思つていたよりもかなり押してしまつっていた。

それに加えて道路も渋滞、と遅れの一一段コンボ。

（ついてないなあ。でも急がないと。まだあきらめちゃだめだ！）

「間に合え！わたし！」

しかし、息を切らしながら店に駆け込むも時計の針は予定の時刻を過ぎた後。

「はあつ、はあ、はあ。間に合わなかつた……」

そこで緊張が途切れてしまつたのだろう。

涙とともに仕事の疲れが現れ、店のカウンターに伏して眠つてしまつた。

△▼△

窓から朝陽が差し込み、店内が明るくなつていくと、みくるは自然と目を覚ました。

「いけない、寝ちやつてた……」

寝ぼけ眼をこすり、意識を覚醒させていく。

「あつー・ミラクルフラワーは?!」

ミラクルフラワーの鉢に目を向けると、そこには金色に輝くミラクルフラワーの姿があつた。

「えつ、どうして……？」

みくるはあり得ない姿に驚き、素直に喜ぶことができず呆然として

いた。

(昨日は決まった時間にお水をあげられなかつたはずなのに……。)

「まさか……」

「そのまさかだよ、みくる」

背後から突然声が聞こえてきた。

振り向くと、そこには大切な思い人が立っていた。

「司……」

「s i d e o u t s

「司……」

「おはよう、みくる」

寝起きで頭の整理ができていないのだろう。

でも、あまりぼーっとしている暇はないはずだ。

「とりあえず説明はあとから。顔を洗つたらミラクルフラワーを持つてすぐ出るぞ。K A Y O K Oさんに渡さないといけないんだろう」

「う、うん。わかつた！」

みくるは跳ぶように洗面所に向かい、それからほんの間もなくして戻ってきた。

「お待たせ！」

「よし、じゃあ行こうか」

「あ、待つて。今から出たら道路が混んで間に合わないかも」  
せつかくの幼なじみの大舞台なんだ。

恥なんてかかせられないよ。

「大丈夫だよ。そう言うと思つて、水上バイクを用意してる」

「マジで?! ありがとう、司!」

僕にできることはここまでだけど、やれることは全力でやってやろう。

さあ、最後の大仕事だ。

## 自覚として告白

みくるを水上バイクに乗せ、V·i·V·i·d K·i·s·sのデザイナーであるKAYOKOさんの所へ向かう。

話によれば、今日はブランドの新作のお披露目会だそうだ。

そしてその会場が海沿いにあるから、こうして水上バイクを使つている。

「ねえ、司」

「なに？」

「どうして水上バイクなの？」

「こっちのほうが早いだろう？それでいて、僕が運転できるからね」  
みくるの役に立つなら、ドラマの撮影のためにわざわざ免許を取つた甲斐があるつてもんだ。

「あつ、見えてきた」

「あれか……」

明らかにデザイナーズハウスとも呼ぶべき建物が見えてきた。  
間違いなくそれがそうであろう。

「海沿いとは聞いていたけど、船着き用の桟橋まで用意していたとは  
……」

「さすがにびっくりしちゃうね」

「まあせっかく用意されているんだし、そこにつけるとするか」  
桟橋へと水上バイクをつけ、みくるをおろす。

「じゃあ、行つてくるね！」

「うん、いつてらっしゃい」

(みくるの努力がきちんと報われますように)



それから、水上バイクを係留して、お披露目会の会場に入る許可を取りつてから会場の中に入ることができた。

(けつこう手間取つちゃつたな……。さて、みくるはどこだと、探し始めると案外簡単に見つかった。

もうすでにKAYOKOさんと打ち解けたのか、お互い笑いながら

会話をしていた。

「あ、司。こつちこつちく」

みくるもこちらに気づき、僕を呼んでいる。

みくるの方へ向かうと、なぜかKAYOKOさんが僕のことをじーっと見てうなずいている。

「あの、どうされました?」

「ん?ああ、キミがみくるちゃんを連れてきたっていう男の子なんだねえ」

へえ?、なんて言いながらさらに僕のことをしげしげと観察し、時にはうんうんとうなずいていた。

「なあ、みくる。僕はいつたい何をされているんだ?」

「さ、さあ?」

KAYOKOさんは、一通り僕のことを観察したところでみくるに何か耳打ちをし、去つて行つた。

「……何だつたんだろうな」

「う、うん」

心なしかみくるの顔が赤いような気もするが、気のせいだろう。

それはさておき、肝心なことを聞き忘れていた。

「あ、そうだ。ドレスの件、どうなつた?」

「ああ、ドレスね。ほら。じゃじゃーん」

みくるの手に握られているのは、Vivid Kissの新作プレミアムドレスのアイカツカード。

「おお……やつたじゃん」

「うん。これも司のおかげだよ。ありがとう!」

心なしか、いつもよりもみくるの笑顔が輝いて見えた。

△▼△

プレミアムドレスを手に入れてから、みくるはさらにレッスンに力を入れるようになった。

完成度もさらに上がったという。

あやふやな言い方をしているけども、僕自身が見て思つた感想じやないから仕方がない。

僕の予定がつかないこともあつたり、なぜかみくるから『本番まで楽しみにしててね！』なんて言われてレッスンに参加できなかつたし。

そして、今日がその本番だ。

心なしか自分まで緊張してしまう。

証明が消え、アイカツシステムが作動する。

ステージの始まりだ！

みくるがステージに現れ、音楽が流れ始める。

ポップなアップテンポの曲が流れてくるかと思えば、ムードレーな曲が流れ始め驚きを隠せなかつた。

ちなみに言つておくが、僕もこの曲を聞いたのは今日が初めてだ。

「街のイルミキラリキラリ——」

WMの時のステージとは全く異なるみくるの姿がここにはある。

ステージに中てられたのか、胸の高鳴りが止まらない。

そしてステージが始まつてからずっと、みくるから目が離せないでいる。

「もつとあたしを見て——」

……そうか。

みくるの大人びた色気に惹かれたのか。

普段はあんなに活発で、子供のこと何ら変わらなかつたのに。

……もう子供の頃とは違う。

幼なじみのみくるではなく、一人の女性の夏樹みくるとして見ているのだ。

ふいにステージ上のみくると目が合い、僕に向けて投げキッスのしぐさをした。

違和感なくやつていたことから、おそらくもともとから振り付けをして入つていたのだろう。

だけど、今の僕にそんなことは関係なかつた。

僕はもう、みくるのことが好きになつてしまつていたのだ。

△▼△

今となつて思えば、どうしてこんなにもみくるのことを気遣つてい

たのだろうか。

幼なじみだから？

それもあるだろう。

でも、幼なじみだからといつてここまでするだろうか。

思えば、水上バイクで送るなんて変な話だ。

わざわざ調べてミラクルフラワーに水をあげたりしたのもそうだ。

でも、もう結論は出た。

僕はみくるのことが好きだつたというだけの話だ。

ただ、自分が思いを意識したら相手の気持ちが知りたくなるのは世の常。

当然ながら今までのみくるの振る舞いが気になつて仕方がない。自惚れてもいいのだろうか。

△▼△

「みくる、お疲れ様。いいステージだつたよ」

「司！見に来てくれてたんだ」

「そりやあ幼なじみの晴れ舞台だしね。僕のレッスンの成果も気に入るし」

控室には僕とみくるの二人だけ。

好きな人に思いを告げることが、こんなに緊張するものだとは思わなかつた。

「ふふつ。ありがと」

それから、しばらくの静寂の後。

「ねえ、みくる（司）」

同時に話を切り出した。

「あはは、奇遇だね……」

みくるが笑い、それにつられそうになるのを必死で抑える。

「みくる」

「何、かな」

僕の真面目なトーンにみくるも笑うのをやめ、僕を見る。

緊張で少しくらぐらするが言わなくちゃならない。

「僕は、みくるのことが好き……なんだ」

言つた。

つい顔をそらしてしまつたが。

そしておそるおそるみくるの顔を見ながら言う。

「だから、みくるが僕のことをどう思つてゐるのか、教えてくれないかな」

みくるをじつと見つめ、返事を待つ。

「……ずるい。ずるいよ、司。私だつて司のことが好きに決まつてんじやん！」

そう言い切り、喜びでぐしゃぐしゃになつた顔を隠すように僕に抱き着いてきた。

咄嗟のこと驚きはしたものの、腕を広げてみくるを受け止めた。  
「ごめん、みくる。今まで気づかなくて」

「けつこうあからさまにしてたつもりだつたんだけどなー」「それは本当に悪かつた」

自分の気持ちに気づけなかつたんじや、他人の気持ちに気づけるわけないよな。

それに、身近すぎたのもあるのかな。

まあ、とりあえず今は考へるのはやめだ。

「みくる。これからもよろしくな」

「うん！」

## “特別篇” みくるの誕生日①

今日はみくるのお店の手伝いだ。

「これはどこに置けばいい？」

「えーっと、それは裏の倉庫に置いて」

再会して久しぶりにお店を手伝っているけど、意外と覚えていないもんだなあ。

その分重いものは持てるようになつたけど。  
だから今日はもっぱら力仕事がメインだ。  
ガチャと扉が開きお客様がやつてくる。

「いらっしゃいませ」

「あら、どうも」

みくるがお客様の応対に向かう。

その間に僕は裏に荷物を持つていく。

倉庫に向かう途中、カレンダーがちらりと見えた。

7月7日に印がつけられている。

みくるの誕生日だ。

せつかく恋人同士になつたんだし、何か気の利いたことの一つくらいしたいものだけど。

「思いつかないなら、直接聞くしかないかな」



仕事もお客様もひと段落し、小休憩を取つていた。

「なあ、みくる。誕生日は何がいい？」

「そういえばもうすぐだつたね。なんでもいいよ」

「なんでもいいって……。それは逆に困っちゃうんだけど」

「だつて、司と一緒にいられるだけでも十分うれしいし」

「つ！」

そんなことを言われるなんて思つてもみなかつた。

でも、それはそれ、これはこれだ。

何とか聞き出さなくては。

「それでね、今日お客様に夫婦みたいって言われたことがすっごく

「うれしかつたの」

「夫婦ねえ。いつかそうなれるといいな」

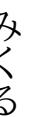
「私はそうなつてくれないと困るの」

「それもそうだな」

みくるのいうことも全くだ。

でも、夫婦か。

……いいこと思いついた。



みくるの誕生日当日。

早朝からみくるの家へむかつた。

みくるには今日朝から行くことは伝えていない。

もちろんお義父さんとお義母さんには伝えている。

その時にあたたかい目で見られたのはご愛敬。

お義父さんに至つては『みくるをよろしく頼む』とまで言われた。

まあ、将来的にはそう考えているからきちんと返事を返した。

みくるの家へとついた。

みくるのご両親は僕に気を遣つてくれたらしく、夜中から車で小旅行に出かけたらしい。

事前にご両親から預かっていた鍵で玄関を開ける。

部屋はまだかすかに朝陽がさす程度。

みくるが起きてくるまで、まだ時間はある。

まずは朝食の準備から。

食パンをトースターにセットし、フライパンではベーコンエッグを作り。

どちらもできかけた頃、においにつられたのか寝ぼけ眼でみくるがやつてきた。

「おはよお〜」

僕の声に気づいたのか、表情が驚きに変わっていた。

そしてキヨロキヨロと周りを見渡し、僕と目が合つた。

「え?! なんで司が?」

「誕生日のサプライズってやつ。ほら、朝食ができたぞ」

僕は朝食が乗ったお皿をテーブルへと並べていく。

「いや、何で？何で家で朝ごはん作ってるのよ」

未だに困惑しているみくる。

「みくるがこの前夫婦みたいって言われて喜んでたから、今日は一日みくるの夫として頑張ろうかなって」

「ええええっ？！」

今日は楽しい一日になりそうだ。



朝食を終え、開店の準備をする。

僕は簡単な掃除や片付けをする。

その間、みくるには身支度をしてもらっている。

「お待たせ。それじゃあパパッと片づけて開店しよう」

「ああ」

それから間もなくして店を開け、お昼休憩をお互いに取らずして取りながら、夕方まで店を開けた。

その最中、また『まるで夫婦ね』といったことを言われ、僕が『いざれはそうなるうと思っています』と答えると、みくるは少し照れながらも喜んでいるようだった。

「今日はこれで終わりかな」

「そうだねー。あ、晩ごはんはどうするつもりなの？」

「今度も僕が作ろうか？」

「ありがとう。でも、一緒に作らない？」

「そりゃあいいね」

一人でキッチンに向かい、晩御飯を作る。

お互い黙々と手元の作業に集中していて、あまり声は出さなかつたが、それでも楽しかつた。

そして、幸せだった。

心地よくてつい、いざれは二人の間に子供が、なんて考えだしてしまい、まだ僕らには早いと考えを頭から追いやつた。



夕食を終え、ソファに座つて一息つく。

「今日は楽しかった？」

「うん。いい誕生日プレゼントだつたよ」

自然と手をつなぐ。

「そりいえば七夕だつたね」

「そうだね」

僕の言葉にみくるが答える。

「まだ誕生日は終わつてないし、天の川でも見に行こうか」

「うん」

僕が先に立ち上がり、みくるの手を引く。

「行きましょう、お姫様」

「うん」

バイクに乗つて目的の場所に向かう。

夜の風は少しひんやりしていたけど、後ろにいるみくるの暖かさを感じられて心地いいくらいだつた。

ちいさな峠道を越え、竹林ある展望台にやつてきた。  
「到着。寒くなかった？」

「ううん。司が暖かかつたから」

バイクを降り、また手をつないで星の見えるところまで歩く。

「そりいえば、前もこんなことしてたつけ」

「その時は僕が自転車に乗せてたな」

「途中でこけそうになつたの未だに覚えてるよ」

「恥ずかしいから忘れてくれよ……」

「やーだ。これもいい思い出だもん」

思い出話ををしていると、すぐに目的の場所に着いた。

「ここからがよく見えるんだ」

僕が見上げ、つられてみくるも空を見上げる。  
「わあ……」

見上げると、一面の星空が広がつていた。

月もなく、きれいな星空だつた。

「ねえ、あれが天の川だよね」

そう指さす先には、宝石をまぶしたように煌めく天の川が広がっていた。

「司」

「なに？」

「連れてきてくれてありがとう」

「どういたしまして」

僕は、こつそりと持つてきていた短冊をみくるに渡した。

「これ、持つてきてたの？」

「まあね。ペンもあるよ」

「フフッ。準備がよろしいこと」

二人で短冊に願いを書く。

「何を書くの？」

「これからもみくると一緒にやつていけますようについて。みくるは

？」

「私も司と同じ」

「ハハッ。なんだそれ」

「司だつて人のこと言えないじやん」

「確かに」

雑談を交わしながらも、お互い眞面目に願いを書く。

「それで、どこにこれを掛けるの？」

「そこの竹林にね」

「いいのかな」

「大丈夫だよ」

そして、同じところに短冊を吊るす。

「さ、帰りましょうか」

「うんっ！」

バイクが風を切りながら峠を下していく。

将来を約束している二人。

この峠のようにまつすぐにはいかないだろう。

でも、この2人ならそれさえ乗り越えていけるだろう。

風が吹く。

ふたつ並んだ短冊が優しく揺れている。

## “特別篇” みくるの誕生日②

今日はみくるの誕生日。

誕生日プレゼントを用意しようと思ったがなかなか決められず、結局当日まで用意できなかつた。

だつて何を渡しても喜んでくれそuddash;…。

「なあ、みくる」

「なに? 司」

「誕生日プレゼントは何がいい?」

「うーん、司がいるならなんでもいいかな」

そして今、みくるの家でゴロゴロしながら聞き出そうとしている。

「そう言われてもなー。結局普段と変わらないし」

「でも、この天気でどこに行くつていうのさ」

「確かに」

窓から外を眺めると、暗い雲に覆われた空が見え、雨が降つている。

「来たときはあんなに晴れてたのになあ」

「でも、今日の夜には止むみたいだよ」

「それならいいんだけど

しかし、何をしようか。

せつかく二人でいるんだし、何かやれることはないと考えを巡らせていると、みくるは仰向けになつていた僕のおなかを枕にしてきた。

「たまにはこういつた感じでだらだらするのもいいんじゃない?」「お店の方もお休みだしね」

と、だらだらすることを決め込んだが、僕のおなかが空腹に耐えられなくなつたみたいで、ぐくつと主張を始めてきた。

「あはは、司がおなかすいちゃつたみたいだし、少し早いけどお昼ごはんにしようか」

「賛成」

とはいつたものの、せつかくだらだらすると決めたこともあり、比較的楽に済むそうめんを食べることにした。

作るのはもちろん二人で。

「こういう時のためのそうめんだな」

「だね。時期的にも少し暑くなつてくるからおいしく食べられるし  
しばらく一人のそうめんをすする音だけが聞こえる。

途中、みくるが「こういう夫婦もありだね」と言い出したのを聞いて少しおもしりてしまった。

でも、こんな平和な家庭が築けたらいいと思うのも事実だ。

食べ終わつた食器は当たり前のように二人で片づける。

傍からみたら、もう夫婦だろ、なんて言われそしだが、今の恋人と  
いう関係もいいものだと思う。

「ねえ司、しりとりしようよ」

「へえ、しりとりか。いいね。その勝負受けて立つ」  
「よし、それじやあありきたりだけど、リンゴから」  
「ら……らつこ」

「こ、コアラ」



「ん……」

僕は眠つていたみたいだ。

しりとりの最中に眠るとは思つてもいなかつた。

「あれ？」

一緒にいたはずのみくるの姿が見えない。

あたりを見回すと、台所にいるみくると目があつた。

「お。司、おはよう」

「おはよう、つて言つていいのかわからぬけど、おはよう」

起き上がりつてみくるの方へ行くと、もうあらかた完成していた。  
「起こしてくれてよかつたのに」

「いいのいいの。だつて、最近忙しかつたでしょ？」

「まあ、そりやあそうだけどさ。せつかくの誕生日なのに」「  
もう。それ以上気にするなら司には帰つてもらうよ」

「え!? それはつらいよ」

冗談だとわかつていても、そう言われるのはつらい。

僕だつてみくるのが好きなんだから。  
だから、素直にみくるに従うこととした。

「うむ。わかればよろしい」

それから、夕飯を食べて日も暮れたころ。

「司、今日泊まつていかない?」

「明日、は午後からだし、いいよ」

「やつた」

誕生日にみくるがわがままを言つたんだ。

叶えてあげないわけにはいかないさ。

特に代わり映えのない日常の一つではあるけども、ほんの少し特別な日。

それぐらいがちようどいいのかもしれない。

あおい／

## 二人の編入生

ある時、僕が散歩をしていると半ば腐れ縁と化してきた蘭を見つけた。

どうせ一人でほつつきまわっているんだろうから、揶揄つてやろうと思つて近づくと、驚くことに、いつも一人で孤高な蘭が二人の女の子を連れていた。

「ん？ 司じやないか。どうしたんだ、鳩が豆鉄砲を食らつたような顔して」

「いや、お前が人を連れてるなんて珍しいなって」

話し始めた僕らを、蘭の連れている二人が興味深げに見る。

頭に大きなリボンを付けた方は、僕のことを『この人誰なんだろう』という感じで見つめてくる。

名前は星宮いちごだ、つて蘭が言つてた。

一方、髪をシユシユでサイドにまとめた女の子の方は、目を輝かせてこちらを見ている。

まるで、子供のような無邪気な目だった。

こつちは霧矢あおいだと聞いた。

「まさか、あの美しき刃と呼ばれる紫吹蘭と国民的ヒーローの飯島司が知り合いだつたなんて！ しかも下の名前で呼び合うほどの関係だなんて。これは穩やかじやない！」

誤解されているような言葉だ。

流石に訂正しないと。

「えつと、霧矢さん。僕と蘭はただの友達だ。下の名前で呼んでるのは、入学してからの付き合いだから自然と、つていう感じなんだ」 素直に訂正すると、霧矢さんはなぜだか面白くなさそうにこつちを見てきた。

「これはスクープだと思ったのに……」

「スクープって、どうするつもりだつたんだよ」

蘭が呆れたように言う。

蘭の言い方からすると冗談のようなものだったのだろう。  
それにしても、蘭にこんな友達ができていたなんてなあ……。  
親心が少しわかるような——。

スパーーン!!

——痛い。

「いきなり人をしばくなんてひどいじやないか」

「お前が余計なことを考えているからだろう」

「ひどい……」

僕は蘭に友達ができたことを喜んでるだけなのに……。  
まあ、いつまでもこんな風にしているのも蘭の友達の二人に申し訳  
ないな。

とにかく自己紹介しないと。

「霧矢さんはたぶん僕のことを知っているんだろうけど、改めて自己  
紹介させてもらうよ。僕の名前は飯島司。ここスター・ライト学園の  
男子部に所属しています。学年は蘭と同じ1年です。二人も同じな  
のかな?」

「一人は最近編入してきたんだ。だから司も顔を知らないんだろう」  
蘭は、二人は入学オーディションがあつたんだけどな、と嫌味のよ  
うに付け加えた。

知らなくてすいませんでしたね。

「私は星宮いちごです。蘭ちゃんと同じクラスで友達です」

「ちゃんをつけるな!」

ちゃんをつけるとダメなのか。

今度揶揄つてやろう。

「私は霧矢あおいです。蘭とは同じクラスで友達です。ちなみに、い  
ちごとは小学校からの付き合いなんです」

「なるほど、どうりで3人ともとても仲がいいわけだ」  
たぶん、蘭は一人に懐かれたっていう感じなんだろうなあ。

「で、3人は何をしていたんだ?」

「していた、っていうよりはこれから行こうとしていたところだな

「そうそう。これからちょっとといちごの家に行こうって言つてたの」「せつかくだから司くんもおいですよ！」

といった星宮の一言により、僕も星宮邸へ伺うことになった。

それに対する蘭は、司ならいいだろう、と一言。

霧矢さんは、僕からいろいろと話を聞きたいらしく、目を輝かせて歓迎していた。

星宮邸へ向かう道中、霧矢さん（本人はあおいでいいと言つていた）から、いろいろと質問を受けた。

なんでも、彼女はアイドル博士と呼ばれるほどアイドルについて詳しく、それでいて知識に貪欲だから、本人を目の前にするといろいろと聞きたいことが思いつくそうだ。

そんなこともあり、道中はとても賑やかだった。

時折、蘭についての質問が僕にぶつけられ、余計なことを言うなどシバかれることがあった。

ただ、質問は道中だけに終わらず、家についてからも、ちょうど居合わせた星宮の弟のらいちゃんと合わせて、とてつもない数の質問をぶつけられて驚いたのは別の話だ。



以前は蘭と僕の二人で話をしていたけど、この時を機会にあおいちゃんといちごちゃんが加わって4人で会つて話すことが多くなった。

というのも、蘭が大抵あおいちゃんといちごちゃんと一緒に行動することが多かつたからもあるんだけど。

「ねえねえ、司」

「なんだよ、大樹」

お昼休みに教室で日向ぼっこをしていると、そこしニヤニヤした大樹がやつてきた。

「最近、司が女の子を侍らせているって聞いたんだけど、本当？」

「そんなわけないだろう。ただの友達だよ。だいたい、どう見たらそういう風にみえるのかなあ」

聞いてみれば、いつものことぐ噂話の真偽を確かめに来ただけだつ

た。

ただ、大樹はなんだか不満そうな表情だつた。

「おもしろくないなあ」

「おもしろくなくてすいませんねえ」

大樹は不満そうな顔のまま、背を向けて立ち去ろうとするが、その時何かを思いだしたように再びこちらに向き直る。

「そ、ういえばさあ、なぜか司は女子部のクリスマスイベントに参加してたんだつてね」

「誘われたから参加してたんだよ」

大樹は再びニヤニヤとした表情で、詰め寄つてくる。

「へえ、いつたい誰に誘われたのかな？」

「しつこいなあ。別に誰だつていいだろうに」

「よくないから聞いてるんだよ。で、誰なんだい？」

あしらつてもこのまま下がる気はないみたいだ。

こうなつた大樹は梃子でも動かないからなあ。

はあ、仕方ないか。

変な噂にならないように釘だけは刺しておこう。

誘つてくれたあおいちゃんに迷惑はかけたくないし。

「蘭と同じクラスのあおいちゃんだよ。言つておくけど、変な尾ひれはつけるんじゃないぞ」

「わかってるつて。にしても、最近知り合つたばかりらしいのにもう下の名前で呼んでるのか」

「向こうがそう呼んでくれつて」

「へえ、へえ」

僕の答えに満足したのか、大樹はスッと自分の席へ戻つていつた。

嵐が去つたことに安堵を覚えつつ、クリスマスパーティーのことを思い出し、少し笑みがこぼれた。

まさか、大木を切つて滑り降りるなんてなあ。

なぜか、『男手が必要なんだ』という感じでいちごちゃんから手助けを乞われたのには驚いたけど、あれほど大きな木を切るなんてなあ。蘭と一緒に呆れてしまつたつけ。

学校に戻つてから、用務員の涼川さんは僕を憐みの目で見てくる  
し。

もちろんねぎらつてはくれたんだが。

大樹はこんな話をしても真に受けなかつただろうな、とひとりご  
ちつた。

## 演技という接点

年が明け、少しした頃。

僕は学校の体育館を借り、今の大好きな仕事である特撮ドラマの撮影の練習をしていた。

「こう」を「こうして、こう」

作品の監督が主演の人たちにもアクションを求めている人で、今はそのなかの殺陣を一通り頭に入れていた。

「ふう……。よし、とりあえずはこんな感じだな。あとは現場で相手の役者さんとすり合わせかな」

そしてちょうど休憩に入ろうとした時、体育館の戸が開いて誰かが入ってきた。

「お邪魔しまーす。おおつ！ 司くんのレッスン風景を見られるとは！」

「残念ながら、今は休憩だよ」

「不覚ッ！」

入ってきて早々目を輝かせたあおいちゃんだが、僕の返事にがっくりとうなだれる。

本当にわかりやすい子だなあ。

「それで、何か用でもあるのかな？」

僕の言葉に、あおいちゃんはハツとして居住まいを正した。

「実は、お芝居の相談に来たんです」

「え、僕に？」

「はい」

先ほどとは打って変わつて真剣な表情で答えるあおいちゃん。

おふざけじやがないみたいだけど。

「えっと、どうして僕のところに？」

「身近な人で、演技について一番詳しいのは司くんかなつて思ったの。だつて、今絶賛活躍中でしょ？」

「それはそうなんだけど、まだまだデビューして1年経つてないんだよ？ 演技も現場で叩き上げたようなものだし」

実際、入学して間もなくのオーディションでは、監督の意向から演技よりも身のこなしが求められたから合格できたわけで、演技は本当に現場での叩き上げなのだ。

共演する先輩方にいろいろと教えてもらつたものもあるけども。それを聞いてもなお、あおいちゃんは食い下がらなかつた。

「それでも、やっぱり司くんがいいの。お願ひ、何でもするから！」

ものすごい熱意だ。

いつたい何がそこまでさせているんだろう。

「あー、わかつた。とりあえず話は聞こう。話はそれからだ」

「本当?!」

「うん。でも、女の子が『何でもする』っていうのは感心しないよ」熱意を伝えるには十分だけど、あおいちゃんだけ可愛らしい女の子なんだ。

その辺りは気を付けておくに越したことはないし。

「はい！これから気を付けます、先生！」

「先生って……」

大袈裟だと思つたけど、あおいちゃんが楽しそうに言うものだから否定するのはやめた。

まずは理由を聞かないと始まらない。

「とりあえず、どうして演技の指導が必要なのか教えてほしい」

「気になるドラマのオーディションがあるから、だね」

「なるほど。ちなみに、そのドラマつてどんなものなんだ？」

あおいはこれですと言つてアイカツフォンの画面を見せてくる。  
その画面には、イケナイ刑事3と書かれていた。

「これつて、一人の刑事が派手なアクションで犯人を追い詰めて捕まえるつていうやつだよね？」

「うん。その認識で間違いないよ」

アクションか……。

つまりはそういうことか。

「だいたいわかつたよ。つまりはアクションも込みで教えて欲しかつた、つてことなんだね」

「そういうこと！だから司くんが適任だと思ったの」

蘭も太鼓判を押してたし、と続けて言つた。

ここまで言われて受けないなんて言えないなあ。

まあ、あの熱意と本気さを見て、指導をするつもりにもなつたんだけどね。

「本当に叩き上げになるけど構わないよね？」

「うん、もちろん！」

そして、これからオーディションに向けて演技やアクションの基礎を教えることになった。



演技のレッスンは翌日から始めた。

あおいちゃんは決めた日から早速レッスンしたいと言つていたけど、残念ながら僕は予定があつて断らざるをえなかつた。

だから、その分当日は気合が入つていた。

演技に関しての基本的なメニューには、僕のお古の台本を使うことにした。

実際に叩き上げと言つた通り、最初から本番に近い形で演技をさせた。

途中から、感情の表し方だつたり、台本を覚えるコツだつたりと、小さなアドバイスを加えていった。

アクションは、とにかく怪我をしないことを重点に置いて練習をした。

着地の時の受け身の取り方だつたり、一見派手に見えつつも相手にけがをさせない取り押さえ方だつたりと、これもいろいろとアドバイスをした。

一週間もすれば、ある程度形になつた。

もともと理解が早くて、運動も得意だつたということもあり、コツをつかむとそこからぐんぐん成長していった。

流石にここまで飲み込みが早いとは思わなかつたけど。

あれ、僕つて必要だつた……？

「よし、今日はここまでにしようか。あおいちゃんもだいぶお芝居が

板についてきたみたいだし」

「私なんて司くんに比べたらまだまだだよ」

「そんなことはないと思うよ。あくまでも僕は今までの経験がある分、何とか教えることができていいだけだから」

実際、あおいちやんは場数こそ踏めば、僕よりもすごい存在になつてしまふんじやないかと思つてゐるし。

そう称えた僕に対して、あおいちやんはそんなことないとでも言うように言つた。

「でも、司くんのレッスンのおかげでここまでこれたんだ。それはちょっと誇つていいと思うけど?」

「そう言つてくれると僕も鼻が高いや」

そう言つてくれるだけでも、僕は手伝つた甲斐があつたなあと心に思いながら、翌日のメニューを相談して、解散となつた。

## 唐突な出演依頼

結果としては、あおいちゃんのオーディションは合格だった。

しかも、監督や主役の人たちからの評価も高かつた。

一緒にレッスンしたからだろうけど、このことが自分のことのようにうれしかった。

それに、あおいちゃんは神谷しおんちゃんという新たな演技仲間を得たようだ。

いいライバルであり、友達でもある関係っていうのはいいものだと思う。

僕と大樹の関係もそんな感じだし。

それから少し経ち、僕は女子部が主となつて制作している『オシャレ怪盗スワロウテイル』にゲスト出演の依頼が来た。

それも同じくゲスト出演のあおいちゃんから。

「どう? 一緒に出てくれない?」

「うーん、スケジュール次第だなあ。撮影日はいつになるの?」

「えーっと、司くんに出て欲しいところの撮影はこのあたりだつたよ」

そう言つて、あおいちゃんは自身のスケジュール張を開いて予定日を指す。

僕もスケジュール張を開いて、その日がフリーであることを確認した。

「ちょうど空いてるよ。それで、僕はどんな役でオファーされたんだ?」

すると、あおいちゃんは胸を張つて答えた。

「私の直属の部下役だよ」

「直属の部下?」

はて、もともとそんな存在はあのドラマにあつただろうか。

「そんなのあつたつけ?」

「今回のドラマだけだよ」

「えつ、そんなこと許されるの?」

そして再びあおいちゃんは胸を張つて答えた。

「なんと、私が監督さんたちにお願いしたのです！」

「ええ～！」

まさかの発言に僕は驚きを隠すことができず、声を上げた。

「よくそんなことが許されたもんだ……。それで、なんで僕を呼びたいのか聞かれた？」

「もちろん。私もさすがに理由もなしに司くんを呼ぼうなんて思わないよ」

「へえ。それで、何でなんだ？」

それに、あおいちゃんは待つてましたとばかりに喋り出した。

「私がイケナイ刑事3に出られたのは司くんのおかげだから、そのお礼つて感じかな。撮影の時に私がアクションしているところもしつかりと見てもらいたいし。あと、一度くらい司くんと共演してみたいと思つたし」

「そ、それでOKが出たの?!」

まさかの理由と、それで許可が下りたことに驚きを隠せない。

本当に言つたの？

「そうだよ。でも、ちょっと恥ずかしくて最後のは言つてないけど」

一瞬、少し照れたような表情になりながら話すあおいちゃん。

頬を桃色に染めて、目を逸らしていた。

そのちよつとした隙に見せた表情が可愛くて、少しどキッとした。

それに、言ってくれたこともうれしかつた。

「そつか……。ちょっと嬉しいや。あおいちゃんとそんなこと言つてもらえて

「だつて、司くんは私のお師匠様みたいなものだからちよつと特別な  
の」

「師匠だなんて……。そんな大層なものでもないと思うけど」

その後、あおいちゃんの後押しされて僕は撮影に参加することを監督さんへ連絡し、真面目な話に移るのだつた。

△▼△

時は過ぎて撮影当日。

スタジオにつくとあおいちゃんと監督が僕を待つていた。

「君が司くんだね？」

「はい。今日はよろしくお願ひします」

僕は監督に連れられ、控室で改めて自分の役の説明と作品の説明を受けた。

でも、何でわざわざ監督が直々に来たんだろう。  
そんな思いが頭をよぎつたが、口に出すのも不躾だと思つてやめた。

役柄や作品についてはあらかじめあおいちやんから聞いていた通りで、話もスムーズに進んだ。

「それじゃあ、今回の撮影の内容はこんな感じだけど、何か質問はあるかな？」

「それじゃあ、一つだけいいですか？」

「いいとも」

「今まで、霧矢さんが出ている作品では部下なんていなかつたと思うんですけど、どうして今回はそんな役を作つてまで僕を呼んでくれたのですか？」

僕は、この話を受けたときから気になつていたことを聞いた。

すると、想像もしていなかつた答えが返ってきた。

「実はね、君をいざれ霧矢君の作品に登場させようかと思つていたんだ。それに、そろそろ君も今の作品が終わつてしまふだろう？そこでタイミングのいいところに、霧矢君が話を持つてきてくれたもんだから是非とも君を出してみたい、と思つたのさ！」

監督さんが言つてゐる横で、あおいちやんもうんうんとうなずいている。

「ん？ ちょっと待てよ？」

あおいちやんの作品に僕を出す？

まさかとは思うけど……。

「あの、監督つて実はイケナイ刑事の監督なんだつたり——」

「正解！ いやー、君の噂はかねがね聞いていたんだよ。今君が出演している作品の監督は僕の知り合いでね。君の演技はなかなか素晴らしいと聞いてね。特にアクションが光ると」

当たりでした。

まあ、それぐらいじゃないと気軽に作品に出すとか言えないよな。  
そして、監督がまだ話そうとしていたが、撮影開始の時間が近づいたこともあり、スタジオへと戻つていった。

「なんだか、すぐ熱意を感じる人だつたなあ」

「そうだよねー。でも、あの監督さんつて撮影のときも結構すごいんだよ」

「もっと熱くなるの？」

こう、熱くなれよ！って感じで。

あ、違う？

「あのはね、演者さんの個性を活かしながら役を引き出すのが上手いんだよ」

もちろん熱意もすごいけど、とあおいちやんは付け加えた。

「そつか」

あおいちやんがいい監督と巡り合えたことが少し嬉しい。

そして、気が緩んだことでふと質問し忘れていたことを思い出した。

「そういうえば、どうして監督さんはわざわざ僕を出迎えてくれたんだろう。何か監督さんは言つてた？」

「うーん、どうだつたかなあ……。あつ！監督は司くんにかなり期待していたみたいだから、たぶん実際に会つてどんな人物かその目で確かめたかったんじゃないかな」

「なるほど……。言われてみれば、監督さんは僕を見るなり目の色を変えてたつけ」

それだと、あの時の熱意も納得がいく。

「おつと、それじゃあ私はそろそろ出番だから行つてくるね。司くんの出番の時はまた呼びに来るから」

「わかつた。それじゃあいってらっしゃい」

「うん、いつきます！」

そう言つて、あおいちやんは部屋を出ていこうとしたが、急に踏みとどまつた。

何か忘れものでもしたんだろうか。

「撮影しているところ、見に来てもいいんだよ♪」  
と去り際にウインクをしながら部屋を出ていった。  
……撮影、見に行くか。

## オシャレ怪盗スワロウテイル

ついに撮影が始まった。

とは言つても、僕はちょい役に近い立場なんだけれど……。  
場面は、お宝を盗んだスワロウテイル達を捕まえようとするところ。

「来ると思っていたわ、スワロウテイル！」

あおいちゃんと、しおんちゃんと共に気球の前に立つ。  
リハーサルの時にも思ったけど、ちょい役のくせに前に出すぎだと思ふ。

監督からは何も言われず、むしろそれで良いと言わんばかりの笑顔  
だつたのにはちょっと驚いたけど。

「おとなしくお縄についてもらうぞ！」

「悪いけど、そんなわけにはいかないんだ！」

僕の言葉に蘭が応える。

そして、その言葉を合図に警察側はスワロウテイルの捕縛に動く。  
僕は蘭を抑えに向かう。

「私の相手はお前つてことか」

「そういうことになるね。悪いけど、手加減はできないよ！」

そう言つて、僕は蘭に向かつて駆けていく。

蘭は僕に対してファイティングポーズを取つて、僕を待ち構える。  
僕が手始めに飛んで殴りかかる。

それを蘭は華麗に躱し、流れるように裏拳を放つ。  
躱されることを呼んでいた僕はその裏拳を手で受け止め、その手を  
掴んで投げる。

投げられても、蘭は綺麗に着地をこなす。

「なかなかやるな」

「まだまだこんなもんじやないぞ」

そう言つて今度は蘭から攻撃してくる。

僕は足払いをかけられ、転倒しそうになるも側転の要領で受け身を取り、蘭に正対する。

すると復帰した僕に対して、蘭はすかさず顔に右ストレートをきめてこようとする。

僕は裏拳を止めたように、腕をつかんで拳を止めるが、それを読まれて膝蹴りを食らう羽目になつた。

「ぐつ……」

「同じ手は二度も通用しないぞ」

つい無意識に拳を掴んでしまったことを恥じる。

そしてすぐさま体勢を整え、確保に向けて動く。

まずは軽いジャブを顔から胸元に向けて放つ。

蘭はそれをバックステップで器用に躱す。

それを数回繰り返して蘭が着地するタイミングを見計らい、足払いを掛ける。

蘭はバランスを崩すも、持ち前のバランス感覚と柔軟さで逆立ちになつて持ちこたえる。

そして蘭は逆立ちのまま足での攻撃に切り替えてきた。

僕は一発目を咄嗟に防いだが、そのまま攻撃のペースを蘭に握られてしまう。

回転しながらの攻撃に隙を見いだせなくなつた僕は、一旦距離を開けた。

「どうした。そんなものか？」

「くつ……」

蘭の予想以上の動きに翻弄されてしまう。

それから、僕は幾度も攻撃を繰り出すも上手くいなされてしまう。

「釘付けにできてるからまだいいが、これじゃあジリ貧だな」

もちろん捕らえるなんて無理だ。

そう思いながらも、足止めをしようとする後ろから手錠が飛んでくる。

蘭は危なげなく避けられたみたいだ。

「だいぶ押されてるみたいね」

「あおいちゃん……」

あおいちゃんが救援に駆けつけてくれた。

後ろを見てみると、いちごちゃんとおとめちゃんが捕らえられていた。

しおんちゃんが一人を監視しながら周りをキヨロキヨロと見ている。

「さあ、今度こそ確保してやる！」

「二人に増えたところで！」

まずは僕が先行して蘭の相手をする。

攻撃は読まれているが、それでもかまわない。

とにかく、僕は隙を作ることに力を注いだ。

お互に攻撃を放ち、躊躇続けて集中力の落ちたところで、あおいが蘭の後ろに回り込む。

そして、タイミングを合わせて蘭へアクションを起こす。

僕は蘭のバランスを崩すため、あえて少し距離を取つて中途半端な距離での交戦をする。

もちろん相手に悟られないようにゆっくりと下がる。

程よく下がつたところで、蘭へタックルを仕掛ける。

もちろん蘭は回避をする。

距離が詰まつていれば、横や上に跳んでの回避だつたのだろうが、距離が空いていたこともあつて後ろにバックステップで下がる。

そこで後ろでそのタイミングを待つていたあおいちゃんが確保に移る。

「まずいッ！」

「もう逃がさないわよ！」

蘭は着地をずらそうと試みるが、空中では人は無力になる以上、捕まるのは目に見えていた。

正直賭けに近かつたが、なんとかうまくいったみたいだ。

だが、そう思つて気を緩めたのが悪かつた。

瞬間、閃光が視界を埋め尽くした。

しばらく視界は失われ、目が慣れ始めた頃にはスワロウテイルの姿はなかつた。

そして、見上げると気球が飛んでいた。

恐らく犯人はユリカちゃんだろう。

「逃げられた、か……」

「みたいね……」

「まさか気球が奪われるなんてな」

「まつたくね」

二人並んで奪われた気球を見上げ、呆然と立ちすくむ。

ここでカットがかかり、撮影は終了となつた。

S A S U K E ? いいえ、T r i s t a r のオーディションです。

僕の出番が終わり、それ以降の撮影がなかつた僕はクランクアップとなつた。

撮影が終わつた以上、暇になつた僕は他のみんなの撮影を観察しようと思っていたが、あおいちゃんもあわせてクランクアップだつたらしく、二人で帰ろうということになつた。

ちなみにしおんちゃんは別のお仕事があるらしい。

「あおいちゃんの演技がすっごく上達してたからびっくりしたよ」

「司くんに比べたらまだだよ」

口ではそう言うものの、成長したことが認められてうれしいのか、少し頬が赤くなつて照れたように見える。

そんなに謙遜しなくていいのに、と思いながらもあおいちゃんの気持ちを考えて口にするのをやめた。

僕も演技を始めた当初がそだつたからわかる。

「でも、この成長スピードだつたらすぐにでも追い抜かれちゃいそうだけどね」

「その時は司くんが抜かれないように頑張るんでしよう？」

「それはそただけど、逃げ切れる自信が……」

果たして、僕はあおいちゃんと追い抜かれる事無く演技の腕を磨くことができるのか。

次回、司、地に堕つ。

……と茶番は置いといて、そろそろあおいちゃんと教えられることが無くなつてきたのも事実だ。

「いろいろ言つたけどさ、もし追いついた時には一緒に走ろうよ。そしたら、司くんも走りやすいんじゃないかな？」

「……そうだな」

想いもしなかつた答えに僕は一瞬呆けるが、それと同時にあおいちゃんらしさを感じて自然と笑みがこぼれる。

「でも、追いついてもずっと走ったままか……。これは疲れそうだな」「あ、それもそうだったね……。じゃあ、もし疲れたら私が司くんを引いて進むから、司くんは私を引っ張つて行つてくれるかな？」

「それくらいならお安い御用だ。でも、二人とも休みたくなつたら、その時は一緒に休むのもいいんじゃないかな？」

「あ、それ賛成！」

同じ演技の道に進む仲間でありライバル、つていうマンガみたいな関係に少しワクワクしながら、これからもアイカツを頑張つていくことを誓つた。



そして時は少し進み、夏も近づいてきた頃。

2年生に進級して昨年の春からのドラマが終わり、お祭り作品である夏映画の撮影も終えた僕は久しぶりの大きな休みにゆつくり羽を伸ばしていた。

「今日はゆつくり昼寝でもしようかな……」

そうひとりごちて目を瞑つていると、少し離れたところから女子生徒たちの喧騒が聞こえてきた。

中には悲鳴のような声も混じつていたけど、いつたい何をやつ正在るんだ……？

校内を見回ると、今まで見たこともなかつたアスレチックのような設備が置かれているのに気づいた。

某S A S U K Eほど厳しいものではないけど、明らかに難易度が高そうだった。

「え、なにこれ？ アイドル大運動会的な奴ですか？」

頭の中が『?』で埋まる。

学校の敷地にいつの間にかこんなものができていたことに僕は驚きと困惑を隠せなかつた。

また、それに追い打ちをかけるかのような参加人数の多さだ。

スター écrit の女子部の全員が参加しているのでは、と思えるような参加者の数だ。

「ん？ 司じやん。お前もこれを見に来てたのか」

大毅が僕に気づき、せつかくなら一緒に見ようぜと話しかけてくる。

この言い方からすると、はこの正体を知っているみたいだ。

「ちょっと待つてくれ。まずこれが何なのか説明してくれ」

「は？お前これが何をやっているのか知らずに見に来てたのか？」

大毅は呆れたように肩を落とし、首を振る。

「これだからお前ってやつは……。まあ、いいや。これはな、神崎美月が組むユニットのメンバーを決めるための競技なんだ」

「なるほど。それで、みんなは美月さんの隣に立つべく必死になつているつてわけか」

しつかし、参加者が多いなあ。

大毅曰く、スターライトの女子部のほぼ全員が参加しているらしい。

さつきもそう考えていたけど、まさか本当にそうだとは思わなかつた。

だからこれだけいたら知り合いの一人や二人ぐらいは見つけられるだろうな、と思つてアスレチックの方を見やる。

すると、一生懸命頑張つているあおいちゃんの姿が目に映つた。とても真剣な目で、ゴールを見据えて全力で向かつている。

演技の練習をしていた時のように真つすぐな目で、次なる大きな目標に向かつて進んでいる。

……そういうえば、あおいちゃんといちごちゃんがアイドルを目指したきつかけが美月さんのステージなんだつけ。

その時の漠然とした夢が、今日の前に迫ろうとしているんだ。頑張らないわけがない。

でも、実力を考えるとこの先あおいちゃんは親友の二人と直接競うことになるはずだ。

その時、あおいちゃんは夢に向かつて進むのかな。

それとも、親友の夢を思つて二人に譲つてしまふのかな。

まだこの競技は始まつたばかりだ。

この競技がどんな結末になるかはわからないけど、僕は最後まで応

援しよう。

ユニットのメンバーに決まれば僕も一緒になつて喜ぶし、夢かなわなかつたなら一緒に泣いてやろう。

よし、そうと決まれば、全力で応援だ。

「頑張れー！あおいちやーん！」

マネー……ジャ一……?

あおいちゃんが参加していたオーディションは、急きよ空から参戦したかえでちやんという帰国子女と蘭に決まつた。  
最終的にはいちごちゃんとあおいちゃんと蘭で直接争う形になつて、蘭が勝つたという形だ。

何故かかえでちやんは一足先に決まつていたけども。

それはともかく、今日はいちごちゃん達のお疲れさま会と蘭のお祝い会を兼ねた簡単なパーティーだ。

蘭はもちろんのこと、いちごちゃんとあおいちゃんだけでなく、おとめちゃんやユリカちゃんといったメンバーもそろつてゐる。

お疲れさま会とは言つても、みんなの表情はすがすがしい。

それも、みんな全力を出し切つたからだと思うけど。

「今日はみなさんお疲れ様でした。僕はそばから見ていただけですが、今回は物凄いオーディションだつたと思ひます。それでも蘭は見事に勝ち抜いたわけですが、みなさんの必死なアイカツを見ていて僕もこれから アイカツを頑張ろうと思いました」

ちなみに僕がこのパーティーを開催した。

せつかくみんなが頑張つてたんだし、労つてあげたいつて思つたんだ。

「それでは、乾杯！」

「乾杯！」

そして、蘭に一言。

「おめでとう、蘭」

「ああ、ありがとう」

腐れ縁みたいな仲だつたけど、今では良き友達として接せている。

あおいちゃんたちのおかげなんだろうな。

噂をすればなんとやら、と言ふようにあおいちゃんといちごちゃんもやつてきて蘭にお祝いの言葉を改めて告げている。

「おめでとう、蘭！」

「ありがとう、いちご。つておい、飛びついてくるな！」

いちごちゃんはいつものように蘭へ抱き着いている。

いつも思うが、なんだか微笑ましいな。

そして、僕が二人を見ているとあおいちゃんが僕の隣へやつてくれる。

「司くん、今日はありがとうね」

「僕はそんな大層なことはしてないよ。ただ、みんなが頑張っていたからこれくらいはしてもいいかなって思つただけ」

「それでもだよ。嬉しいことには変わりないんだし」

そういうてあおいちゃんは僕に笑いかけてくる。

その表情にちょっとドキッとしてしまつた。

「そ、そう言つてくれるところつとも嬉しいよ」

顔が熱い。

視線も自然と逸らしてしまう。

でも、同時にずっと見ていたいという気持ちも押し寄せてくる。

それに加え、この笑顔を誰にも見せたくないなんていうおこがましい独占欲がふつふつと湧いてきた。

そういうつた感情が頭の中でぐるぐると巡り、やがて一つの結論にたどり着いた。

「あおい、司。ちょっと助けてくれ〜」

蘭の方を見ると、いちごちゃんが蘭に抱き着いて離れないようだ。ただ、蘭も本気で嫌がつてているというわけでもないみたいだが、ちょっと苦しそうだ。

「仕方ない、助けに行くか」

「そうだね。こらー、いちごー！」

あおいちゃんと一緒にいちごちゃんと蘭の所へ向かう。

向かいながらちらりとあおいちゃんを盗み見ると、やつぱり笑つていた。

そして改めて思う。

僕はあおいちゃんのことが好きなのかもしれない、と。

△▼△

その翌日、蘭は美月さんとかえでちゃんと共にTristarとし

て活動するため、しばらく校外の施設に泊まり込むことになった。

なんでも、正式なメンバーでステージに立つための追い込みをする

そうだ。

そして、今はちょうどその見送りに行つてきたばかりだ。

あおいちゃんといちごちゃんも一緒に見送りをした。

3人ともつい感極まって泣いちやつてたし、やつぱり仲がいいんだ  
なあ。

そんなことを考えていると、ジョニー先生が僕ら3人に向かって  
やつてきた。

「おお、スター宮たち！ 学園マザーがお呼びだぜ！」

「私たちを？」

「何かあるんですか？」

理由を聞かれたジョニー先生は焦りながら返事をする。

「何だつたか忘れちまつたんだが、とにかくお前たち3人（傍点）を呼  
んでいる。早く行つてやつてくれ」

案の定、理由は忘れてしまつていてるようだ。

悪気はないんだろうけどなあ……。

つて3人？

「3人つて、僕もですか？」

「そうだ。スター宮と霧矢ハニーと飯島の3人だ」

僕が呼ばれるだけとか、いちごちゃんとあおいちゃんだけ、とかな  
ら理解できる。

でも、僕もひつくるめて3人つていうのはちょっと想像できない。  
学園長はいつたい何を考えているんだろう。

「よし、それじゃあ3人でゴー！」

そして僕はわずかな疑問を抱きつつ、いちごちゃんに連れられて織  
姫学園長の所へむかう。

△▼△

「「失礼します」」

「いらっしゃい、3人とも。待つてたわよ」

学園長に促され、横一列に並んで立つ。

そして、学園長は僕らを見渡して一言。

「その表情からして、ジョニー先生は内容を伝えていないようね」  
やつぱりか、とでも言うような表情になる。

釣られて僕たちも苦笑いをする。

「それなら、改めて私が用件を伝えるわ。まず、星宮と霧矢にはユニットを組んでもらいたいの。そして、飯島にはそのマネージャーを任せたいと思っているの」

「マネージャー……？」

「ええ。でもそんなに大袈裟に受け取る必要はないわよ。マネージャーといつてもユニット活動が初めてな一人をサポートする程度でいいの」

「でも、それくらいなら僕はいなくても構わないんじゃないでしょうか? この2人は非常に優秀ですし」

「そうね。でも、マネージャー業と併せてあなたに音楽業界とのつながり、要はコネを作つてほしいと思っているの」

「コネ、ですか」

「ええ。なぜだかわかる?」

「申し訳ないですが、全く」

学園長の思惑が全く分からぬ。

「あなたを、このまま演技一筋にさせるのがもつたいないと思ったの。普段のレッスンの様子から、あなたは歌もダンスも披露できるレベルにあると聞いているわ。だから、星宮達のユニットを機に考えてみたの。学園としては前代未聞かもしれないけれどね」

「確かに前代未聞ですね。でも、改めて考えると学園長の申し出は非常にありがとうございます」

確かに、これからのことを見据えると学園長の提案は物凄くありがたい。

でも、どうしてマネージャーなのか……。

「ですが、どうしてマネージャーなのでしょうか……」

「うちの学校は今までセルフマネージメントをさせていたけど、これからのことを見据えてのお試しがしたかったの。それあなたに任

せようかと」

「なるほど、確かにそういう学園も見られだしましたからね」  
理由に納得した僕は、腹をくくつて挑むことにした。

「わかりました。マネージャーの件、承りました」

「ありがとうございます。それじゃあさっそく明日からのよろしくね」

それから学園長とこれからの方針をまとめ、二人とともに帰りながら内容を伝えたのだつた。

## S O l e i l 始動！

マネージャーもどきを始めて数日。

マネージャー業つて思つっていたよりも難しい。

学外で練習の場所を押さえる時はもちろん、ユニット結成時のメディアの方々への広報までと、なかなか仕事の幅が広かつた。

本業の人たちはすごいな、なんて思いながらレッスン室の端で一息ついていると、ドリンクを片手にあおいやんがやつてきた。

「お疲れ、司くん」

「そつちこソレッスンお疲れさま」

あおいちゃんからボトルを受け取り、中身をあおる。

その横で、あおいちゃんも腰掛ける。

「にしても、会見の時はすぐかつたよねー」

「そうだつたな。なぜか二人じゃなくて僕に対しての質問が多かつたけど」

取材に来たメディアの方々はどこから聞いたのか、僕がマネージャーをするという話をすでに耳にしていて、それについての言及がすさまじかつたのだ。

会見が終わつたころにはなぜか僕だけがヘトヘトという訳の分からぬ状態になつていた。

「まあ、普通はアイドルがマネージャー業をするつて聞いたらみんな驚くからね」

「それでももう少し手加減してほしかつたな……」

「あははは……」

僕が遠い目をしているのを見ると、あおいちゃんもそれには苦笑いだつた。

そうやつて少し緩い時間を過ごしていると、言わなければならぬことを思い出した。

「そうだつた、二人に言わなきやいけないことがあつたんだ！」

「何か大事なこと？」

少し離れていたところでクールダウンをしていたいちごちゃんが

言つた。

「とても大事なことだ」

「まさか、ファーストライブが決まつたの?!」

「そう! ユニットとしての初めてのライブだ」

「わーい!」

ユニットとしての初めてのライブだ。

内容はまだこれから詰めていく必要があるけれども、こうして二人に伝えられたのはすごくうれしい。

これもマネージャー冥利に尽きる、つてものかな。

それから、今の段階で決まつているライブの内容を二人に伝えながらレッスン室を後にし、各自の寮へ戻つて行つた。



「ちよつと今日のあおいちやん、距離が近くなかつたか?」

レッスンの時のことを思い出し、自室でひとりごちる。

あおいちやんが好きだと自覚して時々そういう考えに陥ることがある。

「僕があおいちやんのことを意識しすぎているのかなあ」

でも、あおいちやんのことが好きなのは事実。

それに、好きな人のことが気になるのは当然のこと。

「あおいちやんは僕のことをどう思つてくれているんだろう」

どこか悶々としながら、眠りについた。



日は巡つてファーストライブの日。

「なんで僕が緊張してるんだろう……」

「本当に緊張してるね」

いちごちゃんは僕の肩をつついてそう言う。

朝から胸騒ぎがするのが原因だろう。

「とにかく、一人が緊張してないようで良かつた」

「まあ、わかりやすく緊張している人がいるとかえつてこつちは緊張しないね」

あははと苦笑しながらもリラックスしたあおいちやんが言う。

外をふと眺めると多くの人が集まりだしていることが確認できた。時計を見ると開始の時間になりかけていた。

「そろそろ時間みたいだね」

「じゃあ、私たちはステージに行つてくるね」

「うん、いつてらっしゃい」

僕は一人をステージに見送る。

それと同時にアイカツフォンに連絡が入つた。

「やつぱりか……」

蘭からの連絡だった。

「なんだかんだ、二人と一緒にいることが良かつたんだな」

2人が編入してきてからのことと思い出し、少し笑みがこぼれる。

僕は通りへ向かい、蘭を迎えに行つた。

「蘭のおかげであおいちやんと出会えたんだ。そのお礼みたいなものさ」



蘭の突然の登場にみんなが驚く。

もちろんあおいちやんといちごちゃんも。

後から、何で僕だけ驚かなかつたのか問い合わせられたのは別の話。とはいえるが驚こうが今日はステージをしないといけない。で、ステージはどうするの？」

「私たちには蘭のドレスは用意していないよ」

僕はあおいちやんといちごちゃんの問い合わせに答える。

「最悪の事態を考え、用意はしていたよ」

蘭にアイカツカードを渡す。

「貸し一つね」

「はいはい。とりあえず感謝はしどく」

カードを受け取ると、蘭はいつも通りの強気な表情に戻つた。

「とりあえず、ドレスの話はあとからするから今はステージだ。3人で楽しくステージをやつてきて」

笑顔で3人を送り出し、僕は観客席に紛れ込む。

そこで見たステージはとても記念すべきステージになつた。

△▼△

「で、話つてなんだ？」

「その、相談というかお願いしたいことがあつてね」

ファーストライブの数日後、僕はさつそく借りを返してもらいたく蘭のものを訪ねた。

「お願い、ねえ。司にしては珍しいじやん。で、その内容は？」

「えーっとだな……」

内容を口に出そうとするが、つかえたように言葉が出ない。

「おいおい、いつたい何を頼むつもりなんだよ……」

何を依頼されるかたまつたものではない蘭は、軽くうつむく。さすがに僕もこのままというわけにもいかず、ようやく口にすることができた。

「あおいちゃんにさ、僕のことはどう思つているのか聞いてほしくて……」

「は？ あおいに？」

想像の斜め上の質問が飛んできた蘭は、拍子抜けしたような顔で尋ね返してきた。

「この際だから全部吐くけど、僕、あおいちゃんが好きなんだ」

「……うつすらと感じてはいたけど、本当にそうだつたのか」

「そんなにわかりやすかつた？」

「いや、お前と付き合いがそれなりにあつたから、なんとなくそんな気がするなつて」

その言葉に少し安心する。

「そつか。で、話を戻すよ。最近、あおいちゃんとの距離が近く感じてさ。もし、これが僕の勘違いとかだつたらいいんだけど。いや、よくはないな」

「確かに、この前の司とあおいの距離はだいぶ近かつたな」

「やつぱりか。とりあえず、頼めるか？」

「ああ。さりげなく聞いとくよ」

こうやつて人に聞き出してもらうのもいいものではないけど、今のこの関係を壊したくない。

せめて、ユニット活動の間、この思いを抑え込めればいいのだ。

## 束の間のお休み

↓ side 蘭 ↓

司にはああ言つたものの、あおいから聞き出す気はない。

こういうものは二人でどうにかするものだと思う。

……とは言うものの、個人的な想いとしては気になる。

今まで浮ついた話題の無かつたあの司が恋バナだなんて未だに信じられない。

人の恋路をじやますると馬に蹴られるとか言うけど、これはむしろ伝えた方が馬に蹴られそうだし。

ただ、司がむやみに人の気持ちを聞き出そうとしないのに、今回こうなった理由が気になる。

(とりあえずあおいに聞くだけ聞いて、司に伝えるかどうかは後回しにするかなあ)

思つていたよりも難しい問題かもしねれない。

△▼△

おかげさまでソレイユの人気はどんどん上がつていき、ライブの数もそれなりに多くなってきた。

夏の暑さが本格的になつてきたこともあり、3人とも疲れが出てきていた。

そんな中、司が

「明日から2日、完全に予定を空けておいた。どこか温泉でも行つてリフレッシュして来い」

と唐突に休暇をくれた。

あおいといちごの二人は目を輝かせていた。

私ももちろんうれしかつたが、なんとなく司から頼まれていたことを思い出して少し苦笑気味になつてしまふ。

そして急ぎよ1泊2日の温泉旅行に出発することになつた。

思えば、トライスターの選抜試験の前に取つた休暇では行けてなかつたんだつけ。

寄り道をしつつも目的の旅館に着き、ゆっくりと入浴と食事を済ま

してあとは寝るだけとなつた。

ただ、こういうところでは寝る前にいろいろと話し込んでしまうもので、おしゃべりに花が咲いた。

「そういうえばみんなって好きな人つているの？」

あおいが唐突に話題を恋バナへと変えた。

國らうも聞きたかつたことが聞き出せるみたいだ。

「私はまだかんがえたことなかつたなー」

いちごはそういうえばそんなものあつたな、とでもいうような表情で答える。

「私は……まだいないな」

私も改めて考えてみると、そんな人はいなかつた。

そもそも一番接する男子が司だ。

ただ、司に感じているのは恋心なんかではないのは確実だ。

「そういうあおいはどうなんだ？」

「私はね。その……」

あおいは顔を赤らめ、ややうつむく。

それにいちごは食い気味に尋ねる。

「あおいに好きな人がいるの?!」

恥ずかしそうに眼を逸らしながらも、首を縦にふる。

「それで、ね。少し相談があつたの」「相談か……。

おかしいな。

既視感しか感じないんだけど。

「あおいの相談ならなんでも聞くよ」

「さすがに私もここまで来て話に乗らないわけにはいかないからな」

「二人とも、ありがとう！」

感情が爆発したのか、あおいは私たちに抱き着いてくる。

まあ、いつものことだから受け入れるけど。

そして、居住まいを正したあおいは真剣な面持ちで話し始めた。

「まず、私が好きな人を言うね。たぶんそうしないと始まらないし

……」

やつぱり恥ずかしいのか、あおいは「えっと」とか「あの」と繰り返し咳く。

そこで私が聞き出して手助けをしようと思った矢先、あおいは口を開いた。

「私は司くんが好き」

……薄々感じてはいたけど、やつぱりか。  
もうこいつら付き合えばいいのに。

「ちょっと、蘭聞いてる?!」

「聞いてた聞いてた。予想通り過ぎて驚かなかつたけどな」  
いちごの方を見ると、うつすらと苦笑いを浮かべていた。  
たぶんいちごも薄々感じてたんだろうな。

「もう、私がせっかく好きな人を言つたつていうのに！」

さすがのあおいも少しお怒り気味だ。  
揶揄うのもこれくらいにしておかないと。

「ごめんごめん。悪かった。お詫びといつてはなんだけど、司のことならどんどん聞いてよ」

あおいにそう言うと、さつきのお怒りの表情はどこへやら、また少し顔を赤らめた。

「じゃ、じゃあさ。いま司くんつて好きな人つているの……？」

あ、これって言つていいものなのかな？

でも、今更引き返すのもあおいに申し訳ない。

少し考えた挙句、私は言つた。

「司には、今好きな人がいるみたいだ」

「えつ……？」

もちろんその言葉にあおいは軽くショックを受ける。

「ただ、その相手には自分の思いを知られていないみたいなんだ。加えて、私たちがユニット活動している間はマネージャー業に専念したいらっしゃいとも言つてた」

「つてことは？」

「あおいにもまだチャンスはあるつてことだ」

嘘は言つていないが、本当のことでもないことに少し心が痛む。

でも、司と互いにこのS o l e-i l を優先したいということを考えた結果、こうすることが大切だと感じた。

お互いが思いを伝えあつて納得がいくなら話は変わるが、今回は直接話すわけではないからこういう結論を選択した。

だから、司にもぼかして伝えるつもりではある。

「じゃあ、私が素直に思いを伝えれば」

「司にも思いが伝わるかもな」

あおいの表情が一転して笑顔になる。

「よかつたね、あおい！」

「うん！」

喜びのあまり、あおいはいちごに抱き着く。

「ねえねえ、あおいつて司くんのどこが好きになつたの？」

「えーっとね、まずは——」

さつきまでの動搖が嘘かのようにしゃべりだすあおい。

「つてちょっと待て。それ長くなるやつだろ！」

……さつきとくつつけよ、二人とも。

## STAR☆ANIS結成

3人が休暇を取っているころ、司は美月さんのマネージャーである月影さんに呼ばれ、とあるカフェに呼ばれていた。

「单刀直入に言うわ。ソレイユとトライスターで今年の夏のみの限定ユニットを組みたいの」

そしてとてつもなく大きな話が時速160キロでど真ん中に投げ込まれた。

「それに加えてのツアードですか」

「そう。学園長と美月の提案でね」

こんな大きな話を振るのはやつぱり美月さんかー。

月影さんが出てくる時点で察してはいたけど、とんでもない話を振ってきたなあ。

「ただ、ソレイユのマネージャーである君の意見を聞いてから、ということにはなつているけれども」

「つまり、僕の意見次第で決まるよ」

「そういうことになるわね」

……僕の責任重すぎやしないか？

でも今は僕がマネージャーである以上、僕が決めるしかない。

数秒の沈黙の後、

「わかりました。まずユニットの件ですが、承りました」

「話が早くて助かるわ」

「ええ。こちらも3人が美月さんとともに行動することで、成長していくと思いましたので」

美月さんと一緒にレッスンをしたりすることで、3人のスキルアップにつながるはずだ。

そう考えると断る理由はない。

「ただ、一つ伺いたいことがあるのですが」

「何かしら？」

「ユニットのマネージメントは誰が担当するのですか？」

「今のところ、私が主となつてマネジメントを行うことにしている

わ

それもそうだ。

美月さんが主となつていて、マネージメントに求められるレベルもそれに応じたものが必要だろう。

そもそも僕なんかでは足元にも及ばないし。

「わかりました。つまりはソレイユの3人をそちらにお預けするという形でしようか」

「簡単に言えばそうなるわ」

納得はしているが、3人のマネージメントが月影さんの手に渡ることに少し寂しさを感じる。

でも、3人のこれからを思えば仕方のないことだろう。

「わかりました。それでは3人のことをよろしくお願ひします」

「ええ、こちらこそよろしく頼むわ」

それから、しばらく今後の引継ぎについて話してお開きとなつた。帰り道、頭の中に浮かぶのはあおいちゃんのことだつた。

あおいちゃんと会える時間が減つてしまふなあ……。

マネージャーとしての意思を優先している以上これが最良の選択なはずだけれど、寂しいものは寂しい。

「でも、この夏の間は想いを我慢するつて決めたんだ」

今生の別れというわけではないんだし。

△▼△

休暇明けの3人に、新たなユニット「STAR☆ANIS」の結成

とツアーライブについて伝えた。

「トライスターとの合同ユニット！つまりは美月さんと同じステージに立てるっていうことだよね？」

「落ち着け、あおい」

「今のあおいちゃんに落ち着けっていうのは無理な話だろうよ」

なんたつて、あこがれの美月さんから直々に指名されたのだ。

あおいちゃんが喜ばないはずがない。

「これからの大まかな予定を伝えるから、よく聞いておいてくれよ」

「はーい！」

あおいちゃんといちごちゃんが元気な声で返事をする。

蘭はそれを少し呆れた表情で見ているが。

「まず、さつそくだけど明日はメディアの方々にスター・アニス結成の報告の会見だ」

「明日、つて早すぎないか!?

「話が急だつたからな。それに、この予定を立てたのは月影さんだから、文句があればそつちに言つてくれ」

「月影さんかあ。それは文句が言えないな」

「だろう? あとちなみに、トライスターは別件で同席しないみたいだから3人でがんばつてね」

「な、なんと……」

あまりの情報量に口調が変わるあおいちゃん。

僕ですら最初に聞いた時に驚いたからしようがない。

「すでに決まつたことだから、すまないけど頑張つてくれ」

でも、この3人ならこなせると思つてている。

ソレイユとして活動して、着実に実力はつけてきているんだ。

「それじゃあ、明日からよろしく頼むよ」



♪ side あおい♪

会見の会場に着いたけど、司くんの姿が見えない。

どうしたんだろう。

司くんに何かあつたのかな?

「よし、3人ともそろつたな。これから会見だ。頼むぞ」

月影さんが私たちに向けて言う。

司くんは……?

「あの、月影さん!」

「どうした、霧矢。もう会見の時間だぞ」

「司くんはどうしたんですか?」

「聞いていなかつたのか? あいつはしばらくマネージャー業を停止することになつていてはずだぞ」

「司くんがマネージャーじゃない……?」

つまり司くんに会えないの……？

「この様子だと、あいつは伝えていなかつたみたいだな。霧矢、後で説明してやるから会見して来い」

「わかりました」

頭が追いついていないけど、会見はやらなきや。

私はアイドルだから。



会見は無事に終えた。

その時に、マネージメントはすべて月影さんが行うと聞いた。  
どうして司くんは私たちに伝えなかつたんだろう。

「飯島が3人に伝えなかつた理由は知らんが、マネージャーを降りるのはこれからツアーで移動した先の宿でのトラブルを防ぐのが主な理由だ」

「司くんはそんな人じやない！」

「それはわかつている。だがお前たちはまだ学生で、アイドルという体面もあるんだ。その辺りをわかつてくれ」  
頭ではわかつている。

でも、会えないと寂しい。

司くんにアタックして意識してもらおうと思つてもいたんだ。

「会いたいなあ」

このツアーの間、私は耐えられるのだろうか。

ツアーのあとに、そして

「 Side あおい」

ツアー前の合同トレーニングを終え、とうとうツアーが始まつた。  
あの美月さんと同じステージ立てるなんて、穏やかじやない！んだ  
けど……。

「あおい。なんかずーっと外見てるけど、どうしたの？」

「あ、いちご。なんでもないよ」

「ほんとにー？」

「ほんとほんと」

嘘だ。

本当は司くんがいなくて寂しい。

まるで生殺しだ。

私が司くんのことが好きなんだとわかつたかと思つたら、その好きな人と会えなくなるなんて。

今すぐ司くんと話したい。

電話でもいい。

いや、やつぱり直接会つて話したい！

「あおいー。そろそろスタンバイするぞー」

「わかつたー」

蘭に呼ばれ、私は控室へと戻つて行く。

だつて私はアイドルだもん。

まずはみんなに笑顔を届けることが大事だから。

「 Side out」

忙しい。

アイカツを始めてからここまで忙しかつたことはない、とまではい  
かないが忙しい。

学園長がコネづくりになるとは言つていたが、ここまでか??

ただ実際に来た仕事は、歌を歌つてみないかというものが多かつ  
た。

持ち歌がないわけではないのだが、如何せんメインが演技だったの

もあつて多くない。

せいぜいがドラマのタイアップ曲だぞ？

いつたいどうしてここまで仕事が来るようになつたのか。

「これはキツツいなあ……」

でも、あおいちやんたちもツアー頑張ってるんだ。

ボイトレももう少し頑張ろう。

こんなことで弱音を吐くようじや、あおいちやんに笑われちゃうよ。

自然とあおいちやんとのトーク画面を開こうとする手を止める。

あおいちやんと話したいけど、今は我慢だ。

「よしつ、休憩終わり！」

あおいちやんと会つて話したいという思いを振り切るように、足早にレッスンルームへ向かつた。

△▼△

あおいちやんたちのユニットSTAR☆ANISのツアーも最終日となつた。

だが、忙しさのあまりいまだにライブに行けていない。

いくつかの会場でのチケットをもらつてはいるのだが、都合が合わずに今の今まですべて使う機会もないまま、引き出しの中になまわれている。

そろそろ罰が当たるのではないだろうか。

「あおいちゃんがチケットを送つてくれるけど、ここまで無駄にする」と申し訳ないなあ

「じゃあ俺が行つてやろうか？」

「なんだ海東。聞いてたのか」

撮影の合間にベンチで一休みしている僕の背中から、唐突に海東が現れる。

「いらないならもらつてやるよ」

「そんなことは誰も言つてないだろ」

「じゃあ行かないのか？」

「それは……」

行きたいのはやまやまだが、仕事を放りだすわけにもいかないし  
……。

「どうせここから先のシーンでお前はほとんど出ないんだろう？」

「ん？ それはそうだけど、ワンカットあつたはずだよな」

「ワンカットつていつても、お前はほとんど後ろ向きで映るだけじゃないか」

ん？

「……遠回しに行つて来いつて言つてる？」

「……はあ。せつかくカツコつけてぼかして言つたのに」

ちよつとバカにはしたけれども、やっぱり海東は僕の親友だ。

「わかつた。今のは聞かなかつたことにしどく」

「うつせえ、さつさと行け」

「はいはい」

お言葉に甘えて、ここはライブに行かせてもらおう。

△▼△

会場は人で溢れていた。

ツアーの最終日ともなれば、これだけの人が集まるのもうなずける。

あおいちゃんからもらったチケットで中に入る。

あおいちゃんのはからいで、関係者席で見られるようだ。

関係者席に行くと、学園長とジョニー先生、それにいちごちゃんの家族も来ているのが見えた。

関係者だから控室にも行けるのだが、まだ行つていない。  
だって、行つてしまつたらここまで我慢してきた意味がなくなつちやうから。

あおいちゃんからも連絡がなかつたということは、相当ツアーに向けて意識を合わせていたはずだ。

その邪魔をしようものなら、今日ここにいるすべてのファンに失礼だし、あおいちゃん自身にも失礼だ。

……時間だ。

ステージが始まる。

△▼△

ステージは圧巻としか言えなかつた。  
センターなんてものはなく、みんなが一様に輝いていた。  
でもみんなが輝いている中で、ぼくにはあおいちゃんが一際輝いて  
いるように見えた。

もちろん意識しすぎていてるだけかも知れないけど。  
公演も終わり、僕は足早に控室に向かう。  
一刻も早くあおいちゃんと会うためだ。  
ずっと抑えていたこの思いを、今日こそあおいちゃんと伝えるん  
だ。

息が上がる。

走つたせいなのか、緊張からなのかわからぬ。  
ああ、じれつたい。

控室がこれほどまで遠く感じたことはない。

最後の曲がり角を過ぎると、ステージを終えて談笑しながら8人が  
やつてくる。

その中にあおいちゃんを見つけた。

あおいちゃんもこちらに気づき、やつてくる。  
まるで、映画のワンシーンかのような感覚だ。  
一步一歩近づくたびに鼓動が高鳴る。

あおいちゃんの瞳に光るものを見つける。

つて、あおいちゃんが泣いて……？

胸に飛び込んでくるあおいちゃんを抱きしめる。

「司くんっ……！」

「あおい、ちゃん……」

あおいちゃんが落ち着くまで、抱きしめる。

……なんか周りからの目が異様に暖かいけど、今は構つていられな  
い。

「……落ち着いた？」

「うん。ごめんね、急に」

「いいや、大丈夫だよ」

あおいちゃんが落ち着くと、お互に言わずに離れて向きなおる。

「あおいちゃん」

「何？ 司くん」

「僕はあおいちゃんが好きだ」

「うん。さつきのでだいぶわかっちゃつた」

「だよね」

「つてことは、私の気持ちもわかつてるよね？」

「もちろん。でも、あおいちゃんの口からききたいな」

「そうだよね……」

あおいちゃんは気持ちを整えるように、深呼吸する。

「私も司くんが好き」

「さつきのでわかつてた」

「あー、いじわるー。わかつてたならいいじゃーん」

「それとこれとは話が別だよ」

それから、学園長がやってきて咳ばらいをするまでずっと抱き合っていた。

## 悲しみは一時のもの

僕とあおいちゃんは交際を始めることになった。  
ただし、学園長からの条件付きで。

なぜかつて？

学園長に抱き合っているところを見られちゃつたからね……。

条件としては二つ。

一つは、僕とあおいちゃんが成人になるまで公表しないこと。  
もう一つが、スキヤンダルとして記事に取り上げられることがない  
よう、外での振る舞いに気を付けること。

当たり前といえば当たり前だが、僕たちはまだ学生だ。  
だからこそ、気を付けなければいけないことだと思う。

それはそれとして、スター・ライト・クイーンカップが開催された。  
その最中、いちごちゃんがアメリカに行くことが決定した。

「司くん。私ね、いちごがアメリカに行くって知ったとき、応援してる  
とは言つたけど、やっぱり寂しいよ……」

「いちごちゃんはあおいちゃんにここまで思つてもらえるなんて、幸  
せものだね」

「だつて、親友でファン1号だもん」

僕はいちごちゃんの代わりになれるわけでもない。

だから、僕はこうやつてあおいちゃんの寂しさを紛らわせてあげる  
ことしかできない。

「いちごちゃんはアイカツをやめるわけじゃないんだ。だから、必ず  
またここに戻つてくるよ」  
「それはそうだけど……」

「言うのは簡単だけど、やっぱり本人にはつらいものがあるか……。  
でも、僕としてはあおいちゃんが悲しんでいるのはつらい。  
「そうだ。じゃあ、こうしよう」

「？」

あおいちゃんは首をかしげる。

「寂しいときはいつでも僕に連絡してよ。僕じやいちごちゃんの穴を

埋められるとは思わないけど、多少紛らわせることができるはずだからさ」「司くん……」

「まあ、これでもあおいちゃんの彼氏なんだから、見栄を張らせてほしいなって」

僕の言葉に、あおいちゃんは少し呆けたような表情をしたあと、ほえみながら僕の胸に飛び込んできた。

「いつでもいいんだよね」

「うん。そうだよ」

「ねてるときも?」

「頑張つて起きるよ」

「お仕事のときも?」

「うまいことやるさ」

何度もやり取りしたあと、緊張の糸が緩んだのか、胸の中からすすり泣く声が聞こえてきた。

僕は何も言わず、背中をさすつて上げることしかできなかつた。



来るスター・ライト・クイーンカップの日。

いちごちゃんと美月さんは最高のパフォーマンスを見せ、僅差で美月さんがスター・ライト・クイーンの座を維持した。

いちごちゃんは美月さんからもらつたスペシャルステージも終え、空港へと移動した。

それにあおいちゃんと蘭も付き添い、僕もついていくこととなつた。

学校から空港に向かうまで、ずっといちごちゃんとあおいちゃんは手をつないだまま。

僕と蘭はそれを黙つて見ていることしかできなかつた。  
そして気づけば、出発ゲートの前に来ていた。

「もういいんじゃないか、我慢しなくて?」

蘭のその一言に、あおいちゃんの目には涙が浮かび、いちごちゃんを抱きしめる。

「そう言う蘭だつてどうなんだ」

「なつ！」

蘭の目にも涙が浮かんでいる。

「そういう司くんも人のことは言えないみたいだね」「え？」

あおいちゃんに言われ、知らずに涙を流していたことに気づく。  
「全く、みんなして泣いてるじゃない」

「そりやあ、だつて……」

後ろから聞こえた声に振り返ると、ユリカちゃんとかえでちゃん、  
おとめちゃんときらちゃんも見送りに来てくれていた。

いちごちゃんも驚いた様子だ。

「みんな、忙しいのに来てくれたんだ」

「だつて、私たちは友達でしよう？」

「大事な大事な友達です！」

友達として見送りに来たみんなに応えるように、そして名残惜しむ  
かのように、いちごちゃんはみんなと別れのハグをした。

「みんな大好きなアイドルで、大好きな友達だよ」

別れ際に、あおいちゃんはいちごちゃんに封筒を手渡す。

「困つたときじやないと開けちゃだめだからね」

「うん。ありがとう、あおい」

ついにいちごちゃんはアメリカへと旅立つていった。

あおいちゃんは、どこか吹っ切れたような晴れやかな顔でいちご

ちゃんの乗った飛行機を見つめていた。

泣くだけ泣いて、気持ちの切り替えができるのだろうか。

「ねえ、司くん。いや、司」

「お、おう？」

急な呼び捨てへの変化に戸惑う僕。

「これを機に、あおいって呼んでよ」

「……うん。わかつたよ、あおい」

どうして急に、という思いがめぐらながらも、あおいに応える。

後から聞けば、蘭への嫉妬心が唐突に湧いたそうだ。

名前の呼び方一つで、と思わなくもなかつたが、今のあおいにとつてはとても大切なものだろう。

失つたぬくもりを埋めるように、僕とあおいは手をつなぎ、学園へと戻るのであつた。

## “特別編” あおいの誕生日①

明日はあおいの誕生日だ。

それも付き合い始めてから最初の。

……正直言つて何をしたらいいのかわからない。

「そんなわけであおいの親友であり、S o l e i l のユニットを組んでいる蘭さんといちごさんに来ていただきました」

ドンドンパフパフ／＼

「なにが『そんなわけで』だよ。唐突すぎるぞ」

「唐突なのは申し訳ない。でも緊急事態だから許して」

少し上目遣いで蘭に返答すると、頭をシバかれた。

「いたい……」

「あのなあ、こつちは真面目に相談に乗るつもりだつたんだぞ」「蘭がそんなことを言つてくるが、本気でシバくことはないだろうに。

「よしよーし、痛いの痛いの飛んでいけー」

いちごがシバかれたところをさすってくれる。

はつ!? 天使か!?

「まあ、とりあえず本題に戻ろう」

「逸らしたのはお前だろうが……」

「今までにはいちごと蘭の2人で祝うことが多かつたんだよね？」

「スルーか……。まあ、基本的にはそうだな」

「それでどんなことやつてた?」

「ちよつとした誕生日パーティーぐらい、だつたよね」

「そうだったな。だからあまり大したことはしてないんだ」

意外な気もしたが、今の人気を考えると妥当な気がした。

それだけに、今回休暇を取つたということは期待がかかる。

「そうか……。うーん、何をしてあげたら喜んでくれるかなあ」「悩ましい……。

「はあ。しようがないから相談に乗つてやるか。このままだと心配で仕方ない」

「司くんって意外と抜けてるしねー」

それから、あおいが仕事から戻るまで相談に乗つてもらうのであった。



誕生日当日。

司とあおいは街の公園で待ち合わせをすることになつていた。

「おまたせ、待つた？」

「いや、今来たどこだよ」

「そつか。フフフ」

ふと見えたあおいの笑顔に、思わず見とれてしまう。

「ほら、行くよ。今日のわたしはやりたいことがたくさんあるんだから」

「ああ、わかつた」

そして街へとくりだしていく。



まず、あおいとウインドウショッピングをすることにした。

気に入つた店があれば立ち寄り、試着をしたりして店を冷やかして回つていた。

「なあ、ちょっとここ見ていいかないか？」

「ここ？」

僕が指したのはアクセサリーショップ。

「うん。ちょっと見たいものがあつてね」

店に入り、目当てのものを探しにいく。

ただ、あおいには申し訳ないけども見せられないものであるため、見られないように他の店員さんに気をそらしてもらつている。

「こちらでよろしかつたでしようか」

「はい、お願ひします」

目的のものを受け取り、バッグの中にしまう。

あおいの相手をしてもらつていた店員さんもこちらに気づき、あおいを解放（？）した。

「なんか、あの店員さんの押しのがすこかつたんだけど……」

「あはは、それは大変だ  
「笑いごとじゃなーいー」



ウインドウショッピングをある程度すまし、映画を見にいくことになった。

なんでも、あおいが今注目しているアイドルが主演をやっているものらしい。

「これは穩やかじやない！」

「落ち着け。まだ始まつてすらないんだぞ」

おかげであおいのテンションが爆上り中だ。

手をつないで歩いてはいるものの、あおいが先を急ぐせいで、まるで元気な犬とリードに見えて仕方がない。

おまけに、目を輝かせてあちこちを見ているため、サイドテールがしつぽに見えてくる始末。

「……」

あきれつつも、そのかわいらしさに胸を打たれるのであつた。

「ほら、もう入場開始だよ」

「はいはい。それじゃあ行こうか」



「やつぱり、穩やかじやなかつた」

「そうだな。あの子いい演技してた。あおいが気にするのも分かるよ」

「でしょでしょ」

映画を見終え、感想を語り合いながら帰路につく。  
相変わらず、あおいは興奮しているみたいだけど。

「そういえば、僕たちが一緒になれたのも演技がきっかけだつたよね」「そうだつたね」

ふと思いついたようにつぶやいた一言をきっかけに、思い出話にも花が咲くことになった。



学園に帰り着いたはいいものの、お互寮には戻らず庭園の方へ向

かつた。

「……渡すもの、あるんでしょ」

「よく気づいてたな」

「ばれないようにしていたはずなんだけどなあ。」

「わたしの目をこまかすなんて百年早いですよ」

「そりやあまいつたなあ。隠し事の一つもできやしない」

「なに？隠したいものもあるの？」

「いや、そんなことないよ。でも、ちょっとだけ目を瞑っていてほしいかな」

「お安い御用ですよ」

あおいが目を瞑ったのを確認して、誕生日プレゼントとして用意していたネックレスを首にかけてあげた。

「目を開けてください」

あおいは目を開け、首にかかるネックレスを確認する。

「……なあ、あおい」

「うん？」

「そのネックレスの意味、分かってくれるか？」

「……うん。もちろん」

あおいの首に下がっているのは、赤と青のバラ。

一方は自身の想いを。

もう一方にはあおいの色を添えた。

「誕生日、おめでとう」

「うん、ありがとう」

「それと。これからもよろしくな」

「うん。こちらこそ」

そしてどちらともなく近づいていき、月に照られた影は一つになつた。

## “特別編” あおいの誕生日②

1月31日。

あおいの誕生日だつたが、今年は僕もあおいもお仕事が急きよ舞い込んできた。

お仕事が入るのは嬉しいんだけど、こういうときぐらいはなんとかならないものか、なんて数日前は二人して思っていた。

今年は大したことができないな、なんて諦めていたが、あおいは何か思いついたようで、目をキラキラさせながら僕へ言つたんだ。

「ねえ！温泉に行こうよ！」

「へ？温泉？」

あまりにも突拍子もない内容に、僕は変な声が出てしまつた。  
いや、だつて温泉つて答えは予想できないもん。

「そう。今回私たちの撮影の場所が結構近いじゃない？」

「そうだね。それで？」

「なんと程よい場所に温泉旅館があつたのですよ」

「おおっ！」

なるほど、だから温泉に行こうつて言つたのか。

「でも、お互ひ終わるのがそことこの時間になるけど……。まさか、泊まり？」

「イエス！せつかくだし、こういつたのもアリかなーつて」

まるでかえでちゃんのようにノリノリのイエスだつた。

でも、せつかくの誕生日なんだし、こういうのも悪くないか。

「いいね、それ！」

「じゃあ決まり！宿の予約は私がらしておくから！」

そう言つてあおいは足早に教室から去つて行つた。

あ、部屋はどうするんだろう。

完全に聞きそびれちゃつたなあ。

まあ、しつかり者のあおいのことだ。

流石に二部屋取るだろう。

僕たちはまだアイドルなわけだし。

一応、公認カツブルみたいに言われているけどもさ。  
……まさかあおいちやんに限つてそんなことはないはずだ。  
……ないよなあ。



そしてあつという間にあおいの誕生日。

僕たちは撮影を終えて、少し山際にある温泉旅館へと到着した。けつこうひつそりとたたずんでいて、芸能人がお忍びでやつてくるそうだ（あおい談）。

それに、芸能人が安心して泊まれるくらい従業員さんの口が堅いらしい。

「どう？いい場所でしょ」

「ほんとにいい場所だね。静かで、ゆっくりできそうだ」「でしょ？」

僕は雰囲気が気に入り、少し散策してみようと思つたけどあおいに止められた。

「日も落ちてきているから早く入ろうよ」

「そうだね」

1月末になつて日の入りが遅くなつたとはいえ、日が落ちると十分冷えるのもあつて散策を断念した。

あおいに連れられて館中のロビーに入る。

少し古風な感じがありつつも高級感の感じられる作りだ。

明かりも電球色でホツとする。

「それじやあ私はチエツクインしてくるから、ここで荷物番してもらつてもいいかな？」

「うん、いいよ」

僕はあおいの荷物を受け取つてロビーに設けられたソファーに腰掛ける。

あおいはカウンターにチエツクインしに行つた。

その間に、持つてきていた台本に軽く目を通す。

あおいからは、せつかく休みに来たのについて言われただけど、こ

ういう時こそ台本が頭に入つてくるっていうもんだ。

だからこれだけは止められないね。

そんなことを思つて台本に目を通してると、あおいが部屋の鍵を

持つてやつてきた。

「お待たせ。つてせつかくのオフに台本を読むなんて」

「いいじやないか。とは言うけど、今日はこれ以上読まないよ」

「せつかくのオフなんだもん。お仕事のことなんて忘れてゆつくりしようよ」

「そうだな」

僕は立ち上がりつて荷物を持ち、あおいについて部屋に行く。

部屋は畳張りの1・2畳程ある比較的こぢんまりとした部屋だ。

もつと広い部屋が多いらしいけど、あまり広すぎても落ち着かないからこれぐらいがちょうどいいもんだ。

その部屋に荷物を置いて早々、あおいが言つた。

「それじゃあ、まずは温泉に入ろう！」

「いきなりすぎやしませんかねえ、あおいさんや」

「うーん、そんなことは無いと思うけど。だつて、温泉に浸かつて少しゆっくりしてたらもう夕飯だよ？」

「そういうことか。温泉旅館初心者にそんな考えはなかつたなあ」

「つてなわけで、さつく温泉にGOだよ！」

そう言つてハイテンションで浴場へ向かうあおいに連れまいと僕もついて行つた。



入浴と食事を終えた僕らは正座で向かい合うことになつた。

その発端になつたのは布団だ。

一般的に部屋で食事を済ますと、仲居さんが食事を下げてくれ、そのまま布団の準備をしてくれる。

僕らが泊まつたところも、例に漏れずそつだつた。

仲居さんが布団を敷き始めて、そろそろどちらかが部屋を移るのかな、なんて思つていた。

そして気づけば仲居さんは布団を敷き終え、すでに退室していたみ

たいだ。

あつという間の作業の速さに驚いていると、どうしようもない違和感が襲ってきた。

「布団が、二つ……？」

目の前には丁寧に敷かれたであろう布団が、二組並んで鎮座していたのである。

「あ、あおい。布団が二つあるんだけど、これって」

「そ、そうだよ。司が考えているので間違いないよ」

つまり、フ ラグ回収二人が同室なのである。

そして僕は迷わずあおいを正座させた。

「あおいさんや。もとからこうするつもりだつたんで？」

「うん。だつて、私ももう今日で18だよ」

あおいの言わんとしていることはわかるけど。

「でも、僕たちはアイドルだぞ」

「わかってるよ。でも、それ以上に私は司のことが好きだから」

「……そつか」

あおいは、本当に僕のことを好きでいてくれているんだ。

だからこそ、もつと深くつながりたいって思つてくれているんだ。

そう思うと、急にとてもあおいのことが愛おしく感じてきた。

だから、思わず抱きしめた。

「ちよ、ちよつと司！」

「悪い、あおい。あおいが僕を求めてくれるつてことが嬉しくなつて」

あおいは急に僕が抱きしめたことに驚きつつも、満更ではなさそうだ。

しばらく一人で抱き合つて、自然と口づけをした。

今までで一番長く深いキスだった。

息が切れそうになりながらも、夢中でお互いを求めあう。

そして、ついに僕は耐えきれなくなつてあおいを布団に押し倒した。

「あおい、いいか？」

「うん、来て」

僕らは、アイドルである前に将来を見据えた恋人同士。  
だから今夜くらいはアイドルの仮面を脱いだつていいだろう。  
この思いだけはごまかすことなんてできないんだから。

## ツバサ／

### “特別篇” ツバサの誕生日

「なあ司。今日が何の日だ？」

ツバサが笑顔で詰め寄つてくる。

ただし、目が笑つていないので。

「申し訳ございません」

「そうじやない。今日は何の日だと言つているんだ」

「……ツバサの誕生日です」

その通り、今日はツバサの誕生日だ。

しかし、なぜこんなにもピリピリしているかというと。

「そうだ。で、忘れた言い訳は？」

僕が誕生日を忘れていました。

恋人の誕生日を忘れるとかいうポカをやらかし、今に至る。

「今更弁明などいたしません……」

「よし、わかった。それではおしおきタイムだ！」

今回のお仕置きはいつたい何をさせられるんだろう。

「おしおきの内容は何でしよう」

「そうだな……。まずは私の肩を揉んでくれ」

「肩もみ……ですか」

疑問に思わなくはないが、やらかした以上文句は言えない。

「ほら、早くしろ」

「はいっ！」

急いで肩もみを始める。

揉んでみると、以外にも凝つてているみたいだ。

まあ、S4としての仕事がなくなつて少し仕事が減つたと思つていたからな。

「んつ、なかなかいいぞ」

「それはどうも。意外とお客さんも肩が凝つていらっしゃるみたいで」

「仕事が思つていたよりも減らなかつたからな。それに、海外に行くことも考へて いるし」

「え？ それは初耳なんだけど」

「今まで隠してたからな」

突然のカミングアウトに驚くが、ツバサの行動力を考へるとどこか納得する自分がいた。

「しばらく会えない日が続くだろう？だからお前に祝つてもらいたいと思つていたのにこれだよ」

「それは申し訳ありませんでした」

ツバサがここまで言つてくる理由がわかつた。

それならば、精一杯奉仕をしなくては。

「お次は何をいたしましょう」

「次は膝枕だ」

「……これはお仕置きなのか？」

「私がお仕置きと言えばお仕置きだ」

疑問が残るが、この際関係ないだろう。

ツバサに満足してもらうことの方が大切だ。

「司になでられていると、やっぱり心が落ち着くな」

「それは結構なことで」

いつものツバサからは考えられないほど、柔く甘えたような声を出す。

「聞いたぞ。ヴィーナスアークに講師役で呼ばれるらしいな」

「もう知つてたのか」

「彼のことなんだ。知りたいに決まつているだろう？」

「そりやそうだ」

僕もツバサのことは何だつて知りたい。

でも、海外に行くことを知らせてなかつたのはずるいと思つた。

「あつちは女子校だと聞いたぞ。頼むから変な気は起こさないでくれよ」

「当たり前だろう。こんなにかわいい彼女がいるんだ」

その言葉に、ツバサが少しうつむいて頬を赤くしていた。

「あまりかわいいって言わないでくれ……」

「どうして？」

「言われ慣れてないから恥ずかしいんだよ……」

いつもクールに振る舞っているツバサとは思えない、かわいらしい理由だった。

「そういうところがかわいいんだよ」

「ツバサ!?」

さらに顔を赤くして悶えだした。

流石に僕も揶揄いすぎたと思い、ツバサが落ち着くまで頭をなでていた。

「なんでお仕置きをしている私がこんな目に」

「そりやあ、ツバサがかわ——」

「わー!! それ以上言うなー!!」

これ以上言わせまいとするツバサが、僕の口を封じに来た。

「うおおつ！」

そして、勢い余つて僕がツバサに押し倒される形になつた。

「……」

お互ひ、無言になり、じつと見つめ合う。

「もうお仕置きは終わりだ。だから、次は『褒美タイムだ』

高等部の寮は、一人に対して一部屋が割り振られる。

つまり、この部屋には僕とツバサしかいない。

「ツバサ」

「なんだ?」

「愛してる」

「私もだ」

ツバサが僕の上にうつぶせになる。

どちらのものかわからぬ心臓の高鳴りが聞こえる。

今の人一人は、真夏の太陽よりも熱く燃えていた。

## エルザ／

### “特別篇” エルザの誕生日

今日はエルザの誕生日。

仕事があつたこともあり、疲れをとるために少し早くパーティーから抜け、ネオヴィーナスアーク上の自室に戻つたのだった。

「なあエルザ、パーティーの方はいいのか？」

「パーティーよりも、あなたと一緒にの方がいいわ」

「だつて、今日はエルザの誕生日パーティーなんだぞ。主役がいなくてどうするんだ」

だが、主役であるエルザが部屋にやつてきたのだ。  
加えて、膝枕を要求している。

「主役がいなくたつてパーティーは楽しいものよ。この部屋に来ると  
きも、皆全く気にしていなかつたもの」

「そうだつたのか……」

恐らくみんなはエルザがここにいることをわかっているだろう。

エルザ自身は気にしないだろうが、僕が気にしてしまう。

「どうか、男の部屋にそう簡単に入つてもいいのか？」

「大丈夫よ、あなただもの。お母さまも分かつてくれるはずよ」

「え？ ユキエさんは僕とエルザの関係を知つているのか？」

まさか事態に驚く。

「言つてなかつたかしら？」

「聞いてないよ……」

エルザはまるで一度言つたかのような言い方だ。

まったく初耳なのだが。

「まあいいじやない。これも私のお見合いを防ぐためよ

「お見合い？ どうして急に」

「私が太陽のドレスを手に入れてからというもの、いろんなところからお見合いの話がやつてきたのよ」  
これもまた初耳。

お見合いか……。

「それは困るなあ」

「でしょう？だからお母さまに伝えて、もうお見合いの話が来ないようにしてもらつたの」

「それなら納得。だけど、僕の命が心配だなあ。変な人に狙われたりしそうなんだけど」

変なスキャンダルになつても困るし。

「大丈夫よ。このネオヴィーナスアークなら」

「確かに」

船の上なんだ。

ここほど安全なところはないだろう。

「それなら、今度ユキエさんにご挨拶をしに行かない。娘さんを僕にください、つてね」

「そうね。それくらい言つてくれないと、このエルザ・フォルテが認めるとに値しないわ」

「こりやあ手厳しい」

まだ未成年の僕らに『結婚』といつてもイメージはわからない。  
でも、いざれそそうなるのだろう。

「きっと、エルザはいい母親になれるんじやないかな」

「母親ね……。いざれはそうなるのでしょうか。でも、いい母親になんてなれるのかしら」

母親という言葉に、少し顔を暗くするエルザ。

いろいろと思うところがあるのだろう。

「なれるさ。なんたつてエルザはパーエクトだからね」  
もうエルザは人に甘えることができるんだ。

あの時のエルザとは違うのだ。

「司……」

それに、もしわからなければ僕も一緒になつて考える。

「エルザは、もう一人じゃないから」

「……そうね」

膝枕に横になつていたエルザが身を起こす。

「私はすでにパーエクト」

そして僕を見据える。

「でも、あなたがいるともつとパーエクトになれるの。だから、私についてきてくれるかしら？」

エルザが僕に手を伸ばす。

僕はその手をつかみながら答える。

「もちろん。どんなところでも」

僕がエルザの手を掴むと、エルザは強引に手を引いて僕を抱きとめる。

「それと、何か忘れていないかしら？」

そう言えばそうだ。

「誕生日おめでとう、エルザ」

それを聞くとエルザは不敵に笑う。

「結構なことね！」

「おまけ」

ドアの隙間からこつそりと覗く3人の影。

「なんだかぽかぽかしますね！」

アリアが二人の様子を見て言った。

「エルザがあんなに安心しているのを久々に見た気がする」

そう述べるのはレイだ。

ちよつと不満げなのは言つてはいけない。

「エルザ様、かわいい」

普段見ないエルザの態度に惹かれるきらら。

今はエルザに気づかれていないが、気づかれたらただでは済まないだろう。

それでも皆、エルザが安心して身を任せられる相手がいることに喜んでいるのだつた。

蘭 ✓

## “特別篇” 蘭の誕生日

蘭 side

今日は私の誕生日だ。

いつもは両親に祝つてもらつてた。

去年は学園で寮生活だから一人で過ごした。

だから、少し寂しかつた。

でも、今年は違う。

今年は、いちごにあおいに――、恋人になつた司もいるんだ。

その司が、今夜は珍しく私を呼び出している。

司なりに祝つてくれるんだろう。

今日は楽しい日になりそうだ。

side out

今日は蘭の誕生日だ。

いつも蘭に対するふざけた態度を取つてゐるけど、今日は真面目にやらないと。

じゃないと後で何をされるかたまつたもんじやない。（小文字）

何はともあれ、今日は盛大に祝わないとな。

「もしもし、いちご？・準備はどう？」

『準備万端だよ～』

それじやあ蘭を迎えに行くとしよう。

△▼△

「司、待つたか？」

「いや、今来たど～」

待ち合わせ場所の噴水に蘭がやつてきた。  
服装はあらかじめ言つておいたとおり制服だ。

そして蘭は僕の返事に対して少し顔をニヤつかせながら返す。  
「とか言つて。実は10分ぐらい前についてたんだろう？」

「それは言わないと約束だろう？」

「だつて司だぞ？」

「失礼だな。今日は眞面目にやつてんの」

普段と違う僕がおもしろいのか、クスクスと笑っている。

「さあ、時間だし行かないとな」

「どこに行くんだ？」

「それはまだ内緒」

「んー、司に言わるとなんか腹が立つてくるな

「いやなんでだよ！」

眞面目にキメたはずが、結局普段の会話と同じようになつてしまつた。

まあ、これが僕たちの距離感だから仕方ないのかも。

「まつたく、キメて損した氣分だ」

「だつて司らしくないんだもん」

失礼な。

僕だつて眞面目にやるときは眞面目なんだよ。

それに、蘭といふと素の自分でいられるから。

「じゃあ、もう変に気取るのはやめにしようかな。笑われるだけだし

「悪かつたつて」

そうやつて、いつものごとく会話をしていると、目的の場所へと到着した。

「着いたぞ。ここだ」

「こゝつて……」

ここはクリスマスパーティーに使つた広いホールだ。

蘭の様子を盗み見ると、なんとなく察していよいよだつた。

「さあ、中へどうぞ」

「エスコート頼むぞ」

蘭の手を取り、扉を開く。

すると、たくさんクラッカーが鳴り響いた。

「「蘭。誕生日おめでとう!!」」

皆で蘭を迎えた。

「みんな……。ありがとう！」

その後は、バースデーケーキを出したり、それぞれプレゼントを渡したり、食事をしたりして楽しんだ。

ジョニー先生もノリノリでダンスを踊ってくれたりした。

僕は、あおいと即興劇をやつた。

僕が怪盗役で、あおいが警察役だ。

僕が蘭を盗みだそうとするが、あおいに阻止されて撤退するという簡単なものだつたけど、イイ感じのアクションで盛り上がりてくれた。

蘭に「お前を盗みに来た」って言つてお姫様抱っこをした時は、女性陣から黄色い声が飛んできた。

それに、蘭も頬を朱く染めながら満更でもなさそうにしていた。蘭を置いて逃げる時、少し寂しそうな顔をしていたのにはちょっと応えるものがあつたなあ。

ともかく、結果的にはサプライズパーティーは成功だつた。

蘭も少し照れくさそうにしているものの、とても楽しめているようだつた。



パーティーが終わり解散となつた。

僕は片付けをしようとしたけども、いちごとあおいにやんわりと止められ、蘭と夜の散歩に繰り出した。

「お前が散歩に行こうっていうなんて珍しいな」

「自分でもそう思う」

「どうせいちごがあおいに言われたんだろうけどな」

「ご名答。さすが親友とあつてよくわかつてらっしゃる」

揶揄い交じりに返事をする。

「3人とも仲がいいよな」

「そうだな」

「あの蘭に友達ができたつて聞いた時は驚いたもんだ」

「私も、あの一人と親友になれるなんて、あの時は思つてもみなかつた。それに……」

「それに?」

ふと蘭の足が止まる。

そして蘭は少し顔を赤らめながら言う。

「お前と恋人同士になれたことでもな」

「違いないや」

↪ side 蘭 ↪

「なあ、司」

「なんだ？」

自然と、胸の内を明らかにしていく。

「私な。職業柄、今までほとんど友達に祝われたことがなかつたんだ」司は黙つて聞いてくれている。

「家族に祝つてもらうことはあつたんだけどな。だけど、この学校に入つてほとんど家に帰れないだろう？」

「つてことは去年は——」

「そう、一人で過ごしたんだ」

それを聞いて、司は表情を少し暗くする。

「別に司は気にする必要はないんだつて。そもそも私が司に誕生日を教えてなかつたんだから」

「でも、祝うくらいできただじやん」

司が食つて掛かるが、私はそれを抑える。

「いいんだ。だつて今日こんなにも盛大に祝つてくれたじやないか」

「それはそุดけど

「じゃあそれで手打ちだ」

これだけ言つてもまだ司は納得しそうにない。

「ただ、それでも司がまだ申し訳なく思うなら、来年も、そのまた先も、私の誕生日を祝つてくれよ。もちろん恋人としてな」

私が全く退かないことに呆れたように、笑いながら司は言つた。

「わかりました、お姫様」

言われてふつと顔が熱くなる。

「お姫様とか言うんじゃない！」

それでお互い緊張が解け、笑い出す。

これでいいんだ。

いや、私たちはこうじやないと。

普通のカップルなら、もつとイチャイチャとするものかもしけない。

でも、私たちにはこの距離感がとても心地よかつた。

「あ、そうだ」

司が私の前に出てくる。

そして、満面の笑みで言つた。

「誕生日おめでとう、蘭」

さつきのは取り消しだ。

もう少し司に甘えてしまおう。

そら「

## スランプ

スランプ。

誰しも聞いたことがあるだろう。

不振や不調が続いたりする状態だ。

人によってその状態がどれだけ続くか違つたり、その抜け出し方も様々だ。

なぜこの話をしているか。

それは単純に俺が絶賛スランプ真っ只中だからだ。

「これも違う、これも違う……。何かが、何かが足りない」

ドレスのデザインを前に、俺は頭を抱える。

このスランプの始まりは、あの瀬名翼の「デザインしたドレスを見たからだ。

ひとたびステージに出れば周りの目を集めれるあのドレス。

恐らく軽い嫉妬も含まれているのかもしれない。

だが、あのドレスを見てからは自分のドレスに何かが足りないよう

に思えて仕方がなかつた。

それからは、デザインを書いては没にしている日々を繰り返していった。

そんな中、ドリームアカデミーから一日講師として来てくれないか  
という依頼を受けた。

なぜ俺が呼ばれたのかさっぱりわからずじまいではあつたが、良い  
気分転換になると考え、僕はそれを受けたことにした。

学生の若い考えは非常に刺激を受けるんだ。

逆に俺が得られるものもあるはずだ。

気持ちを切り替え、授業の準備へと移つた。

△▼△

ドリームアカデミーの教壇に立つて授業を行つた。

思つていたよりも俺は有名人だつたようで、歓待されていた。

講座に参加してくれた生徒の数も多かつた。

ただ、俺のドレスのファンだという生徒が多かつたこともあつて、俺のドレスの模倣で始まつたような作品が多く、刺激を得るには物足りないものになつた。

もちろん、講師としての仕事を全うして生徒へのアドバイスと教育をすることはできた。

でもやつぱり物足りず、ドリームアカデミーの学園長へ学内の見学を依頼した。

「いいわよ。むしろウチの学校をしつかり見て驚いていらっしゃい！」

「は、はい」

なぜか目を輝かせて言われたが、許可を取ることができたので特に不満に思うことなく学内の見学へと移つた。

△▼△

ドリアカにはデザインコース以外にも、アイドルコースとプロデューサーコースがある。

せつかくだから他のコースを見学しようと思つていたが、自分がデザインを生業としていることもあつて自然と足がデザインコースの校舎へと向かつっていた。

「いつけねえ、つい足が向いてしまつた。ただ来てしまつたものは仕方ない。じつくりと見学させてもらおう」

教室内では、デザインの組み合わせについての授業からデザインの歴史まで様々な授業が行われていた。

独学で勉強していた俺はつい見入つてしまつたが、さすがに廊下で見続けるわけにはいかない。

他の教室の見学に移ると、実際にドレスデザインからドレスを作つている教室もあつた。

その教室の中で一際異彩を放つてゐる生徒を見つけた。

「クルクルキヤワワ」

「わあ、すごくかわいくなつた」「でしよう？」

その生徒はほかの生徒たちからアドバイスを求められると、的確に修正点を挙げ、ドレスのレベルを一段階上げていた。

「今度はわたしのもいいかな?」

「ええ、いいわよ。クルクルキヤワワ」

その様子につい魅入られてしまった。

彼女がドレスに魔法をかけているような姿に。

「わあっ、綺麗!」

彼女はドレスに必要なものを的確に足している。

俺には彼女のようないのアドバイスが必要なのだろうか。

「あの、ひとついいかな?」

「はい?」

その思いが強まって、つい話しかけてしまつた。

「俺のドレスに必要なものって何かな?」

常に持ち歩いていたデザイン張を彼女に見せ、尋ねる。

すると彼女は俺のデザイン張を取り、迷うことなく描き足しだす。

「クルクルキヤワワ」

「これは……!」

自分の考えの中にはないアイデアが描かれる様に、思わず俺は声を漏らす。

「どうやつてこんな考えが思い付くんだ! 教えてくれ!」

「……では、その前にこのドレスたちをどうやって描いたのか教えてくれませんか?」

言われたことがいまいち理解できていない。

「それは必要なのか?」

「ええ、ドレスを理解するうえでとても重要なことです」

さすがにそう言わせて答えないなんてことはなく、ドレスのデザインを考えたときのことを話した。

この生地とフリルは似合う、とかリボンの位置はここがいいとか、ドレス 자체に関わることを熱心に。

「なるほど。では、このドレスを着てくれるアイドルについては考えましたか?」

「いや、そんなことを考えたことはない」

俺の答えが気に食わなかつたのか、彼女は呆れたように肩をすくめた。

「それでよく講師が務まつたものですね、影山勉さん」

「なっ!？」

あつて間もない学生から罵倒されるとは思つてもいなかつた。

「まずあなたに足りないものは『ドレスを着てくれるアイドルについて知ること』です。アイドルについて学んでから出直してきてください」

否定できない俺は、半ば逃げ出すように教室をあとにする。

△▼△

↳ side そらく

「……でも、あなたのドレスへの熱い情熱には感服しました」

教室を出ていく影山の背中を見つめながら、小さく口に出す。認められないと思っていた彼を少し認められたような気がした。

## アイドル

イライラした気持ちのまま、アトリエに戻ってきた。

あの女生徒は何だつたんだ。

アイドルについて学べ、だなんて。

何様のつもりだ。

見たところ、学内のデザイン科の生徒の中ではかなりの実力のようだつた。

制作したドレスの一つや二つくらいはあるはずだと思い、すぐさまネット上でドリアカの生徒の作品を探し始めた。

その後思つていた通り彼女の作品を探すことをできたのだが、想定よりも数が多い。

完成度も高く、素直に感服するしかなかつた。

加えて、彼女「風沢そら」はアイドルも兼業しているときだ。

「アイドル、か……」

彼女について調べ、冷静になつた頭で考える。

今までアイドルについて考えることはなかつた。

アイドルはただ俺のドレスを着てくれる人だと思つていた。

「アイドルつていつたい何なんだ」

俺はアイドルについて何も知らない。

ふと改めて画面を見ると、ライブの告知がされていることに気づいた。

「……見てみる価値はある、な」

今までアイドルのライブを見たことがなかつたが、アイドルを知るためにだ。

アイドルのライブというものを見させてもらおう。

△▼△

ライブ会場はそれなりの広さがあるが、ほぼ満席。

ライブの詳細について調べてみると、新たなプレミアムドレスの発表会も兼ねて いるらしい。

「どうりで同業者が多いのか」

時間になり、ステージの幕が上がった。

東洋風の妖艶なドレスをまとつた風沢そらがステージに上がる。

「ララララライ——」

——思わず見とれてしまった。

……これはドレスだけの美しさではない。

彼女とドレスのお互いが高め合い、これほども美しくなるとは。彼女のダンスはドレスをさらに美しく見えるように、彼女のドレスは彼女自身をより美しく見せるように。

「これが、アイドル……」

アイドルはドレスのおかげでステージに立てると思つていた自分が情けなく思える。

アイドル達のパフォーマンスがあつてこそ、ステージで輝けるのではないか？

アイドルという存在について次々に考へることが湧いてくる。

この答えを見つけることができれば、俺は確実に成長できるはずだ。

——そしてアイドルへの探求心も冷めやらぬ間にステージは終了した。

この心の赴くまま、彼女のところへ向かうことを決めた。

△▼△

「失礼します」

「あら、影山さんじやないですか。こんなところまでどうなさつたんですね？」

そらは突然の来訪にも関わらず、なぜか落ち着いて応対する。

「この前、君に言つられてアイドルのことについて調べたんだ。手始めにドリアカ所属のアイドルを調べてみると、なんと君を見つけた。さらに見てみると、なんと近々ライブをするときだ。そこで君の実力を測るという言い方は良くないが、最初はそのつもりでこのライブに来ただんだ」

ついデザイナーとしての説明口調でまくりたてる。

「でも、俺が間違っていた。君の言う通り、俺はアイドルについて知らなかつた」

「つまり……」

学生に頼むことに気がひけるが、腹をくくる。

「俺にアイドルというものを教えてくれ！」

「……」

沈黙が痛い。

「わかりました。あなたにアイドルというものがどんなものか教えましょう。加えて、アイドルにとつてドレスがどういったものなのかも知つていただきます」

彼女とは長い付き合いになりそうだ。

↳ side そらく

影山さんが私のステージを見に来るだらうことはわかつていた。  
ドレスを見ると、彼が自分に正直な人であることがわかるくらいだ。

アイドルを知るという自分の疑問を解消しに来ることは簡単に予想できた。

予想はできていたのだけれど、ここまでまつすぐな人だとは思つてもいなかつた。

ステージから彼を見つけることはできなかつたが、いつになくいいパフォーマンスができたと思う。

なぜだか彼がステージを見ていると考へると、いつもより集中してステージに上がることができたのだ。

この理由はよくわからない。

私もまだまだ学ばなければならぬ。

アイドルとして、より輝くために。

ステージを終え、控室で待機していると影山さんはやつてきた。  
デザイナーの権力を使つてステージを見に来るくらいだ。

ここまで來ることも予想はできていた。

でも、頭まで下げて教えを乞うとは思わなかつた。

彼もデザイナーである以上プライドはあるはずだが、ここまでドレ

スに対して真摯になれるとは思つてもいなかつた。

ドリアカであつたとき以上に、ドレスに対する思いを感じられた。

私は、彼を誤解していたのかも知れない。

## アイドルとデザイナー

風沢のもとでアイドルとは何なのかを学ぶため、またドリアカへ足を運んだ。

芸能関係者を育成する学校である以上、一般的な学校に比べてセキュリティは厳しい。

そのため、校内に入るときに守衛で身分証明ができるものや、招待状のようなものが必要になつてくる。

前回はドリアカ側から許可証を事前に受け取つていて、それを使って入門したのだが、今回は何も持つていない。

さて、どう入門すればいいのやら、となるが、今回は風沢が話を通しているとのこと。

若干いぶかしみながらも風沢の名前を出し自分の身分証を提示すると、問題なく入門することができた。

彼女はまだ学生とはいえアイドルでありデザイナーだ。

根回しという年齢以上の社会スキルを垣間見ることができた。

校舎内に入り風沢の指定した部屋の戸を開くと、三人以上グループになつている生徒が多く見受けられた。

彼女たちは会話に熱中しているのか、俺が部屋に入つてきたことに気づいていないようだつた。

それほどまでに熱中する会話の内容が気になり、近くにいた一つのグループの方に耳を傾けた。

「今回のステージのイメージはこれだから、この曲でこのドレスを着るのがいいと思う」

「その曲だつたら、私はこのドレスをお勧めするよ。最近作つた傑作なんだ」

プロデューサーコースとデザイナーコースに在籍していると思われる生徒が、アイドルコースの生徒を挟んで会話をしている。

「こんなにすごいドレスを着てステージに立てるの!?じゃあ、曲をもっと表現できるようにレッスンを頑張らなきゃ!」

「いいね！じゃあこのレッスンがおすすめだよね」

「気に行つてくれてよかつた。君のために作つて正解だつたみたいだね」

アイドルコースの生徒は、デザイナーコースの生徒が作つたドレスがお気に召したようで、見るからに興奮しているようだ。

ただ、デザイナーコースの生徒の放つた言葉が耳に残る。

「誰かのために作つたドレス、か」

今まで何着ものドレスを作つてきたが、そう言つたことを考えたことがなかつた。

いや、考える余裕がなかつたという方が正しいか。

最初のうちは、自分の内にわいてきたものを形にすることで精いっぱいだつたし、近頃は瀬名翼のつくつたドレスのことばかり考えていた。

まあ、根本ではいいドレスができれば誰かが着てくれる、という傲慢な考へがあつたかもしれない。

そう自責していると、誰かが近づいているのが感じられた。

十中八九アイツだろうが。

「今のでなんとなくわかつたんじゃないでしょうか？」

「まあな」

横に並ぶ風沢の方を見ずに答える。

「言われなけりや気づかなかつた。もつと冷静になれる人間ならこうもならなかつただろうがな」

「それでいいじやないですか。スランプになつたときは、どうしても周りが見えなくなつてしまふのです」

諭すように風沢は言う。

「誰かの手助けでも、一步前に踏み出すことができれば成長だと思います」

「教わることは悪じやないと？」

「そういうことです」

そう言つて風沢は部屋の扉の方へ向かう。  
俺に背を向けながら一言。

「ついてきてください」

そのまま戸を開けて部屋を出していく風沢。

その一言に従わないわけもなく、俺も後を追うように部屋を出た。



連れてこられたのはアトリエ。

誰のかは言わずともわかる。

「ここは風沢のアトリエか」

「そう。ここが私のアトリエ」

所狭しと資料やデザイン案が並ぶも、整然としている部屋だ。

「私が高等部に移るタイミングでティアラ学園長が用意してくれたの」

「学生でブランドを立ち上げたんだ。しかも一躍有名になつたブランドだし、学園としては当然だろうな」

それほど風沢のデザイナーとしての能力を買われているのだろう。才能のある生徒に助力は惜しまないはずだ。

「で、俺をここに呼んだ理由は何だ？」

気になつていた本題をぶつける。

風沢は少し言いよどむようなそぶりを見せたが、俺に相対して言った。

「あなたに、私だけのドレスを作つてほしいの」

まさかの依頼に、俺は一瞬思考が停止した。

「……ちよつとまで。どういう風の吹き回しだ？」

「あなたが成長するためには、実際に誰かを思つてドレスを作ることが必要だと思うの」

「まあ、そうだな」

「けれど、あなたは誰か特定のアイドルを知つてるかしら」「知らないな……」

確かに俺はアイドルのことを知らない。

どんなアイドルがいるのか知らない以上、アイドルのことを思つて作るのは無理だつたのかもしれない。

「あとは簡単。あなたが知つているアイドルは私だけ。そして採点す

るのも私

「無理やりでは……？」

「嫌なら断つてもいいのよ。あくまでも効率的に成長が見込める方法として提示しただけだから」

若干上から目線なのがいただけないが、自分の殻を破るためだ。この際、やつてやるしかない。

「わかった。作ろう」

「決まりね。じゃあ、さつそく私のアイドルとしての指向性を改めて説明しておくわね」

まるで学生に弟子入りしたような感覚だが、現状これが最善策だ。開き直った俺は、アイドル「風沢そら」についての知識を本人から学ぶのであった。

↓ side そらく

断られると思っていた提案に、彼が乗ってくれた。

彼の返事を聞いたとき、なぜか肩の力が抜けたように感じた。

まるで安堵したかのように。

デザイナーを目指したきっかけや、そのボヘミアンのミミさんとのことまで。

それ以上のことも、なぜだか自然と話していた。

彼はドレスのアイデアを得るために、必死で私を理解しようとしている。

それに応えるように、私も伝えられることは何でも伝えよう。

「これくらいかしら。これ以上はさすがに言葉にするのも難しいから」

「そうだな。でも、助かつた。お前、いや風沢が何のためにデザイナーとアイドルを両立しているのかも理解できたと思う」

つい、彼の目を見る。

とてもまっすぐで、ぶれない瞳。

どうして私は彼にここまでのことをしてあげたいと思ったのだろう。

今はまだ、わからない。

## デザイナー2人

新たなドレスを考え始めてはや一週間。

アイデアは出てくるものの、どれもしつくりこない。

「うーん、何かが違うんだよなあ」

「深く考えすぎているんじゃないかなあから」

「そうかなあ」

「デザイン画を前に俺とそらはああでもない、こうでもないといい合う。」

「私が言うものなんだけれど、まず私に似合うものを考えたらどうかしら？ そのうえで、相手が喜ぶものを考えるのがいいと思うわ」

「そうだよなあ……」

「今まで機械的にドレスを作っていたこともあり、その時の癖が抜けなくなっているみたいだ。」

「ビジネスとしてやつていく以上必要なことだとは思うが、そればかりになってしまっていた自分に嫌気が刺す。」

「これはもう根元から叩き直すしかないだろうなあ」

「思つていたよりも根は深いみたいね」

「ちょっと自分が嫌いになりそうだ」

「冗談めかして言うが、そらはけつこう重大に考えているようだ。  
「私について教えられることは教えたつもりなのだけれど……」

腕を組みながら悩んでいるそら。

しかし、急に何かをひらめいたようでいい笑顔をこちらに向ける。  
「影山さん、お出かけしましよう？」

「おでかけ……？」

「そう、お出かけ。外でいろいろ見て回つて刺激を受けられるはず」「いろいろと聞きたいことはあったが、言葉ではなく行動で返されるのが目に見えるから、質問するのをやめた。」

△▼△

ドリア力を出て向かつたのは植物園。

動植物が好きだと聞いていたのもあって、特に驚きはしなかつた。

「クルクルキヤワワ……」

ただ、何かスイッチが入つてしまつてずっとこんな感じだ。

たぶんピンとくるものがあつて、つい自分の世界でアイデアを練つているのだろう。

そらの作るドレスはボヘミアンを意識しているといつていたが、その中でも花や植物が描かれているものが多い。

花に詳しくない俺は何の花なのかわからないが、何か思いが込められているはずだ。

「つ、危ない！」

「ひやつ！」

植物を見る気に割きすぎていたのか、段差で足を踏み外しそうになつたそらの腕をつかむ。

「大丈夫か」

「え、ええ」

スランプ脱出のためにいろいろと教えてもらい始めて気づいたことがある。

彼女は時折、無意識で動くことがあるようだ。

手癖で簡単なアクセサリーを作つてしまふくらいだ。

そのおかげもあつて、比較的少ないレッスンの中でもダンスを習得することができるのだろう。

「足、ひねつたりとかしてないよな？」

「ええ。平気よ」

本当に大丈夫そうな姿を見て、掴んでいた腕を離す。

若干頬が赤いような気がするが、踏み外しかけたことが理由だろう。

あまり女性の顔をじろじろ見ることもばかられるし。

「おや？」

そらの方から目を逸らしたところで、ふと気になる花があつた。

「なあ、そら。この花が何かわかるか？」

「このお花のこと？」

「そう、それそれ」

「これはナデシコね。色もいくつかあって、その色ごとに違う花言葉があるわ」

「花言葉か……」

今まであまり気にしたことがないものだつた。

「意外とそういうものがヒントになるかもな」

「そうね。花言葉辞典があるから、アトリエに戻つたら渡すわね」

「ついでに写真付きの図鑑もあるか？」

「ええ、あるわよ」

もともとの目的から若干ずれているような気がするが、得るものがあつたのは確かだ。

この後もしばらく植物園を見て回り、見たことのない花の知見を増やしていった。

△▼△

「今日はなんだか楽しかったな」

「そうね。私も一人で見て回るより楽しく感じたわ」

結局何かを得たような感覚はなかつたが、まあこういうのもたまにはアリだろう。

「さて、帰つてどうしようか」

「今日知つた花について調べて、何か描いてみましょう」

「そうだな。とにかく一度描いてみるのが大事だしな」

そらとの距離が若干近くなつたような気がするが、まだ相手を理解するというレベルには程遠い。

何を考えてるかわかるレベルまで行かなくとも、せめて相手を思いやれるくらいにはならないといけないだろう。  
まだまだ道のりは遠い。

△▼△

↓ side そらく

私の不注意が原因ではあるが、勉さんに助けてもらつた。

彼は何でもないようなそぶりだったが、私の胸はなぜか早鐘を打つていた。

「大丈夫か」

「え、ええ」

体は問題ない。

ただ、この胸の高鳴りはいつもと違う。

「足、ひねつたりしてないか？」

「ええ。大丈夫よ」

この気遣いが余計に鼓動を高鳴らせる。

勉さんが私を気にしていて、私の気づかない何かがあつたのかと思つた。

だが、勉さんは何事もなかつたかのようにほかの場所を見ていた。  
これはいつたい何なのだろう。

もしかして勉さんに惹かれているのかしら。

中途半端に冷静になりつつ。

一度考えを放棄することにした。

## 気づき

「デザインを考え始めてすでにひと月が経過した。

その間にいくつかデザインを形にしたが、どうも合わない。

「デザイン画ではいいんだけど、どうしても形にして着てもらうと何かごたつとしてしまうな」

「そうね。少し情報が多いかしら」

「となると、何かを減らすべきなんだが……」

花・アラビア模様・鳥の羽など彼女を構成する要素でドレスを作つてみたが、どうしても情報過多に感じてしまう。

彼女はこれを上手くまとめていたのだろう。

「引き算というのも難しいなあ」

「足すことは簡単だものね。きれいなものときれいなものを合わせて配置を考える延長線なのだけれど、一度型にはまつてしまふと抜け出せなくなってしまうし」

本当にそらに必要なものは何なのだろう。

考えるもアイデアが出てこない。

一度頭を休ませることにしよう。

「一旦お茶にしようか」

「そういうと思つて準備していたわ」

「助かるよ」

そう言いつつ、俺は持つてきていたお茶菓子を取り出す。

「用意がいいこと」

「そらが淹れてくれるお茶がおいしいから、お菓子もそれに合うものを、つてね」

最近はこうしてお茶を飲みながら会話することが多い。

もともとは、俺が偶然もらつたお茶をそらに渡したとき、せつかくならここで飲もうということから始まったのだが、今はわざわざそらが茶葉を用意してくれている。

「なんとなくつかめてきたから、あと一押しつてとこだな」

「そうね。パズルのピースだつたらあと一つ三つつてところかしら」

「歯がゆいなあ」

「そうは言うものの、こうやつてそらと話して過ごすことが心地よい。この時間が無くなることが惜しいと思えるくらいに。

「その……もし俺が納得のいくドレスを仕立てた後のことなんだけどさ」

「ええ」

なぜだかスムーズに言葉が出てこない。

「その後もここに来て、こうして何気ない話をしに来てもいいかな……？」

静寂が訪れる。

余計なことを言つてしまつたか。

くつ……氣恥ずかしくなつてきた。

ちらりとそらの顔をうかがう。

呆気にとられたかのような顔だ。

だが、間もなく表情が変わり、満面の笑みに変わる。

「ええ、ええ！ もちろんいいわ」

「そうか！ ありがとう」

そらの答えにホッとする自分がいる。

「でも、そんなことわざわざ聞かなくたつていいのに」

「デザイナーにとつてアトリエって秘密が多いところだろう？ そんなところに用もなく踏み入るのは良くないと思つてな」

俺の言葉に、そらは首をかしげる。

「秘密が多いのは本当だけれども、見ず知らずの人でもない限り立ち入らせないなんてことはないわ」

「それはそうだけど、俺らはデザイナー同士だろう？」

「そんなことは関係ないわ。第一、私たちはもう仲間、友達のようなものでしよう？」

「仲間、友達。」

「デザイナーではない友はいても、デザイナーで友と呼べるような人はいない。」

それに、仲間なんて思ったこともなかつた。

「仲間、か」

「嫌、だつたかしら」

「そんなことはない。ただ、デザイナーの友達、仲間を持つのは初めてでさ」

「あら、そうだつたの」

今思えば、相談ができるようなデザイナーの友達がいたら、これほどひどいスランプにはならなかつたかも知れない。

「デザイナーを志始めてから、自分以外のすべてのデザイナーが敵だと思つていたんだ。身近にライバルになるような人もいなくてさ。だから若干天狗になつていていたところもあると思う」

安心して気が緩んだのか、ふと思ひ出語りをしてしまう。  
「だから、今だから言えるけど、本当はそらに教えを乞うことも屈辱だと思つてたんだ」

俺が愚痴のようにこぼす言葉を、そらは黙つて聞いてくれる。

「今となつては、こうしてそらから俺の足りないものを教えてもらつてよかつたと思つてる。ありがとう」

「！」

……そうか、なんとなくわかつた気がする。

↓ side そら

私はデザイナーとして本格的に活動を始めてからの影山勉しか知らなかつた。

初めて知つたときの周りを敵視する姿や、一部のデザイナーに対しての見下すような態度が気に食わなかつた。

でも、ドリア力に来た彼の姿を見ると、そんな態度のことよりも彼の空虚さが印象的だつた。

どうしてこうも彼はこれほどまで足りないものが多いのだろうと。そんな中彼と直接話す機会を得た。

だから、私は彼に構うことにした。

彼のドレスへの熱意を感じたことも大きい。

けれど今の彼は素直に応じないだろうと予測し、わざと挑発した。

それが上手くはまり、結果として今に至る。

虚ろだつた彼はいつしか色を得て、見違えるような人間になつた。自らの足りないものを自覚し、それを得るために人を、仲間を頼ることを知つた。

もう彼はスランプを抜け出し、素晴らしいドレスが作れるはずだ。方向性を固めればブランドも成立させられるだろう。

…それにに関しては良かつた。

誤算だつたのは、私が彼に惹かれ、恋に落ちてしまつていてことだつた。

彼のドレスへの真摯な態度、ふとした時のやさしさなど、はつきりとわかるところだけでなく、意識しないとわからないようなところでも惹かれてしまつて いる。

だから、彼がここに遊びに来てくれることがわかつてうれしかつた。

極めつけは彼の笑顔だつた。

『ありがとう』と優しく微笑む姿に、つい胸が高鳴つた。  
この思いを彼にどう伝えよう。

## おまけ他

### 司くんの設定十α

氏名：飯島 司（いいじま つかさ）

性別：男

所属：スター・ライト学園男子部（架空）、もしくは四ツ星学園男子部の劇組（架空）

年齢（学年）：作品によつてまちまち（それぞれがパラレル時空だからね）

- ・四ツ星学園に在籍している場合は、基本的に15歳→16歳
- ・スター・ライト学園に在籍している場合は、ヒロインによつて変動
- ・スター・ライト学園所属のアイドルがヒロインの場合（美月さんは除く）：いちごちゃんと同学年になる年齢

・ドリアカ所属のアイドルがヒロインの場合：上に同じく

・WMの場合：WMの二人と同学年

主なアイカツ：特撮ヒーロードラマに出演。それ以外にも演劇やダンスに入れている。

身長：166cm（年齢によつて前後）

体重：56kg（同上）

好きなもの：甘いもの。おいしいご飯。元気な子供たち（園児のこと）。

苦手なもの：辛いもの。

特技：体を動かすこと。

誕生日：7月27日

特徴：中性的な顔立ち。それでいてやや童顔。どちらもコンプレックスを感じてはいるものの、一応受け入れてはいる。どちらかというと身長の低さが気に入らない。これから成長していくのか少し不安になつてている。

基本的には真面目な性格。常識人なためツッコミ側ではあるが、自分が常に常識人がいるとその役割を放棄してボケに回る。少し天然。

人にやさしく、めったに怒らない。

人の世話を焼くことが好き。加えて子供たちが好きなので、子供の世話も好き。  
自分でもおいしい料理が作れるようになりたくて、絶賛料理のお勉強中。

水上バイクと原付二種の免許持ち（16歳の設定時）。

裏話

名前は仮面ライダーに関するところから取りました。

苗字の飯島は、エグゼイド／宝生永夢役の飯島寛騎さんから取らせていただきました。

名前の司は、言わずもがな世界の破壊者さんこと門矢士から取りました。

漢字が違うのはわざとです。名前の全体の雰囲気からこちらが合うと思い、司の字に変えました。

士をイメージしたのは、デイケイドのようにルートの数だけ様々な世界がある、ということが背景としてあるからです。

誕生日は、この小説の初投稿日より決定しました。

おまけ（というか文字数稼ぎ）

氏名：海東大毅（かいとう　だいき）

性別：男

所属：司の所属と同じ

年齢：司と同じ

主なアイカツ；司と同じヒーロードラマに出演。

身長：170cm（年齢により前後）

体重：58kg（同上）

好きなもの・噂話、流行りもの（言つてしまえばミーサー）、司（もちろん友として）

嫌いなもの：他人を蔑む人、

特技：体を動かすこと

誕生日：1月10日

特徴：実は小学校の頃から司のことを知っている。といつても、名

前を知っているというくらい。（クラスが一度も同じにならなかつたから。ストーカーじゃないよ）中学で同じクラスになり、同じ作品に出演したことで親友と呼べる関係まで発展。（言つてしまえば、接点がなかつただけ）

司よりも身長が高く、顔もすらつとしたイケメン顔。  
司の相談役的立場。

#### 裏話

モチーフは司の裏話からも察せられるように、怪盗ことデイエンドの海東大樹から。

士と来れば海東かな、というその場のノリで決めました。  
誕生日はテキトー。

一応、かい（1）とう（10）と読めるからでもある。

# 一周年記念のおまけ “司くん女の子になる”

目が覚めると、女の子になつていきました。

「は？」

よくあるT Sモノみたいに、洗顔をしようとしたところで気づきました。

「どうしたらいいんだ……」

これは司くんが女の子になつてしまつた場合の各ヒロインたちの行動をまとめたものである。

～口ーラの場合～

（司先輩に呼び出されたのは嬉しいんだけど、なんだか切羽詰まつてたなあ。声も普段より高かつたし）

校内のベンチで司を待つ口ーラ。

そこに、綺麗な黒髪の少女が現れる。

「ローラー！」

「？」

自身を呼ぶ声に振り向くと、見覚えのない少女がいた。

綺麗な黒髪を背中の中ほどまで伸ばし、何にも留められることなく風に揺られている。

どこかあどけなさを感じる顔に、知った顔を思い浮かべるが、結局のところ誰かはわからない。

「どちら様ですか？」

「僕だよ。司だよ」

司は自分だということをアピールするものの、学生証を見せるまでは納得していなかつた。

学生証を見せてもあまり納得はしなかつたけれども。

結果：そもそも司だとわからぬ。

～ゆめの場合～

（司先輩から呼び出されたけど、どうしたんだろう。声色も焦つている感じだつたし）

「ゆめちゃん！」

呼ばれた声に振り向くと、どこか司に似た少女を見つける。

「あれ？ 司先輩……の妹さん？」

「僕に妹なんていません！」

「え?! ジやあ、司先輩なんですか?!」

「僕に妹なんていません！」

まさかの事態に少し困惑する。

でも、もしやこれって……。

「先輩、男子寮だいろいろ不都合じゃないですか？」

「いや、それはそうなんだけど、それより元に戻る方法を——」

「それじゃあ、私の部屋に行きましょう！」

そう言いだしたゆめちゃんに、司は腕を引かれて部屋へと連れられる。

結果：消去法的に気づき、ここぞとばかりに部屋へ連れ込む。

（香澄姉妹の場合）

（頼れる相手がこの2人しか思いつかない……。でも、何をされるかもうすでに予想できてしまう自分が怖い）

「ねえお姉ちゃん。あれって司先輩じやない？」

「あら、そうね」

「あ。お、おはようございま——」

（僕があいさつを返し終わる前に、二人に捕まつた。

「女の子になつちやつたのねえ」

「こんなこともあるのね」

二人の目が怖い。

まるで野獣の眼光みたいに光る。

このあとどうなるかは、わかりきつたことだつた。

結果：パッと見だけで気づき、その後目を輝かせながら司を着せ替え人形に。

（セイラの場合）

（司から通話がかかってきたけど、声の高さがいつもと全然ちがつたな。いつたいどうしたんだろう）

「おーい、セイラー」

声がした方を見ると、見たこともない女の子の姿があつた。

でも、聞き覚えのある声だ。

「まさか、司なのか……？」

「そうだよ！」

気づいてくれたことが余程うれしかったのか、司は目にすこし涙を浮かべる。

「気づいてくれてよかつたあ！」

「私は耳がいいからね。それで、これからどうするの？」

「実は、全く考えられなくて。こうなつてしまつたことで頭いっぱいになつちやつてさ」

司は少し恥ずかしそうに頭を搔きながら言う。

「じゃあ、とりあえず私の家においてよ。パフェでも食べながらじっくり考え方よう」

「うん。そうする」

その後、セイラは司を落ち着かせるためにいろいろと気を利かせるのだった。

結果：声で気づき、眞面目に面倒を見る。  
～みくるの場合～

（司から緊急の連絡だなんて珍しいな。声が変に裏返るくらいのことなんだろう）

「みくるー！」

みくるを呼ぶ声がする。

無意識的に、おそらく司だろうと判断したが、見た先には別人がいた。

「……誰？」

「僕だよ。司だよ！」

別人だけど、どこか司らしさも感じられる。

「本当に司なの？」

「そうだよおー」

「じゃあ、学生証見せてよ」

みくるの言葉に応じ、司は学生証を見せる。

その学生証でようやくみくるは納得したみたいだ。

「これはまた災難だねえ」

「災難というか、僕の人生がまるつきり変わってしまうほどの大事件なんだけど」

他人事のように笑うみくる。

「まあ死んだわけじゃないし、なんとかなるでしょ」

「それはそうだけど……」

「じゃあ問題ないじやん。さ、どうせ今日は暇だらうからお店の手伝いしていいってよ」

普段と変わらないみくる手を引かれ、いつものガーデニングショップへと向かうのだった。

結果・直感的に司に気づき、普段と変わらない態度で接してくれる。  
（司くんが一大事つて言つてたけどどうしたんだろう。とりあえず言われたまま来たんだけど……）

「おーい、あおいー！」

聞きなれない声に振り向くと、あおいからして初めて見る女の子の姿があつた。

「ええっと、どちら様？」

「僕だよ。司だよ」

まさかの答えに頭が一瞬フリーズするも、所々の特徴が司と同じだつたため納得がいく。

「えっと、本当に司くんなんだよね？」

「うん。なんなら学生証もあるよ」

そこで、ふとあおいの頭の中に欲望が目覚める。

「ねえ、司くん」

「なに？」

「もつとかわいくなつてみない？」

結果・類いまれなる観察眼によつて気づき、女の子としてかわいがろうとする。

（ツバサの場合）

「えーっと、君が司だつていうのか？」

「うん」

「ええ……」

突然の連絡に飛び出でてみると、かわいらしい女の子がいた。

そしてその子は、自分自身をツバサの彼氏である司だというのだ。

「何か証拠はないのか？」

「えーっと、学生証とか？」

「他にはないか？ 例えば私と司しか知らないようなこととか」

「……人がいないとき、ツバサは甘えん坊」

「ツ！」

自分で訊いておきながら、恥ずかしさに悶えてしまう。

「と、とりあえず司だとというのはわかつた。だから、これからどうするのか考えよう」

自分で話を変え、これからを考える。

まともに考えるといろいろと問題が山積みだ。

結果：確信を得るための質問で自爆するも、司だとわかる。その後真面目に解決策を練る。